
創造と干渉力（マブラヴ編）

ZERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

創造と干渉力（マブラヴ編）

【Nコード】

N64170

【作者名】

ZERO

【あらすじ】

消滅寸前だった賢次は創造神に助けられ、彼女の仕事を手伝うことになったが、勤務地がマブラヴ オルタネイティブの世界。ちよつとまで助けてもらって死亡フラグの世界、おまけに能力で軽減されているとはいえ世界の干渉によって邪魔される恐れがあるだと、これではへたすれば彼らを助けられないではないか。ならば運命を変えるためには裏方しかないじゃないか、どないせいちゅんねん。

作者は初投稿なので温かい目をお願いします。

現在、企業編に突入しました。

1部・助かったけど死地に跳べだとなんでやゝ（前書き）

はじめましてZEROです。初投稿なので温かい目をお願いします。

1部・助かったけど死地に跳べたとんでや

1部・助かったけど死地に跳べたとんでや

「えーと、ここどこ？」

眼前を灰色の何もない空間が、ただ延々と続いていた。

「絶対に夢だよね。じゃなければ、こんなところ存在しないよな。普通（汗）」

半ば途方に暮れながら灰色の空間を見渡していたが。

「悪いけど、夢でもあなたの住んでいた世界じゃないわよ。」

突然、静かでよく通る声が彼の背後で聞こえてきたので、びっくりしながらも振り返ってみると銀髪の女性が立っていた。

「ふう〜ん。ここに元人間が来るなんてはじめてかしら。」

小悪魔的な微笑みを湛えながら女性は笑っていた。

「えーと、何を言ってる以前に、ここどこですか？」

人がいる安心感半分、未知の焦り半分でしどろもどろになりながらも彼は聞いた。

「ここは、私が作る前の世界。大雑把言えば家を建てる前の土地といえは分かるかしら。」

「えーと、すいません意味が分かりません。（おいおい、なんかカルトか何かに連れ去らわれたのか。俺）」

「言っておくけどカルトじゃないわよ。現実よ。」

少し呆れながら言ってきた。

「そうねえ、じゃあこれは」

女性が言うと灰色が一転、暗黒に変わり見渡す限り太陽や彼も見ただこともないような惑星が現れたり見たことない生物や機械が出たり消えたりしていた。

「え、え、え、何じゃこりゃ！」

「（まてまて映画、夢。いやあまりにも現実だし見たこともない。とすれば現実しかないよな。たぶん）」

「今のは、数多く存在する世界の一部、そしてそれぞれの可能性」

「自己紹介するわね。私はフィリス、貴方たちの言う創造神というところかしら。で、あなたの名前は？」

「あ、俺の名前は秋津賢次」

もう驚きを通り越してボーゼンしていたが何とか名前を言った。

「賢次ね。よろしく」

微笑を浮かべながらフィリスは言った。

「よ、よろしく」

半ば顔を赤くしながらも挨拶していた賢次であった。

「あの、フィリスが創造神なら俺を元いた世界に帰してくれない。」

「悪いけど無理よ。だってあなた、死んだ上に私に接触したもの。」「苦虫を噛み潰した顔でフィリスは言った。」

説明中……

「要訳すると自分は死んで、何らかの形で魂のままフィリスの創る直前の世界に迷い込んだせいで、元の世界の輪廻からはずれた上に、ほとんど俺の魂が消滅寸前だったため、フィリスが受肉してくれたということですか。なるほどシャレにならない状況だったのですね俺は、ハハハ」

思いつきり冷や汗が出たよ。フィリスが命の恩人ならぬ魂の恩人ですな。

「消滅を食い止めたのはよかったのだけど。私が助けたことでつながり持ってしまった。そのせいで、私の眷属の状態なってしまったからの。本当、ごめんなさい。」

すこし泣きそうな声で言いながら彼女は頭を下げた。

「いやいや、フィリスが助けてくれてなければ、本当の意味で死んでいたんだ。こちらが感謝しなければおかしいよ。」
焦りながらいった。

「ふふふ、ありがとう賢次。」
と微笑みながら言った。

「ところでフィリス、これから俺はどうすればいいの？（何でだろう、いいように丸め込まれた気がする。）」

「そうねえ。私の眷属になってしまったから、世界の管理を手伝うことになるけど。いいかしら。」

「わかった。手伝うよ。」

「じゃあ。最初の仕事だけど、マブラヴ オルタネイティブというゲーム、知ってる？」

フィリスは笑顔で聞いてくる。

「あ、ああ、一応知っているが。（えーと、なんと答えればいいんでしょうか確かBETAさんという地球外生命体が攻めてきたといふべきなのか、恋愛原子核といふべきなのか、オルタネイティブ計画、すごく説明しづらいよ。それ以前になぜそのゲーム。なんかいやな予感がひしひしくるんだが）」

「知っているなら問題ないわね。そのマブラヴの世界に行ってもらいたいだよ。」

「ちょくマブラヴ オルタネイティブの世界なんかには逝ったら、命がいくつ有っても足りませんよ。（ちょっとまで本当にシヤレにならないぞ。）」

「安心なさい。仮に死んでもここに帰ってくるし、常人より身体能力が上がってるし、能力をつけて送るわ。」

「おゝさすが創造神見直した。で、能力は？」

「能力はくそうねえ。あの世界は機械文明だから人類の英知と環境設定という能力でいいかしら？」

「えーと、どういう能力なのでしょう？」

「人類の英知はあらゆる世界、過去、未来、現在における人類が培った技術がある程度自由に創造できる能力で環境設定は世界をある程度干渉ができる能力といったかしら。」

「反則能力というのは分かったけど、ある程度なの？」

「その理由はおいおい分かると思うけど、大まかに3つあるの。1つ目は世界のルール、これは科学文明しかない世界に魔法が存在してはならないとかね。2つ目は世界の修正、絶対に死ぬ運命の人間が仮に生き残っても、何らかの形で運命によって死んでしまうの。そして3つ目に平行世界化、仮に1つ目と2つ目の条件を仮にクリアしても世界は防衛策としてもうひとつよく似た世界を作るのよ。それら対策に環境設定という能力がつくのだけれど賢次は私の眷属に成り立てだから世界から、少々干渉される恐れが出るの、最後に主人公たちには、極力接触し過ぎないでね。干渉される恐れが出るから、一応気をつけて。」

「わかった。気をつけるよ。（すごく無茶なこと言われている気がする（汗））」

「ゲートを開けるわ、行きたい座標と時間を思い浮かべてゲートを潜って。じゃあ、いっていらっしやい。」

俺の目の前に黒いゲートが出てくる。

「いってきます。」

こうして俺は死亡フラグ満載の世界に飛び込む羽目になった

1部・助かったけど死地に跳べだとなんでやゝ（後書き）

感想や批評等をお願いします。また、改善点や追加してほしい事柄などありましたらお願いします。

2部・ゲート抜けるとそこは雪国でした（前書き）

戦術機のせうどころか、MSのMでさえ出てきません。
申し訳ないと思いますが続きをどうぞ。

2部・ゲート抜けるとそこは雪国でした

2部・ゲート抜けるとそこは雪国でした

「ここが麗しの横浜基地」

「これはすごいあたり一面、銀世界ではないかハハハ」

ゴー、ゴー、ゴー　ゴー　ゴー

「ちゃうわー寒いじゃない、痛い痛い痛い、しかもなんですかこの風は、台風かこれは死ぬ死ぬ。」

その賢次は、当たり一面氷の世界にしかもブリザードの中をほぼ薄着で、突っ立っていたのである。

「死ぬゝええい環境設定、地面を掘削。居住スペース確保開始」
3分後、何とか完成させたが悲しいかな身体が半分凍っていたりする。

何とか復活し地下の居住スペースを確保して能力で暖房器具出して冷えた体を温めていた。

「し、し、し、死に掛けたゝ。しかし、いくら転移の指定場所とはいえ朝鮮の人気のない山奥でいくらなんでも、この寒さはおかしいでしょう。あれ、でもおかしいな山奥のはずなのに木も無い平坦な所だし、それ以前に地面が氷だし、確かゲートを潜るとき思い浮かべていたのは、1998年の光州作戦発動10日前に調整して、その準備と作戦支援を行えるように朝鮮半島中部の山奥を思い浮かべたのにおかしいな。」

「とりあえず確認のため外の気温と風速と電波を調べて見るか。」
温度計と風速計を持って外に出たが、やはりブリザードの中を立つことが不可能になるぐらいの風と雪が身体を痛めつける。まず、能力で小型アンテナを建て、ようやく風速計を固定できる場所を見つけ固定し数値を見ると風速計は48・1メートル毎秒となっていた。

「これはまた、えーと温度計はマイナス51・・・。うん、一旦戻ろう」

顔を凍り付かせながら足早にベースキャンプに戻った。

「これで分かったことは、少なくとも日本でも朝鮮半島にいるわけではないな。気候が違いすぎる。その上に周りに短波電波等がほとんどないことだな。どちらにしても、ブリザードが治まるまで少しの間、休むしかないか。」

補足すると先ほど観測前に能力でブリザードを干渉して消せるかどうか、かんばつてみてみたが徒労に終わっている。

次の日、ブリザードが治まり快晴とは言えなくも、雲の間に太陽が顔を覗かせていた。

「これで何とかなるかな。えーと、お手軽衛星キットと。しかもなんだデザインがミニサイズH2 Bロケットなんでしょう？えーと説明書には別の世界の2870年代の日本の子供用玩具で、しかも性能は型落ちとはいえ、この世界のロケットと衛星も含めて600年分の性能差がある。しかも衛星を展開すると全長30cmになり当時最新技術を贅沢に組み込んだ型で、超小型のため省エネに優れ隠密性にも優れている。なるほどねえ玩具にしてはよくできてる、

しかも復刻版で書いてある。（当時の子供に人気有ったのか？）」

「じゃ、組み立てますか」

ミニH2 Bを組み立て2mの発射台に置くと発射カウントダウンの準備を終えカウントを開始する。

「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、0 イグニッション」

発射台を離れぐんぐん高度を上げていくミニH2 B、やがて見えなくなるのを確認すると、ベースキャンプに戻った。

パソコンを起動し衛星の情報をキャッチすると現在地を確認する。

「おいおい、北半球でもなく南半球で、しかも現在地が南極の南極点南西10km地点やねん。」

冷や汗が出てるよ現在進行形で。

それから衛星は情報集めて、まとめるとこんな感じである

- ・ まず、飛ばされた世界の年号が1995年であること
- ・ 現在値は南極の南極点南西10km地点にいること
- ・ オルタネイティヴ4が国連で採用されたこと
- ・ このことによりオルタネイティヴ3が接収されたこと
- ・ 西アジア地域の戦線が膠着状態のとのこと

現在、分かる範囲での情報である。

「うーん、転移した際に時間も場所が大きく違うということは、世界に干渉されたと考えるのが妥当だけど。本当なら1998年に介入して帝国を支援しつつ、BETAの本土上陸のドサクサに紛れて帝国工廠と香月夕呼に秘密裏に技術提供してから、1999年の明星作戦の悲劇を止めたかったんだよね。環境設定があるとはいえ、大きく動けない上に主人公達の接触は干渉されてしまう恐れがある

し。どうしよ、完全に予定にないことが起こった。」
その後、大きくため息をついてしまった。

「仕方がない。しばらくは南極点を中心に地下要塞化と兵器生産開発を進ませつつ、時間が有れば他国の企業に接触を図るか。どこまでなら、能力が使えるか確認もしたいし。」

こうして俺の南極地下要塞化の計画が発動した。

2部・ゲート抜けるとそこは雪国でした（後書き）

勢いあまって書いてしまったけど、ぜんぜん進んでないな。

感想や批評を有りましたらお願いします。

外部・創造と干渉力の設定（前書き）

もう少し登場人物が出てから書こうと思いましたが、設定を先に先に書かさせていただきます。

本編は？

申し訳ありません。もう少しお待ち下さい（汗）。

外部・創造と干渉力の設定

外部・創造と干渉力の設定

秋津賢次

種族 元人間

年齢 18

容姿 178cm、黒髪、世間一般的な少年、イケメンではない

現状

魂のままフィリスの創る直前の世界に迷いこみ、消滅寸前のところを助けられたがフィリスの眷属になってしまう。

一応、助けられた恩と眷族の仕事を全うするためマブラヴ オルタネイティブの世界に行くことになる。

能力

身体能力・フィリスの眷属になっているため。当然ながら常人の10倍のステータスになっている。

環境設定・世界をある程度干渉ができる能力で唯一世界の干渉を防ぐことができる。また、彼が異世界に存在し続けるために必要な能力で、しかも常時発動状態でなければならぬ。また、特定の人物に接触しまうと能力に大きな乱れが生じ世界の干渉される恐れがあり、接触した人物にも影響が出る可能性がある。（間接的には問題はないが。）

当然、能力の使用方法によっては身体の負担が大きいため非常に燃費の悪い能力でもある。

人類の英知・あらゆる世界、過去、未来、現在における人類が培つ

た技術がある程度、自由に創造できる能力で環境設定のおかげで世界の干渉はほとんどないため、人類の英知は兵器や技術は種類によつてはきちんと希望通りの物が取り出せる。しかし、ほぼ強制的に世界のルールが適用されるため取り出せないものも多くある。

現在の制限

- ・世界を破壊する者、グランゾン、アストラガンやデススターように一機、一隻で星や銀河の破壊につながる兵器または技術等は取り出し不可
- ・G弾、ナノマシン兵器やBC兵器等の使用不可、Aは種類によって可能（放射線対策があるため）
- ・異世界の魔法と呼ばれる物の使用不可
- ・ゲッター線等の未知のエネルギーは使用不可
- ・同じ物でも取り出せる量が限られている。加工前の合金やパーツ、資源に関しては無制限である。

フィリス

種族 創造神

年齢 確認不可（世界の創生期以前から存在しているため）

容姿 173cm、銀髪ロング、切れ目の知的感じの女性、豊満に近い身体

現状

世界の創造と管理、破壊を担っている存在で、偶々彼女のいる世界に迷いこんだ彼が消滅寸前だったため眷属して助けた。その後、彼の初仕事にマブラヴ オルタネイティブの世界に行くことを告げるが本来の目的については、まだ明らかにされていない。

能力

創造・とにかく何でも作り出せる能力で彼女の仕事である世界の創造やルールを作るのを主にしている。

破壊・言葉通り何でも破壊する能力で問題のある世界を消滅させるが主であるが、基本的には使用されない

世界の干涉

基本的に3つのルールが存在し、世界のルール、世界の修正、平行世界化がある。フィリスがルールを作り管理を行っているシステム。このシステムは、フィリスが作ったそれぞれの世界のルールを無視する存在、イレギュラーを排除するシステムで、すべての存在に適用される、当然、創造主であるフィリスは別でその眷属である賢次はまだ、未熟なため環境設定でサポートはされているが、なんらかの形でシステムに引つかかる恐れがある。

なぜフィリス本人が、システムに干渉しないかは、世界の崩壊につながる為であるが、基本的に彼女がめんどくさがりやとも言えるかもしれない。

外部・創造と干渉力の設定（後書き）

初期設定でした。

アンケート何ですがルートが3つありまして。

1つ目は一企業として世界に介入するルート

2つ目は政威大將軍殿下に接触し帝国の技術面をサポートするルート

3つ目はアメリカ内部に入り込み反第五計画の組織を立ち上げるルート

一応、主力兵器採用と他国の企業の接触編が終わるまでは感想でアンケートを採りたいと思いますのでお願いします。

感想や批評がありましたらお願いします、

3部・凍った地面を掘削するのは困難だよね（前書き）

なんか、本編方面のマブラヴの話が全然出せない。
申し訳ない。今回も、ぐだぐだが続きます。
では本編を。

「ふゝ、疲れたゝ何とか100m地点まで掘り進んだことだし、後は区画の確保と仮設基地と工場設営か。」

賢次は、作業用ロボットと大型掘削機を使用しながら区画を掘り上げていき、最終的に基地と工場を作るだけの十分な広さの区画が出来上がっていた。

「えーと、まず、基地設営資材と工場資材を取り出して、環境設定でいじりつつ作業用ロボットにサポートしてもらいながら建設しますか。」

設営中……

「よしこれで一時的に完成と。」

目の前には、780m四方の立方体状の基地が建っており、隣の区画には巨大工場群が完成しつつあった。

「しかし、本当に反則だよな、きて二ヶ月もたっていないのにここまでやるのは、この世界の技術では、まず無理だよな、ハハハ。」
賢次は少し苦笑いを浮かべながら呟いた。

「さて、一人での管理は行き届かないから、基地、工場の管理システムの構築だけど。人工頭脳ですべての管理運営を任せたほうがいだろうな。いつも、南極にいるわけじゃないし、何とか全世界に技術が行き渡るようにしたいから生産工場の増設も行わないといけないか。防衛部隊の創設。課題が多いなあ。」
苦悶表情を出しながら言った。

「後は、どこの世界のいつの時代の人工頭脳にするかだな、基地も大きくなるし、データ処理や情報のリンクも必要だろうし、工場の管理・建設、区画の増設整備もいるだろうから、できるだけ高性能のほうがいいな、しかし、自我があつたら困るな。スイネット見たいなことになったら目も当てれん。」

とりあえず、人類の英知を起動し、目的のものを探す。

「結果、該当数78万6890件を確認、そのうち軍事、生産、開発、大都市を管理でき、なおかつ自我がないで検索、えーと該当数1万5123件。まだ多いな。」

「まだ付け加えるか、えーとまず、大きさ10m以内でかつ高速英算処理ができ増設とアップデートと学習能力と安全装置もつけるかこれで検索、該当数1件、おお絞り込めた。これに決めるか。」

最終的に決まったのは、見た目がドラム缶を二倍に大きくしたような。透明な青い宝石の円柱の人工頭脳が出てきた。

「えーと。取り出したのいいけどなにこれ。ラ エル先生の出来損ない見たいな、人工頭脳？」

半ば啞然としながらも説明書を確認した。

「えーと。連邦軍製汎用型人工頭脳 型式 12218タイプで主に惑星開発と管理を主な役割としてるが、汎用性を高めるため艦隊、機体運用、軍事兵器の開発、生産などのほぼすべてが一機で、できるように設計されている。」

また、自己進化プログラムを持ち問題が発生しても対処プログラムによって処理され、同じ問題が発生させないようになっている。安全装置は管理者と登録者を絶対とし管理者と登録者が死亡した場合には連邦の関係者で再度登録が行われる。

データがある一定量たまると容量増加のため大きくなる性質を持つ

なお、このタイプの他に姉妹機として赤タイプが軍、艦隊、機体運用。緑タイプが惑星開発と管理都市開発特化型に分かれており、それぞれ特化タイプであるため汎用型より若干性能が高い。」

頭の中に声が聞こえてきた。

「起動を確認しました。用件をどうぞ。」

「あゝ登録を行いたい。」

「確認……。新規IDとパスワードを登録するため、名前を言
ってください。」

「名前は秋津賢次。IDナンバー1995021A、パスワード

「確認……。IDとパスワードが登録されました。身体をスキャン中……。登録しました。」

「現在、管理者が空席になっており、自動的に管理者は秋津賢次様となりますが、よろしいですか？」

「うん管理者になると、どうなるんだ？」

「管理者は命令権の行使が可能となり、本機の起動、停止が可能となります。管理者が死亡した場合は、別の登録者に管理者の権限が移ることになります。また、登録者がいない場合には本機は、停止し次の登録適合者が現れるまで起動ができません。」

「なるほど。わかった管理者で登録してくれ。」

「確認……。登録が完了しました。本機の初期設定を開始します。」

「完了……。問おう。貴方がマスターか？」
頭の中に凜々しい女性の声が響いてきた。

「なんでや〜。」
賢次のむなしい声が地下道を木霊させていた。

3部・凍った地面を掘削するのは困難だよね（後書き）

さすがに、賢次一人でというの面白みが欠けるため、ヒロインではなくパートナーという形で出してみようかと思っています。

さすがにネタに走りすぎた。自問自答しているところなんですが、さすがにあの名前したらいろんな意味でまずいので、性格も含めて似ているのかな？に完全に変更するつもりです（汗）。

感想と批評がありましたらお願いします。

いろいろ、話を入れたい今日この頃です。

原作とオリジナルのコラボや完全オリジナルの話を入れるのはいいのですが、後は作者の実力次第ということですね。

一応、構想は練ってはいますがそれを表現する。

なんとか、頑張ってみようかと思っています。

では続きを。

4部・世界の技術に合わせるのは、思いのほか難しい　　前編・・・

・ 4部・世界の技術に合わせるのは、思いのほか難しい　　前編・・・

「えーと、なぜ某騎士王みたいなセリフじゃなくて、なぜ自我を持っているんだー。確か検索には自我を持たないと検索したではないか。欠陥だー世界の干渉だー。」
頭を抱えながら叫んでしまっていた。

「主よ、落ち着いてください。本機は主の持つ環境設定能力で性格設定が自動で行われたのです。ですから主の願望を本機が読み取って、主の理想の女性の性格に近くするため、この性格が選ばれたのです。」

頭の中ですこし凜々しい声が響く。

「えーと、つまりもとの設定は自我がない状態で起動したけど、つまり俺の能力を意識的か無意識に使われたせいで、俺の願望で性格設定がされてると？」

啞然としながらも何とか聞き返す。

「そうです、ですから通常本機は自我がない状態で作業が行われるのです。本機が欠陥や世界の干渉のせいではありませんよ。」

「そうですか、俺のせいですか。俺のせいですか。そうですか。二回言いましたよ。まったく」
半ばあきらめモードでいった。

「ですから、主よ。落ち着いてください」

「はあく取り出した物の条件自体は、一番最高の人工頭脳だから良いけど。自我を持っているから管理者を無視してス イネット化したらまずいんだけだな。」

こめかみを押さえながらも言った

「それは、絶対にありません。私は主の命令に絶対なのですから」

「まー、予想が反転して自身に帰ってきたみたいな感じだけど、諦めるしかないか。じゃあ、南極基地、すべての管理を任せることになるけど良いかな？」

「分かりました主よ。では本機の名前を付けてほしいのですが。さすがに型式では問題としますので。」

「名前か、少しまってくれ。」

思案中……。

「アイリス、いやアリスで良いか？」

「アリス。ありがとうございます。主」

「アリス。その、主というのはやめてくれ。さすがに困る。」
すこし、怪訝な顔を浮かべながらいった。

「いえ、主は主です。そう呼ばせてください。」

少し強い口調が響いた。

「じゃあ、命令。次からちゃんと賢次と呼ぶこと。」

困りながらも強めに言った。

「しかし」

困り声が響いた。

「命令」

「わかりました、賢次。」

「うん、これからよろしくアリス。」
微笑を浮かべなら言った。

「はい、よろしく願いします。賢次」
優しい声が響いた。

数十分後

広い会議室に一人、その異様な雰囲気の中央に大型ディスプレイが輝いていた。

「ではまず、現状の把握を行いたいと思います。では、アリス君、こちらの状況と世界の状況について報告を。」

ディスプレイから南極のデータと各国のデータが出てくる

「はい、まず南極基地の現状について報告させていただきます、現在、我が軍は南極点南西10km 地下100m地点に基地が1棟を中心に未稼働の大型工場が数棟、のみという状況です。

現在は今後を踏まえて、区画の増設作業を行なっていますが、なにぶん、作業用ロボットと掘削機の数が足りずおもいほか各区画の作業に遅延が見られることです。よって、作業用ロボットの増産が急務だと考えられます。また、生産工場増築、基地要塞化を含めてき

ちんとした区画の整理とインフラ整備が必要だと考えられます。」

「うーん、能力で広げる方法も良いけど。基地が大きくなれば、俺一人じゃ、とても手は足りないだろうな。区画の整備は計画をまとめつつ、おいおい考えたほうがいいか。」

「次に世界の状況についてですが、BETA戦線からですが、衛星の情報によりますと、BETA戦線について、現在は多くの戦線で硬直状態がつづいていますが、いつ敗れてもおかしくない状態になっているようです。また、多くのベテラン衛士の損失がみられ、各戦線に補充兵を送っているようなのですが、新兵が多く。また、酷い所では学徒動員までされている始末のようです。」

次に各国の1995年現在の生産状況ですが、長きにわたる戦争で生産が追いついていない、とのこと。民生品に関してですが多くの方面で不足気味で国民に満足に行き渡っていない事です。ですが、アメリカ国内に関しては別で民生品に関して問題ないのですが、兵器輸出において生産が追いついていないようです。

次に、食糧分野に関してですが、現状では予想以上にひどい状況のようです。まず、食料に関してですが、BETA戦争の影響で各国では天然の食料の生産が追いついていないようです、その代替として合成食料が多く、国で消費されているのですが、その合成食料も生産が追いついていないらしく一部では多くの餓死者や暴動が起きている様子です。アメリカに関しては天然食料を自分で確保が可能です。そのため合成食料はあまり使用されていないようですが。

次に兵器分野においてですが、アメリカがF-15E ストライクイーグルの配備を開始したようです。

また、戦術機に關してですが第二世代機を主軸に第三世代機の配備を急いでいるようですが。生産ラインがまだ完全ではないようで、当分間は第二世代にシフトを図るようです。以上です。」

「うーん、現状においては予想以上にひどい状況みたいだけど。よく、これで最終的に勝ったな。ジオンが連邦に正面きって挑んでる状況だぞ、これ。それにアメリカは、この世界でもリアルチートですか、そうですね。ハハハ」

苦笑いを浮かべざるえんぞ、これじゃあ。

「ですが、賢次。我々が加わることで、一気に覆すことも可能だと思いますが？」

「確かに覆すことも可能ではあるとおもうが、我々が介入しても干渉で、最低でも歴史の出来事は確実に起こるとおもう。どこまで歴史を覆すことができるかわからないけど。」

「世界の干渉ですか。ですが賢次、たとえ無理でも行動しないより行動したほうが良いと思いますよ。」

「元よりそのつもりだ。絶対は約束できないから、できるだけ彼らの運命を変えてみせるさ。そうじゃないと、寝覚めが悪い。」

「その意気です、賢次。ですが、この場合絶対の方がいいと思いますか？」

「俺の考えでは絶対なんて確実性が高い時に約束するときかな？俺一人では救える人も限られると思うし。自分ひとりですべての人を救うなどおこがましいと思うからかな。まあ、最善を尽くすよ。だから、アリス。君も手伝ってくれると、うれしい。」

すこし照れながらも言った。

「わかりました。賢次」

優しい声が響いた。

「じゃあ、次の事案に移るか。各国に供与する兵器、技術並びに我々の主力兵器採用計画に移る。」

「賢次、提案があります。」

「何だ？」

「まず、各国に供与する兵器と技術に関してですが、この世界の技術者でも開発、生産を可能し易い物でないといけません。理由としては、まず、賢次の能力では取り出せる物によって限りがあること、世界に我々の兵器と技術を行き届かせるには、時間的余裕がないこと。次にあまりに行き過ぎた技術は、今の人類では破滅に導く可能性が高いこと。最後に能力の行使のしすぎは賢次の身体に負担が大きいことが、挙げられます。」

「なるほどね。現在では、時間的余裕はないな。それに最初の目的だった、朝鮮半島撤退支援作戦・光州作戦発動まで、3年を切ってしまったっているわけだし。いくら、生産設備を広げるとはいえ、世界に技術を行き渡らせるには、ここの設備じゃ、まだ不可能だな。能力だって有限だし。」

「そうです。続きですが我々の主力兵器に関してです、現在、メンバーには私と賢次しかいないため、必然的に私が兵器の全て管理と運用を行うと思います。よって、兵器を無人兵器部隊にした方が、全ての部隊の運用で効率적と考えられます。」

「確かに、メンバーは俺とアリスしかないし、俺は管理と運用に

関しては素人だしな。それはアリス任せようか、運用兵器は無人機・
・・・MDシステムかな、ビルゴ、トールス。ここで自律システム、並びにアリスの指揮、運用、戦術、諜報……。なんか、そのままでもBETAに勝てる気がするのだが。」
何でだろう、冷汗が止まらないのですが。

「ありがとう、賢次、そのMDシステムと私とをリンクすることで、無人機特有の動きを無くすことで、より人間に近い動作に行うことが可能です。また、情報の共有並びに戦術方法の構築が可能となり、より高度な作戦運用が単体でも可能となります。」

「ハハハ、反則は、俺じゃなくアリスのような気がする。まあ、いか。じゃあその提案を入れつつ計画を進めるか。」
冷汗が冷汗が―

「はい」

こうして、アリスの提案を踏まえつつ、俺は供与する主力兵器と技術の計画と我々の主力兵器計画の修正をおこなった。

名前はアリスに決まりました。理由としては 方ゲフンゲフン（性格もにでないじゃん（汗））は関係なくて。まだまだ、ずくと先なのですが賢次の後の搭乗機体に関係しています。

ここまでいったら賢次の後の搭乗機体は何なのか大体お分かりになられた方も多いと思いますが、出てくるのはまだまだ先なので、頭の隅に置いてくださればと思います。

また、外部でも書かれたアンケート何ですが、また記載させていただきます。

ルートが3つありまして。

1つ目は一企業として世界に介入するルート

2つ目は政威大將軍殿下に接触し帝国の技術面をサポートするルート

3つ目はアメリカ内部に入り込み反第五計画の組織を立ち上げるルート

一応、主力兵器採用と他国の企業の接触編が終わるまでは感想でアンケートを採りたいと思いますのでお願いします

最後に感想または批評がありましたらお願いします。

5 部・世界の技術に合わせるのは、思いのほか難しい

・・・後編（前書き

マブラヴの兵器に関してすごい偏見みたいな設定なっています。

ファンの方には嫌悪するかもしれませんが、作者の独自解釈です申し訳ない。

今回は、やりすぎネタを大放しまくってます。

もう少し減らせよ。

すいません予定通り出したかったんで。

それと、ご指摘があった為、設定を修正しました。

BETAによる衛星破壊は、実際には、なかったので修正します。

申し訳ない。原作が曖昧でした。

では本編を。

5部・世界の技術に合わせるのは、思いのほか難しい・・・後編

5部・世界の技術に合わせるのは、思いのほか難しい・・・
後編

「では、まず各国に合わせた兵器を検討するか。まず、この世界の一般兵器と戦術機が、どの世界の人型兵器の性能に区分されるかな。アリス君、お願い。」

「はい、まずこの世界の一般に使用されている兵器に関してですが、戦術機は第二世代が多数を占め何とか第三世代の配備が進んでいます。」

また、性能区分としては、第二世代機と第三世代機の性能区分はビーム兵器が使えないジム？やハイザックより下、位でしょうか。

装甲面では一年戦争で使用されていたルナチタニウム合金より若干低くなります。

次に駆動部の運動性に関してですがジム？並かと、ただOS自体の性能は、MS-06C ザク？並かと思われます。また、光学機器に関しては1年戦争のMSより性能が部分的によいか悪いかの状態のようです。

次に使用されている火気につきましては、戦術機にミノフスキー核融合炉やエネルギーCAPなどを使用したビーム兵器は、ありませんから、主に大口徑実弾兵装、またコンテナミサイルによる射撃武器、近接武器はスーパーカーボン長刀、ナイフ。

支援用兵器として第三世代MBT、ロケット砲、一部で艦船となっています。

ここまで出なかった航空兵器並びにICBM、巡航ミサイル等は現在ではレーザー級の出現により、現在は、ほとんど使用されていま

せん。

最後に、索敵に関してですが、一般的に機動力のある戦術機と衛星からの偵察でおこなっているようです。」

「うーん、大体予想はできていたけど。これで技術のある程度合わせるのはすごく困難なんです。」

「賢次。技術の差がありすぎるのは、元々考慮すべき点でしたから。」

「そうだな。まあ、せめてビーム兵器の一般化しておきたいのだから。」

「確かに、ではまずは、核融合炉とエネルギーCAP技術の提供とビーム兵器の設計図、改良型実弾兵器、改良したOSの提供、此方の光学機器類の技術の提供と言った所でしょうか。」

「まずは、そう言った技術だろうね、でも戦術機の性能区分だとジム？かハイザック並か、ならばそれより上で多くの多目的戦闘可能、簡単な武装変更、堅実な構造か。簡素な整備性。あれかな。」

「賢次、あれとは？」

「アリス、ゼクシリーズを知ってる。」

「確か、グリップス戦域の終わりにペズンで開発されニューディサイズ軍が使用していたMSでしたか。」

「そう、そのゼクシリーズだ。まず、型式番号 R M S - 1 4 1 ゼク・アインを生産しようと思う。」

「ゼク・アインですか。確かに、その機体ならば多くの戦場で活躍してくれると思います。しかし、ガンダニウムは地球では生成できませんし、ムーバブルフレーム技術はまだしも特に全天周囲モニタ・リニアシート技術は今の世界には受け入れがたいものだと思いますが。」

「まあそれは、追々だな。まずは、機体を提供して反応を見てから放出していくか。いずれにせよ規格化争いに発展するのは仕方ないだろうけどな。」

苦笑いしつつ言った。

「わかりました。賢次、それとですが、まず、最初にこの世界に対してビームコーティング技術とマグネットコーティング技術の提供もお願いしたいのですが。」

「理由は？」

「まず、対ビームコーティング技術は現用戦術機を簡単に改造ができる点、次に重レーザー級のは防げなくともレーザー級程度なら対処が可能になること、マグネットコーティング技術は駆動部に施すことで運動性を飛躍的に上げられることです。しかも、この二つの技術は、この世界の技術でも直ぐにでも実現可能です。しかしコストがかかるとはいえ、提供する価値はあると思いますが。」

「なるほどな、わかった、一応、提供品目に入れといてくれ。」

「分かりました」

「しかし、戦術機だけの運用では、まだ足りんな。たしか、支援兵

器が第三世代型M B Tとロケットと艦船だっけ。」

「はい、そうなります。」

「じゃあ、現用戦車に変わるもの……。プラズマ……。ゴ
ラ。Gフォース、あれがあった。」

「賢次、まさか」

「スーパーメゲフンゲフン、まあ、あれは問題点が多いから大きく
改良してこちらで運用するとして（それ以前に世界観がおもつきり
壊れるな）、それじゃなくて、92式メーサータンク改の生産を
しようと思う。あれなら、かなりの射程距離と十分な威力持ってい
るから戦術機の支援には十分だと思う。」

「すごく、B E T Aがかわいそうに思ってきましたが賢次（いつか
ら怪獣映画になったんでしょ）。」

あきれていた。

「まあ、これでも譲歩したつもりだが、だがまだまだよ。運用方
法に実証性を示していないからね。」

「そうですが、しかし、いえ、何でもありません。後、索敵機はど
うしましょう。」

「そうだな、B E T Aは地下からも来るから現用の戦術機が把握す
るには困難だろうから、それに戦術機ではどうしても機器に限界が
あるし、となると代わりになるもの……。経験浅くても乗れる車
両で機動性が有るもの、早期警戒ができるもの。ここは連邦のホバ
ートラックとかが良いかもしれないな。」

「なんか、最後の最後で堅実な物がきましたね。」

「ようは、後方支援ができ、かつ早期警戒が可能といえば、これかなと思っただけ。空中はアウトだし。最後はコストと性能面を考えてだけ。」

「なるほど、これなら何とかなりそうです。」

「まあ、必要なものは追々決めればいいし、じゃあ、一応、各国に提供する兵器も決まったか。」

「そうですね。」

「では、次は我が軍の主力兵器採用計画に移る。」

「わーい。」

なんか喜ばしい声が響いた。

「・・・・へ。」

俺は啞然とした。

これで一つの計画が纏められた。さて次回・・・

供与機体はゼク・アインに決まりました。元々作者が好きな機体の一つのため出したかった兵器の一つです。

余談ですがガンダムセンチネルは結構好きで読んでいたので出したかったことが挙げられます。

他は？

出すとは思いますが。

主力MBT（笑）やり過ぎ感が抜けていませんが、さすがに大量生産をするわけではないので、多くない程度に量産するつもりです（変わりそうな気がするけど）。

スーパー
は原作の性能のため改良してからという形で賢次陣営に配備されますが、実戦投入は、多くの希望があれば出てくると思います。なければ倉庫行きですが。仮に出すとはいっても当分は出さないつもりです。（出すとしても佐渡戦か最終決戦の時くらいかと）

私自身は、少し頭を抱えてますが。

最後に次回もかなりのネタになるとは思います。

感想または批評がありましたらお願いします。

6部・玩具を持つと、誰でも喜ぶね（前書き）

ご指摘や感想のおかげで、作者自身の執筆作業の励みになっています。

ご指摘にもあったのですが戦術機のパフォーマンスは、1年戦争兵器にも劣るというご指摘がありました。

作者自身、世界観の違う物語を合わせるのは思いのほか、困難を極めており、当然、ガンダムシリーズのように同じものでもそれぞれ概念が微妙に違うなど、それぞれに世界観が違うということは、強弱がつけづらいこともあります。私自身も勘違いが多いため少し反省しております。

戦術機のパフォーマンスですが、流石に一年戦争のUC兵器に劣るのは否めませんね確かに。作者自身が、物語にグリプス戦域の方面からそれ以降の兵器が出たかったため、そのような設定にしました。少し経ったら調整するとは思いますが。申し訳ありません。

最後に、今回に関してですが、やっぱりネタです。それ以上もそれ以下もなくネタです。
では、本編を

6部・玩具を持つと、誰でも喜ぶね

6部・玩具を持つと、誰でも喜ぶね

会議室、中央のディスプレイのコンソールを叩きながら計画書のデータを開いた。

「えーと、では、気を取り直して我が軍の主力兵器採用計画を移ります。」

啞然としながらもいった。

「はい、賢次。」

うきうき気分で言ってる。

ディスプレイにそれぞれ計画案が浮かび上がっている。

「えー、では当初の提案通り、我が軍の主力無人兵器について会議を行います。また、アリス君が操りやすいように、MDシステム搭載型でおこないます。基本コンセプトとして、汎用性と生産性が高い機、次に高性能型、高機動型、火力支援機、情報収集機。と考えています。」

なんなんだ、アリスさんが壊れた？。

「賢次、提案したい。」

なんか、言っている。

「なにを？」

「まず、生産性の高い兵器として、生産設備が整っていない当初の間は汎用性の高いMD型のリーオーの生産をし、ある程度数が揃えられた後は、ビルゴの生産を開始したいのです。次に高性能型と

してヴァイエイト。メリクリウスの生産を行い。高機動機をトールス、火力支援機として、サーペントと92式メーサータンク改、最後に情報収集機としてEWACリーオーを使用したい。あと、Gビットが使いたい。」

「なぜ、最初はリーオー？MDが出てきた時代だからか。いや、まず構成はいいんだ、なぜA・C兵器群、確かにかっこいいし性能もまあ良いんだが。しかも、最後の最後でなぜ、Gビット。まさか、サテライトシステムか、俺にサテライトシステムを搭載せよと考えているのか！」

啞然としながらも聞いた。

「落ち着いて下さい。順を追って話しますよ。まず、最初にリーオーで行うのは基地開発が、まだ完全ではないためサポートと防衛の併用が可能なため、純粋な戦闘用のビルゴでは問題が生じます。当然、規定数まで生産したら切り替えますが。次に、なぜ、A・C兵器群かは・・・趣味です。そして、Gビットはサテライトシステムを搭載してください賢次。サテライトキャノン、撃ちたい！」

大きな声が響いた。

「おまえは子供かー！。」「あきれながら言った。」

「私は子供ですよ。生まれてから1日も経っていない。子供ですよー！。」「ふてくされ声が響いた」

「そこだけ、子供らしくなるなー！。」「なんで俺がつっこみにならなあかん。」

「いいんですよ。いいんですよ。前回、賢次の趣味全開の兵器を見ていたら、私だって欲しいわよー。どうせ、賢次の趣味全開の兵器を作らせて、使えって言っんでしょ。」
いじけ声が響いてくる。

「はあ、もうわかったよ。ここまでいわれると、どうしようもないな。」

半ば呆れながらも、了承した。

「やったー」

「しかし、たしか月からのサテライト照準レーザーでエネルギーが送れるけど。月、今占領されてるような。」

「問題ありません賢次。南極基地のエネルギー炉を利用して送信、それを主軸に衛星を通してエネルギーを送ればいいんですよ。それなら、どんなところでも送れますよ。当然、隠蔽はいろんな世界の技術を使っで。」

「そこまで、やるのね。（アリスさん怖い。アリスさんが怖いよー。）」

「・・・わかったよ。ただし、サテライトキャノンは俺の指示がない限り使用を控えるから。（なんか俺よりひどいような。）」
こめかみを押さえながら言った。

「ぶー。」

「わかったか。」

こんなキャラだったか？アリスさん

「はい。」

「はあ（なんか疲れた。）」

「では、計画が纏まったので現在の決まった事案で生産を行いたいと思います。まず、第一目標として各国に供与する兵器群と技術の生産を第一とし、それと並行して南極基地の開発、サポートのリーオーの生産とします。それらの計画が軌道に乗った後は、第二目標の我が軍の主力兵器群の生産に移ります。」

「わかりました。賢次。」

少し凜々しい声が響いた。

「ああ」

元に戻った？

「後、どうしようか。俺の搭乗機体を決めたいが、MSに乗ったことないから勝手がわからないだよな。」

「では、賢次。各国に供与する機体のゼク・アインに搭乗してのシミュレーションを行ったほうがいいと思います。ある程度、慣れてきたら実機訓練、その後、私の操るMDゼク・アインで模擬戦闘訓練。その後、実戦でよろしいかと。」

「あー、そこまで、やるしかないか。まあ、いずれ、戦争に参加しないといけないし。いきなり、高性能機は、俺じゃ足を引っ張って使えないだろうし。まずは、訓練あるのみだな。」

「その意気です、賢次。」

次の日から、訓練という名の地獄に続いていく。……続く。

6部・玩具を持つと、誰でも喜ぶね（後書き）

ネタだ。だが後悔していない。やっぱりMDといたら、この時代でしょ。

それはいいとして、作者自身は、実際の戦争が一人で覆すのは普通は不可能と考えており、原作でも普通、数千、万クラスのBETAを相手にするのは明らかに不可能と考えております。まあ、某種とかなら可能なかもしれませんが、それでは面白くない。よって大量と高性能？イメージ（よく壊されるが）のあるA・C世界の兵器が選ばれたわけです。とは言っても、その子らが、実戦に出るのは、まだまだ先なのですが。

最後にアリスが運用するGビットですが、サテライトキャノン型に変わり、中継衛星を介して、いつでもどこでも撃てるようになります。とは言っても、賢次による制限つきですが・・・ははは。やりすぎた。それ以前に使わしてくれるかどうか（汗）

感想や批評がありましたらお願いします。

7部・訓練は体力よりも精神に比べると思う。(前書き)

今回はシミュレーションによる実戦です。

戦闘描写、うまく書けたかな？皆様にイメージが伝わればいいんですが。

では、本編を。

7部・訓練は体力よりも精神にくると思う。

7部・訓練は体力よりも精神にくると思う。

賢次は、擬似コックピットに乗り込みシミュレーターを起動する。起動を確認するとアリスから通信がきた。

「では、賢次。シュミレーションを始めます。勝利条件は目標の破壊。地形は、荒野。天候は晴れ。温度37 風速2m。目標はハイザック、兵装は、ザクマシンガン、ビームサーベル、腰部ミサイルポットのみ。

賢次の使用機体はゼク・アイン、第一種兵装のビームライフル、ビームサーベルとなります。」

「了解、いつでも始めてくれ。」

「では、始めます。」

コックピットの画面が灰色から赤土色の荒野となっていた。

「これは、すごいな。本当に、その場にいるみたいだ。」

「賢次、無駄話していると攻撃されますよ。」

ババババン バシン

目標のマシンガンによる発射音と此方の装甲に弾が当たった音が聞こえた。

「く。回避。11時の方向。相手はあそこか」

賢次はビームライフル構え応戦を開始する。

ビューン　　ビューン

応戦をしているが、ビームは目標の小刻みな動きで、ことごとく外れている。

「くそ、目標がハイザックとはいえ。動きについてこれていない。」
目標は小刻みにブースターを吹かし動きまわりながらマシンガン
撃ってくる。

バババン、バババン　　バシン　バシン

賢次もブースターなどを利用して回避しているが、いくつか弾をもらい装甲を削っている。

「くう、こちらの機体に影響ある弾を貰っていないとは言え、避けきれない。」

ライフル構え応射

ビューン　ビューン　ドン

何とか1発が命中し目標のシールドを吹き飛ばした。

「よし、何とか命中。なにミサイル。回避」

目標からの3発のミサイルが、こちらに接近してきた。

「く、一発はこちらに命中弾、こいつだけでも破壊しないと。」

ライフルを構え応射

ビューン　ビューン　ドン

「よし」

ドドン

ミサイルが自分の周りに着弾した。

「くそ、砂煙がどこに。」

着弾による砂煙で一時的に視界が奪われた。

そのスキを狙い目標が一気に接近して、眼前にビームサーベルで斬る寸前になっていた。

「ライフルがやられた。」

ブースターによる回避のおかげで機体が生き別れになることは無かったが手持ちのビームライフルを斬られ使用できなくなっていた。

「くそ、ビームサーベル。」

何とか右手でビームサーベル取り出し二撃目のビームサーベルを受け止めた。

「くう（やばいやばいやすぎる）」

賢次は、冷汗が止まらなくなっていた。

さらに目標は三撃目のサーベルを振り下ろし、こちらもなんとか受け止めた。

「くそ、完全に分が悪すぎる。なんとかしないと。なにー。」

目標がほぼ至近距離で3発のミサイルを放ってきた。

「避けられない。」

ドドドン

機体が大きく破損しながら寝そべり、コックピットでは被害状況を知らせてきた。

「く、被害状況、両足中破。右腕欠損、左腕中破、頭部破損。おまけに機体がほとんど動かない。オワター。」

ドシーン ドシーン ドシーン

少々の被弾が見られながらも接近してきた目標は、持っていたサーベルでコックピット目掛けて振り下ろした。

ゲームオーバー

画面が灰色のコックピット内で通信が聞こえてきた。

「お疲れ様です、賢次。」

「あ、ああ」

「何なんだ。ありや。一方的だったんですが。」

今でも汗が止まらないんだが。

「それは、賢次がMSに慣れていないに起因してますよ。最初にしてはよくできた方だと思いますよ。」

「一応聞くけど。あの目標はレベル的に幾つ？」

「えーと、宇宙世紀基準で行いますと一般兵くらい。この世界でも基準なら腕は一般衛士にはなります。」

「つまり、まだまだかー。ハハハ、まずは勝たないといけないだろうけど、それ以前に性能のいいゼク・アインがハイザックに負けるのは忍びない。ほぼ絶対に勝つ位まで腕を上げてやる。」

拳を握りながらそう言った。

「その意気ですよ、賢次。では賢次。地形と天候と風速を変えつつ、後、10時間シミュレーションを頑張ってもらいますよ。」

「鬼かー！。」

涙声がコックピットを響かせていた。

次回も訓練……続く？

7部・訓練は体力よりも精神にくると思う。（後書き）

訓練描写でした。

戦闘描写、うまく伝わったのかな？

一応、賢次は、MSの無い地球世界の一般人だから扱いはこれ位の方が良いかなと、思う今日この頃です。

いきなり一般人が乗って訓練された軍人に勝てるとは普通は思えないのですが。ガンダムなどの異常な性能か、または天性もしくはまぐれじゃないと普通は無理だと思います。それでも有り得ませんが。漫画ですから一言で片付けれるのでしょうか。それはいいとして最終的には賢次もかなり強くなります。

感想または批評がありましたらお願いします。

8部・いざ機体に搭乗するときは、誰でも緊張すると思う。（前書き）

そろそろ集計ごろだと思うのですが。まだ、3〜4話分は書くとは思いますが、もう少しアンケートを待ちます。

大体、企業接触編を書かずに訓練の時点でおかしいだろ。おっしゃるとおりです。

今回は実機訓練です。戦闘と言うより、どちらかといえば制動操作訓練でしょうか？

では、本編を。

8部・いざ機体に搭乗するときは、誰でも緊張すると思う。

8部・いざ機体に搭乗するときは、誰でも緊張すると思う。

誰もいない通路を格納庫に向けて歩く。

カッーン カッーン カッーン

目的の隔壁についたところで歩みを止め、コンソールを叩く。

（本人確認のためIDカードの提示と網膜認証を行ってください。）

「はいよー」

（認証……。隔壁の開放を行います。）

格納庫の扉にIDカード、網膜認証に確認をおこない。隔壁がゆっくりと開いて、中に入っていく。

その格納庫の一角に、生産されて間もない新品のMSが並べられていた、賢次は其の内の一機を見つめていた。

「ほえー、実物を見ると、これは凄いな。」

青い塗装、ジオン公国軍系の技術が色濃く見られる頭部のモノアイ、連邦系ジムなどに使われている胸部廃熱ダクトと増加装甲と重厚感を感じる胸部構造、連邦系技術とジオン系の汎用性を入れたMSゼク・アインが佇んでいた。

「RMS-141、ゼク・アイン、高さ19.2m、本体重量37.6トン、基本的に三つの兵装に別れそれぞれ、第一種兵装はビームライフルなどを使用したビーム携行型、第二種兵装は管制用ディスク・レドームを付けスマートガンによる長距離狙撃を可能とした狙撃型、第三種兵装は、実弾を主とする専用マシンガン、バズーカやグレネードランチャー、両肩のラッチにマガジンドラムを搭載。マガジンドラムから専用120mmマシンガンに給弾を行う要塞戦型だったかな。」

「よし、実機訓練を行うため。コックピットに乗り込むか。」

賢次の其の内の一機に乗り込みコックピットに入る。

ピ、ピ、ピ、ピ ビーン

コックピット内の画面が格納庫内の風景を映し出した。

ゼク・アインのモノアイにビコーンとピンクに光った。

「よし、起動を確認。（ピピピピ）ん、通信。」

「賢次、どうです？」

アリスからの通信であつた。

「今、起動したとこ。この後、試運転のため格納庫から出て、歩いて兵器実験区画までの行軍を行うつもりだが。」

「そうですね。兵器実験区画は、ここから、2つの区画を抜けてか
らになります。一応、経路は画面に表示します。」

「ん、たのむ。」

「ご武運を。」

通信が切れる。

「では行きますか。」

そう言つて格納庫から出た。

ドシーン ドシーン ドシーン

2つ目の区画を抜け3つ目の区画の隔壁に差し掛かる。

そこで、兵器実験区画への開閉プログラムを開く。

「えーと、IDとパスワード入力。よし開いた。」

ゴゴゴゴゴ

隔壁がゆっくり開いていく。

隔壁が完全に開くと、ゆっくりと歩を進めた。

その場所は、山岳や砂漠、湖などが忠実に再現された世界が広がっていた。

「これは、また凄いな。まるで地上にいるような錯覚にとらわれそうだ。（びびびび）おっと通信だ。」

開いた口が塞がれないほどの、驚きが出ていた。

「どうですか、賢次？」

「凄いな、よく再現しているな。」

「ここは元々あらゆる環境において兵器に及ぼす影響を観測する場所ですから。環境の調整が図られているのですよ。今回はMSが自由に動きまわれるように我々の基地より深くに区画を作っていますから、大体、縦30km、横20km、高さは200mくらいの実験区画に仕上げました。」

「なるほどね。それは、ありがとうございます。」
「顔がほころんでいた。」

「いえいえ、では賢次訓練を始めますよ。」
「凛々しい声で言った。」

「了解」
「顔引き締め言った。」

「まず、実機での、ここまでの区画を歩くのメニューを終えています」

から、次はブースターを使用して真っ直ぐホバーリングを行ってください。」

「了解」

機体のブースター出力を調整し、ホバーリングを開始する。

「うーん、出力調整の仕方が実機だと勝手が違うな。」

「それは、完全に慣れですね。最大出力で飛ばすのは簡単ですが、できるだけ最小のエネルギーでホバーリングすることで、推進剤の調整が可能になりますからやっておいて損は無いと思いますよ。」

「なるほど」。では、まずは最低限のブースター使用でホバーリングを開始するか。」

最初は弱すぎて落下したり、強すぎて急加速したりと、大わらわになっっていたが段々とコツを掴んでいた。

「なるほどね、この機体の場合、スラスターの調整やブースター出力は、これ位か。よし何とかコツを掴んだ。」

「では、次に空間戦に必要な空中でのスラスターによる方向転換や宙返りなどを行ってもらいます。大体上昇高度は90mで行います。まず、90mまで上昇して下さい。」

「了解」

ブースターを吹かし。上昇を行い、その場に待機する。

「では、ブースター出力とスラスター制御を行いつつ急加速、方向転換、宙返りを行ってください。」

「了解。う、出力仕方で変な方向に飛ぶ。これはきつい、でも何とかなりそうだ。」

最初は行き過ぎたり回転しすぎたりしたが、少しずつ思い通りの動きが出来るようになった。

「慣れてきましたね。賢次では次のメニューに移ります。では一旦、地上に降りてください」

「了解」

機体を地上に下ろした。

「はい、では次のメニューですが。最初の出入り口から一番奥までの行軍です。今回は、制限時間を設けてます。当然、奥の目標地点の近道には演習用防衛兵器が模擬弾を使用しつつそれぞれの地点で待機しています。これらを突破するか迂回することで目標地点にいつてもらいます。しかし、迂回しすぎると制限時間に間に合いませんし、模擬弾に当たりすぎると任務失敗なのであしからず。あと武器なしで行軍となります。」

かなりハードだな
「了解」

「では、始めます。」

ドシーン ドシーン ドシーン

現在、防衛拠点を突破しつつ近道しながらのおかげで、制限時間の半分を残しながら、なんとか目標地点約5kmに差し掛かっていたが、レーダーには多数の防衛兵器が目標地点を取り囲んでいた。

「おいおい、なんで最後の最後でこんなにも多いんですか？どうに

かして突破して目標地点に着かないと。」
現状を確認中

「えーと、俺の正面の平野に大体主力が置かれているか。次に右舷方向の敵は少ないが、行動しにくい山岳地帯、左舷は湖で対岸に固定砲台が置かれているか。湖は丸見えだし、何とか時間が有るから山岳地帯を利用して近くになったら一気に突破したほうが良いな。」
賢次は山岳地帯を利用して何とか監視網に引っかからずに何とか目標2km地点に差し掛かった。

「よし、ここまで何とか監視網に引っかからなかったな。後はここから一気に（ブーンブーン）ちっ見つかったか。」
目標近くの防衛部隊がこちらに向けて接近しつつあった。

「仕方が無い、ブースター最大出力。一気に突破する。」
機体が加速し砲火を避けつつ目標に近づく、その間も砲火の雨が機体に降りかかってくる。

「く、だが遅い。」
最終的に機体が目標地点に着いた。

通信・・・

「お疲れ様です賢次。」

「ああ、何とかメニューをクリアしたみたいだな。」

「はい、これで機体制御訓練は終わり。続いては射撃訓練と格闘戦に応用訓練を行います。なお、訓練方法は私との模擬戦になります。」

「了解、しかし、あれだけの制動訓練、結構きつかったな。」

「メニュー的には、かなりぶっ飛ばしましたよ。当たり前ですが。」

「やっぱりか。」

「はい、本当は順を追ってきちんとした訓練を行いたいのですが、時間的に余裕が無いのと、賢次もかなりのセンスがある方、みたいですし、後は私自身が戦闘方法の教鞭をとればなんとかなると思います。とは言っても戦場には、まだまだですけど出せませんね。」

「まあ、仕方がないか、アリスが戦闘方法を仕込んでくれないと流石に持たないだろうな。取りあえず頼む。」

「わかりました、賢次。とりあえず機体の整備を行いたいので一度、格納庫に戻して訓練は後日になります。」

「わかった。よろしく頼む。」

「はい。」

これにより実機訓練が終わり、後日、アリスとの訓練という名の模擬戦が始まった。
つづく。

8部・いざ機体に搭乗するときは、誰でも緊張すると思う。（後書き）

本編でした。機体がよくてもパイロットがその環境に適用するのは並大抵の努力ではないと思います。

当然ですが、あらゆる条件下で任務を達成するわけですから訓練期間がかなり必要だと思います。

どう考えても賢次は普通は短すぎると思います。時間的余裕が無いためなのですが。

アンケートに関してはまだ続きます。あしからず。

感想や批評がありましたらお願いします。

9 部・師匠がいると強くなる代わりに、型にはまり易いと思う。(前書き)

今回もアリスとの訓練です。

アリスさんのチートがきます。

とはいっても賢次も明らかにおかしいです。

では、本編を

9部・師匠がいると強くなる代わりに、型にはまり易いと思う。

9部・師匠がいると、強くなる代わりに、型にはまり易いと思う。

南極基地MS闘技場・・・

土の地面の上を、二つの青い人形の訓練の赤い光を出しながら舞い踊っていた。

ビューン ビューン

二つの機体による射撃戦を行っていた。

「く、シミュレーションの敵より速い。」

アリスとの模擬戦をしているが、賢次のビーム射撃を尽く避けていた。

「オートではなく、マニュアルでターゲティングを行ってください。それでは、相手を捕らえ切れませんよ。」

通信ごしに大声に言ってくる。

アリスのビームが跳んでくる。

ビューン ビューン

「うわ、分かっているが、マニュアル操作になると余計に難しすぎるんだが。（きつすぎるー）」

何とかビームを避ける。

「マニュアルで行うことで感覚を鋭くするのです。賢次」

荒々しい拳動しながらも無駄なく動きつつ的確に赤いビームを放つMD（アリスの操る）ゼク・アインが賢次の機を狙っていた。

「そういうがー感覚が追いついていないぞ。俺はー」

やけくそ気味に言った。

「ですから、その感覚を身に着けるのですよ。」

「その感覚が分からんのですよ。」

「はあ、もうそれを、掴むには練習あるのみだと思いますよ。」
あきれ声で言った。

「わかりましたよ。なんとか、やってみよ。」
だらけながら言った。

射撃戦中・・・

「もっと、機体の動きをよく見て、相手の癖を挙動を見るんです。
強い口調が続く。

ビューン ビューン

「く、もっと速く鋭く。」

そう言いながらビームを避けていく。

「そうです、相手がパターンさえ分かれば、その行動をある程度予測しなくても避けられるのです。」

ビューン ビューン

「よし何とか感覚が掴めてきた。」

アリスから放たれたビームを少ない挙動で完全に回避していく。

「では、少し本気を出しますよ。」

突然、アリス機の動きが変わった。急加速、急な方向転換を駆使し賢次を翻弄していく。

ビューン ビューン

「動きが突然。く、また。」

賢次は、突然のアリス機の動きに驚いていたが、何とか着いてきていた。

「なかなかやりますね、賢次。いくら、生身とはいえ私のMDの動きについてこれるとは、正直驚きました。」

「はあ、はあ、お褒めに預かり光栄に至極だけど、現在の動きに着いていくのがやっとだよ。」

賢次もアリスの動きを予測しながら動き、挙動に着いて行くのがやっとという状態だった。

「そうは言いますが、今、人間の限界以上の動きを問題なく行う時点で（ビューン）。人から見れば完全に人外ですが。」

「はあ、はあ、それは、フィリスの眷属だからだな。（ビューン）うお、もう、人間ではなくなっているわけだね。」

「なるほど、賢次の主ですか。（ビューン）これで、はつきりしましたよ。どうしてこれだけ動けるのかを。」

機体の限界以上に動き回り、お互いのビームを避けていく二機、ダンスが舞を舞っているかような、動きにもみられた。

20分後

「はあ、はあ、流石にきつい。」

満身創痍で言った。

「大体合格点です、賢次。いくらMDとはいえここまで私についてこれるとは、思っても見ませんでしたから。」

「ありがとうアリス、そう言われると頑張ったかいがあったというもんだ。」

やや疲れながらも言った。

「はい。では賢次、次は、格闘戦訓練を行います。」

「いー、まだ続くのですか？」
顔青くしながら言った。

「今の状態で行い判断力の継続を行うのです。これにより長期戦でも、精神ある程度もつと思いますよ。」

「あーもう分かったよ。やりますよ。」

「では、はじめますよ。」
強い口調で言った。

「了解。」
顔を引き締めた。

模擬戦中・・・

バチバチバチ

お互いのビームサーベルが交差し火花を発しながら闘技場を明るく照らす。

バチン

「射撃戦と比べて勝手が違うな。」

上段、中段、下段とサーベルを振りながら相手のサーベルをいなしたり、受け止めたりしている。

「それは、そうですね。攻撃方法が明らかに違いますし、フェイントや二刀流や隠し武器などが該当しますね。普通、射撃戦より格闘戦の方が明らかに難しいのですよ。」

「分かっているが、そういった相手は、（バチン）エピオンの大剣やジ・オの隠し腕やクロスボーンガンダム of 隠し武器などが挙げられるな。」

「この世界でも、そういった戦術機もないことは無いのでしょうか、基本的に少ないですね。（バチン）そういった装備は。」

「まあ、使いこなす人間が（バチン）そう多くは無いということだろうな。」

ブースターによる急加速での斬りや突き、またはスラスター制御による方向転換や回避など、訓練を受けた

それから、2〜30分間。

「ふう、ふう。何とか感覚を掴めたぞ」

「では、賢次、さっきまでのメニューのまとめとして、総合的な模擬戦を行います。使用武器、訓練用ビームライフル、訓練用ビームサーベル。制限時間10分間、勝利条件はコックピットに命中になります。なお、部位に訓練弾等が当たると自動的にその部位の機能低下を行います。最終的に部位の機能停止が行いますので注意を。」

「わかった。」

顔を引き締めた。

「では、はじめます。」

模擬戦が始まった。

模擬戦中・・・

「はあ、はあ、もうかれこれ制限時間に近づいているのに有効的な攻撃が出来て、いないな。」

ビューン ビューン

闘技場内をビームが飛び交っている。

「賢次もなかなかやりますね。私に有効的な攻撃をさせないなんて。」

ビューン ビューン

「く、このままだとアリスの思う壺だな。だが、いや、いつそのことやるしかないか。」

賢次は接近し右腕にビームサーベルを抜いた。

「賢次！なるほど。では私もあなたにのりますか。」

アリスもサーベルを抜いた。

「当たれー。」

上段からサーベルを振り下ろした。

「あまいです。」

機体に向かってきたサーベルを受け止める。

「ならばもう一本」

左腕にサーベルを抜き下段からサーベルを振り上げる。

「な！回避を。だが隙ができました。」

アリスは何とかサーベルを避けると、受け止めていたサーベルをいなし、コックピットに向けサーベルを振る。

「く、防御が間に合わない。」

結果、アリスが振ったサーベルがコックピットに命中し、模擬戦は終了した。

通信・・・

「お疲れ様です賢次。」

「ああ、さすがにきつかったー。アリス、強すぎます。」

疲れていたが達成感があった。

「いいいえ、賢次も機転を利かせて反応しづらい攻撃を行いましたから。少し焦りましたよ。」

「いや、そこまでやってもアリスに通用しなかったんだから、どうしようもないよ。」

「それでも、この世界の一般衛士程度なら瞬殺できますよ。明らかに人間の限界を遥かに凌駕しているのですから、おそらく、私の操るMDでないと勝てない気がしますね。」

「そこまでの実感は無いんだがな。」

「そういいますが、模擬戦でもゼク・アインの性能を十分に発揮させていましたから、1対1同士なら勝てると思いますね。戦争はまだまだ無理ですけど。」

「そりゃそうだな、戦場を知らないんだもの。」

「いずれにせよ。もう少し訓練を行います。戦争は、それからですね。」

「わかった。」

「では、機体の整備を行いますので格納庫まで行って下さい。」

「ああ、それとアリス。そろそろ他国の企業に接触を図ろうと思うんだ。」

「企業に？わかりました。では、後日、提供する技術と接触する企業をリストアップします。」

「ああ、頼む。」

訓練も一時的に終わり、企業に接触を行うことになった。さて、どうなることやら。
待て次回・・・。

9 部・師匠がいると強くなる代わりに、型にはまり易いと思う。（後書き）

訓練編でした。

一応、設定でも賢次の身体能力は人外なものでした。そういった描写は書いていないですが、今回、その話をすこし入れました。

アリスに関してですが、疲れを知らない人工頭脳なのでから当たり前ですね。それにしても、MDはつくづく恐ろしいと思います。

どんなに強くても疲労が溜まれば、ほとんど戦えませんよ。戦士に休息をとほ、よく言ったものです。

次回方面は接触に関してと現状報告を書こうかと思っています。少し変更するかもしれませんが。ですからアンケートはぎりぎりまで待ちます。

最後に実戦に関してはもう少し考えてみます。ついでに賢次の搭乗機に関してですが、少しの開いてから搭乗します。幾つか乗り換えもありますので。

感想と批評がありましたらお願いします。

10部・多くにアポを取るのは、そう簡単にはうまくいかないものだ。(前書き)

ZEROです。

ご指摘にあったのですが、スーパーメカ　はいつ出てきますか
に關してですが、下手に物語に実戦投入は物語の崩壊の可能性があ
るため、どうしようかと悩んでいる方面です。

いずれにせよ選択儀に物語に登場するかしないか、次にいつ投入さ
れるかに關してですが、明星作戦の前後の方面の作戦もしくは最後
に出てくるまで、幅広くなりそうです。ただ、さつさと出せは勘弁
してください。作者が泣きます。いろんな意味で。

いずれにせよ、アンケートでも出そうかと思しますので、もう少し
お待ち下さい。

今回から企業接触編に入ります。

10部・多くにアポを取るのは、そう簡単につましくないものだ。

10部・多くにアポを取るのは、そう簡単につましくないものだ。

EU ラインメイトル社本社ビル

賢次は目の前の大きなビルを見つめていた。

「へー、結構大きなビルだな。」

アリスがリストアップした企業に接触を図るため、現在、祖の内の一件に来ていた

「まあ、どんな人物に会うか、わからないけど。とりあえず、受付
つと」

受付・・・

「すいませーん。社長さんに会いたいんですけど。」

と、受付の女性に声をかけた。

「社長ですか。社長は今、出張になっておりますが。」

明るいうよく通る声で言った。

「ふーん、では副社長は？」

「副社長ですか？確かに本社工場に、いらしゃいますが。失礼ですが、アポイントあるのでしょうか？」

「うーん、さすがにアポは取っていないな。じゃあ、本人にこう伝

えてください。パンドラの箱の世界に希望が増えたと、そうお伝えください。お分かりなれると思いますよ。」

「はあ、わかりました。一応、確認のためお名前をお願いします。
(変な、来客ね。)」
困り顔でいった。

「そうですね、えーでは秋津と。」

「秋津様ですね。えーとそれだけですか？(ますます、怪しい)」

「それだけです。」

「は、はあーでは少々お待ちください。」
受付嬢が受話器を持って電話を掛ける。

「あ、副社長ですか、実はー」
「はい、はい、分かりました。ではそのように。では失礼します。」
そう言って受話器を置いた。

「失礼しました。では係りのものが来ますので少々お待ちください。」

その、数分後・・・一人の黒い背広の男性がやってきた。

「お待たせしました。こちらです。」

背広の男性が言った。

賢次はその男性についていった。

階を上がり一つの部屋の前で止まった。

コン コン

「副社長、お連れしました。」

「入りなさい」

若い男性の声が部屋から聞こえてきた。

「失礼します。」

とドアを開けた。

部屋には、豪華そうなソファとオフィスによく見かける机のみがあり、その机には、すすけた金髪の若い男性が座っていた。

「あの少年がパンドラの希望、か？」

と小さく呟いた。

彼は案内人小さく目配せして退室させ、ソファに座った。

賢次もその向かいに座った。

「ラインメیتال社、副社長ハインリヒ・ルーデイルです。よろしく」

「秋津です。下の名前は申し訳ない。今は、あまり名前を知られたくないので、今は、秋津と呼んでください。」

「わかりました。Mr・秋津、なぜわが社に？」

静かな声で言った。

「では、まずは貴社にある技術と設計図を送ったのはご存知だと思いますが。」

このときに送った技術とはビーム兵器技術と実物ならびに120mmマシンガンの技術、バズーカ、対ビームコーティング技術やその他もろもろを“パンドラの箱の世界に希望が増えた”と添えて送り

つけたのである。とは言っても他企業にも送ったが。

「確かに送られた技術と実物を確認したが、社長共々驚いていますね。ここまで革新的な技術は普通ではありえないといった方がよろしいですか。」

「まあ、そうなりますね。で、そちらで生産は可能でしょうか？」

「ものによつては可能といえば可能なのでしょう。わが社の技術力では、どんなに急いでもビーム兵器の実用化に2年半かかると思えますね。それを完全に一般化させるとなると、およそ10年はかかると、まだ、完全に試算を出していませんから曖昧ですが。また、120mmマシンガンは1年で生産が可能になると試算が出てますね。まあ、儲かる以前の問題ですが」

「そうですか。まあ、こちらの予想の範囲と言った方がいいですね。」

「はあ、しかし、Mr・秋津、なぜ、このような技術をわが社に齎したのですか？」

ハインリヒ氏はそう聞いた。

「あなたも薄々お分かりなられていると思いますが、対BETAのためですね。おそらく、今の情勢では、いずれ世界はBETAに食われますね（実際は勝つんだけど）。もう一つは世界のバランスを崩すといった方がいいかもしれませんね。（実際には世界に技術をばら撒いたり、いつか俺らが表舞台に立つという意味なんだけど。）」

そついった瞬間、ハインリヒ氏の顔が青ざめた。

「は、はは、それはまた。（この男、なにを考えている。確かに今の情勢ではBETAに確実に負ける。その意味としては、対BETAは利に適っている。だが、もう一つの世界のバランスを崩すとはどういう意味だ？）しかし、それではあなたに実利など無いはず。しかも、それではあなたが損するのではないのでしょうか？」

「まあ、それは気分ということまで。」
両手広げ笑いながら、そう言った。

「はは、気分ですか（気分だと！普通、どのメーカーでもあのような技術なら普通は手放さないぞ。なにを考えている。）ふざけているのですか！？」
怒りに顔をひくつかせながらそう言った。

「ふざけてはいませんよ。今、お渡した技術はあなた方にいずれ必要になるだけです。それだけです。」
微笑を浮かべつつそう言った

「あなたは、齎した技術の重要性をわかっていない。下手すれば世界を一変させるのですよ！」
激昂しつつそう言った。

「まあ、私自身は本心では実利などに興味など無く。この世界では、どこかで多くの衛士が戦場で死んでいるんですよ。今も。できるだけ彼らに生き残ってほしいということだけです。」
賢次は目を閉じながらそう言った。

そう言われたハインリヒは頭を冷やした。
「・・・申し訳ない。言い過ぎました。」
頭を下げた。

「頭をお上げください、私自身、言葉足らなかったのですから。」
慌てながら言った。

「ありがとうございます。M r・秋津。では齎された技術、有効に使わせていただきます。」
笑顔で言った。

「ええ、お願いします。」
こちららも笑顔でかえした。

「M r・秋津できれば、ぜひ我が社に来てほしい。君のような技術を持っているなら、わが社も技術人も喜ぶのだが？」

「お気持ちはうれしいのですが。まだ、私自身はやる必要がありますので辞退させて頂きますよ。」

「そうか、君が心変わりあつたらいつでも来てくれ、いつでも空けておく。」

「ありがとうございます。ルーデイルさん」

「ハインリヒと呼んでくれM r・秋津」

「はい、ハインリヒさん」

「では、M r・秋津、何か困ったときがあつたら此方も出来るだけの範囲で手を貸そうと思う。」

「では、こちららもそちらに何かあれば出来るだけの範囲で手を貸し

ますよ。」

最後に握手を交わした。

案内人が呼ばれ退室しようとしたときにハインリヒ氏から声がかかった。

「Mr・秋津、つぎ会うときは名前が聞ければいいんだがな。」

「まあ、それはまたいずれで。では、また」
そう言つて賢次は退室した。

「ああ、またな。」

賢次が退室した後、ハインリヒはオフィスの机で物思いに耽つていた。

「世界のため人類のためか。ふふ、私も所詮、人の子か。世界の現状など数字や文字でしか見ていないから、か。私自身、彼が羨ましいのかも知れないな。多くの人にとって詭弁だと思ふのだろうが、彼が齎した技術、人類のために有効に使わせてもらおうか。社長にもそう進言しておくか。」

彼のオフィスに夕日が染まってきていた。

サイド賢次

「よし、これで一件目完了、と」
リストに丸を入れた。

「さて、かなりの数に接触しないといけないけど。多いな」

「まあ、地道にがんばろ。」

賢次は次の企業に接触するのだった。

待て次回・・・

10部・多くにアポを取るのは、そう簡単につまかないものだ。(後書き)

企業接触編でした。

原作でも企業の登場人物はあまりないのですが、日本はぶっ飛ばそうかなわかりずらいんですよ、そのところ。進行上企業のオリが色々出てきます。ただ、物語の重要人物ではないので、あまり関係ないかもしれません。

11部・接触するのはいいが考えて行動しないと、いけないと思う。(前書き)

企業が多すぎるため、賢次が接触して、どう行動したか。また、どう巻き込まれたかをダイジェストでお送りします。

アンケート結果は締め切りは企業接触編で終わりなので、今回で締め切らせていただきます。

集計結果は次回に書きまして、本編に続かせていただきます。

様々なアンケートをありがとうございました。

では本編を。

11部・接触するのはいいが考えて行動しないと、いけないと思う。

11部・接触するのはいいが考えて行動しないと、いけないと思う。

やあ、賢次だ。前回、EUの企業の一つに接触したけど、他にも結構多いから殆どの企業に接触しての、全体的な印象と現状報告とエピソードをいれてみようと思う。

前回、EUの兵器産業に接触にしたけど、多くの企業で思いのほか好印象で受け入れてくれたり、部分的には門前払いになったりしたが、どちらかといえばヘッドハンティングな感じかな。比較的、EU系企業には好印象に受け入れてくれたと思う。

次にソ連だが、ここはかなりの食わせ者で、接触が済んで企業の人と食事会に誘われた。

食事会の飲み物に睡眠薬でも入っていたみたいだけど、元々そんなものは効くわけが無かったから。眠くは無かったんだけど。

とりあえず、夜も遅いということで宛がわれた部屋で休んでいたら、いきなりきわどい服装のロシア美人が部屋を訪れてこちらが大慌てになりましたよ。なにこれ、これが、かの有名なハントラということですか？どこかにカメラとマイクが？ありましたよ。それもかなりの量、まあそれはすべて破壊して、美人はこちらでおいしく・・・してませんよ。速攻逃げましたよ。

ただ逃げたのはよかったのだけど、大量の憲兵には、町の中を追い駆けまわされるし、それを巻いたと思ったら、止めに戦術機1個中队に追い駆けまわされましたよ。

まあ、何とか某ステルス迷彩を使用して何とか包囲網を脱出したり、雪の中を渡河して国境を出たりと、なに、この逃亡劇と亡命劇、ル

ン3世じゃないよ。何もしていないのに、寒かった。

次にアジア系の企業に接触を図ったけど、これも結構な食わせ者だったな。いきなり、来て早々軍人に拉致られて国賓待遇クラスのもてなしを受けたと思ったら、研究施設に連れてこられて作れだもん何を考えている。

しかも、拒否したら殺すというおまけつき。

ええ、完全にぶち切れしましたよ。目立たない場所にMSゼク・アイン第3種兵装を取り出して研究施設を完全破壊しましたよ。ついでに警備の戦術機2機も完全破壊する大戦果ですよ。

まったくもって、やってられない。その後は機体を戻して混乱に乗じて国外脱出ですよ。泣きかけましたよ。まったく。

次に日本だけど、なんか、俺が住んでいたまったく同じ国の人ではないとはいえ、多くの接触した企業の人は、俺をかなり見下した感じだったと思う。

とにかく、こちらが下手に出たと思ったら、こちらに無理難題、直訳すると他にも無いのか、もっとよこせだったかな。やってられないよ。

日本に来て一番よかったことは比較的、大好物の和食が食べれたのは、よかったが。

他は、そうだな、日本といえるし日本といえないかな、違和感のありすぎる日本だと思う。どちらかといえば半軍国主義みたいな国の印象だと思う。

他にも日本に潜入してまず、白銀武らについて調べたけど。一応、まだ一般人として確認はされたけど、確か、衛士になったり死んだり捕獲されたりするんだっけ、接触できないからどうなることやら。

最後にアメリカに関してだけど、干渉に巻き込まれたのかな。とにかくへんなことになった。

まず、大手に関してだけど、どちらかといえば企業の利益第一、第二に面白い技術もってこーい、祖国の誇り？何それおいしいのみたいな方々だったかな。

まあ、それでも国は怖いとは言っていたけど。意外と本音で語れそうな人が多い感じかな。それでも彼らも企業の人、損得勘定が強く現実主義者が多くて助かったけど。比較的、味方になってくれるみたいだから。まあ、そんなこんなで結構有意義な接触を果たしましたよ。

ああ、そうそうアメリカのハンバーガーにスーパーLセットがあるかなと思ったら、ありましたよ。しかも天然で、とにかく量が多い。アメリカ人でも食べきれないほどであるらしいとは聞いていたが、何とか30分かけて食べきりましたよ。まあ、量を食べるならいいかなと思うね。味は人によりけりだけど。

他にも国連総本部の見学（潜入）したり、ホワイト ウスの見学（潜入）したりとペン ゴンを観光（笑）したり楽しんでいましたよ。情報を含めて。

そんなこんなでアメリカ観光を楽しんでいたんだけどニューヨークで怪しい集団に囲まれたんだけど俺を捕まえようとしていたみたい。某ステルスで逃げ切りましたが。後々、調べてみたらCIAとマフィアが行ったらしい。なんでも、多くの企業（技術に関しては、まだ、ばれていなかったみたい）に接触する俺に目をつけ尋問しようとしたらしい。

それは、どうでもいいんだが最後は凄かったな、ホテルで休んでいたら二人組みの男性が訪ねてきたんだ。見た目がそう某M・Bの二人組みだったな完全に。しかも、聞いてみたら宇宙人関連の部署の人。もう完全に某映画の人だった、ただ目的がどうやら俺の持っている技術を譲ってほしいらしい。何でも我々はアメリカ力であってアメリカではない部署であり、宇宙に飛来したBETAを含めての地球外生命体から地球を防衛する部署であると。祖国よりも地球のためみたいな方々らしい。凄い胡散臭いけど嘘をつくなら、もう

少しまでもな嘘をつくと思うから。俺は二つ返事でOKを出し、条件を出した。

その条件とはまず、技術を譲る代わりにこちらとの連絡手段が有ること、次にこちらにとっての有益な情報を提供すること。次に国連の現状に関して情報とオルタナティブ計画に関しての情報を提供してくれと頼んだ。

二人は、首を縦に振ってくれた。商談成立したということだ。

最後に二人が出て行くときに俺は“あなたの部署の名前は？”と聞いたら、“名はありません。しいて言うならナイトクロウと”そう言って出て行った。

この世界に来て面白いことになりそうだ、そのとき思ったのは言うまでもないが。

そんなこんなで世界一周、企業接触報告は終わるが、これから南極基地に戻ります。

さて、次回……。

11部・接触するのはいいが考えて行動しないと、いけないと思う。（後書き）

ネタですね。わかります。でも、ナイトクロウに関してですが地球外生命体がいるなら、その部署もあっても良いじゃないかということを出してみました。一応、味方です。実際にアメリカでもよく似た部署が在ったらしいのですが。かなり前に閉鎖されましたが。

感想や批評がありましたらお願いします。

12部・企業を立ち上げるには下地が必要だ。（前書き）

ZEROです。

アンケートの集計結果ですが。

1つ目は一企業として世界に介入するルート

2つ目は政威大將軍殿下に接触し帝国の技術面をサポートするルート

3つ目はアメリカ内部に入り込み反第五計画の組織を立ち上げるルート

の3つが有りました。

結果・1つ目は一企業として世界に介入するルートに決まりました。
アンケートをありがとうございました。

ということ、企業編に突入します。

では、本編を・・・。

12部・企業を立ち上げるには下地が必要だ。

12部・企業を立ち上げるには下地が必要だ。

南極地下基地・大会議室

賢次は報告書片手に会議室に入りディスプレイからのデータを確認しながら椅子に座っていた。

ある程度確認をし終わるとアリスを呼んだ。

「うーん、アリスさーん」

「はい」

「第一目標の経過状況は？」

「現在の状況ですか。第一の目標の第一段階が終了し、現在第二段階に移行中です。まず、工場設営に関してですが、完全なオートメーション化で短期間に大量生産が可能になったことで、まず、MSを100機生産可能な工場が1週間前に3棟が完成し、初期に造られた工場群と共に現在、急ピッチでMSと装備とパーツを含め月産20機を目処に生産を行っています。次にMDに関してですが同じところのMS工場と併用してリーオー月産20機を目処に生産しています」

次に92式メーサータンク改に関してですが、比較的生産性が高いため、我々が使用する分を含めて月産70機で行います。続いてホバートラックに関してですがこちらも生産性が高いため月産60機生産を目処で行う予定です。」

「なるほどね、最低、MS月産200機生産を目指してくれ、世界

中に戦力を届けさせるにはまだまだ足りないな、まだ、この調子の生産では足りないだろうな。それによる工場の増築を必要なら頼む。何年かかるかわからないけど」

「わかりました。つづいて基地要塞の建設状況ですが、現在、区画整備により、地表から地下40mまでを対G弾や対核攻撃用の装甲版を施し下手な攻撃をものもしないようになっておりますからGが来るかコロニーか隕石の直撃が落ちてこない限り問題ありません。その下にMS等の兵器格納庫、その下に基地本部ならびに工場群、その下に兵器実験区画やMS闘技場、最下層に中央大型エネルギー炉その周りを補助用の4つの中型エネルギー炉の区画があります。そのほかの区画も常時工事中です。」

「いつの間に。あれー半年前は基地と工場のみだったような？」

「作業用機械の生産が捗った事、賢次が取り出した膨大な資源とエネルギー炉等の技術を取り出したお陰で、絶対にありえないスピードで発展しているのですよ。」

後は私が区画の計画書どおりに造っているのですから、早くて当然です。」

「そーなのかー。確かに俺の反則は自覚してたけど。アリスも人頭脳とはいえ十分反則だな。」

どっちもどっちだな本当に、ははは

「いえ、他の姉妹機は、もっと早いですよ。特化型は、特定の仕事なら確かスペックでは私より約3倍位の仕事をこなしますから、汎用型の私に比べたら天地との差がありますね。」

「はは、何それ。まさか赤い人でもいるのかな?!」

啞然とした。

「確かに一機は赤いですが、何か？」

「いや、なんでもない。（今、思えば何、そのおかしなスペックは、特化型だからなのか。アリスさんより遥かに上って何？）」

「そうですか。では、賢次。一応、報告書を読みましたが、接触しての印象はどうでしたか？」

「ああ、まずはE U系企業だけど、比較的簡単に多くがこちらとの協力関係を取り付けたよ。」

次にソ連はわからんな、あそこは協力関係とは言えるかわからん。接触しての感想では協力関係ができたと思うが、後の人悶着が有ったからな（どっちにしてもあちらが悪いんだが、でも、ちょっと面白かったけど）、どうなるかわからん。微妙な感じだから今後の展開次第だな。

次にアジア系企業だけど、一部ではまともな協力関係を取り付けたけど、明らかに過激な奴ら多すぎるくらい多かったな。（状況に切羽詰っているのはわかるが。）とりあえず、信用しない方がいいかもしれない。

次に日本だが、表面上では多くが協力関係といったほうが良いかな、面の皮が厚いとはよく言ったものだけど、とにかく俺の情報や技術を取り出せようとかなり姑息な手をよく使ってきたが（料亭、女、金、何でもありですよ。女も金などは断ったけど、飯だけはよかつたなあ）、どちらにしても信用できるとは思えんな。とりあえず腹の探りあいになりそうだ。

最後に北アメリカ系の企業だけど、俺が言うのも何だがすごい変わり者集団だったといえる。これは凄い儲かりそうだ、祖国の誇り？ そんなもん一銭の得にもならんよ、それは軍人だけでいいよ。それよりも、またなんか面白い技術があったら、また持ってきてくれ歓迎するぜ^^。だったかな、しかも、接触した企業全部だよ。有り得ないよ。でも彼らも状況の関してはEUほどではないにしろ、やっぱり切羽詰っていることは、わかっているらしく儲かる儲からない状況ではなくなったと判断していたみたい。ここは本音かな、ユーラシア大陸、全土がBETAに食われれば、次は私たちの部下や家族に及ぶ、それだけは避けたい。それで、ほぼ全部がアメリカ内部の存在のことであって、非公式での完全な協力関係を結んでくれたことかな。いい意味で上に立つ者という感じの方々だったな。

最後に提供した技術に関してだけど、生産可能になる期間だけど企業によって隔たりが有って、ビーム兵器の実用化は最低でも一年から三年はかかるみたい、実弾兵器に関してだけど、最低、一年から半という感じ、後はアリスが進言した対ビームコーティングとマグネットコーティングは、何とか数ヶ月以内に実用化の目処が立ったみたい、これなら何とかなりそうだと思う。ミノフスキー核融合炉？無理ーだとヘリウム3が無いから、売ってくれらしい。ほぼ無限に取り出せるから良いけど。

普通の大型艦船クラスか発電所クラスの核融合炉の技術は可能みたいだけど。あとは光学機器に関してだけど飛躍的に性能が上がるけど戦術機に搭載するには少し問題があるみたい。最後にOSだけでも軍に提供するか悩んでいること、信憑性上げるため実験を重ねてから提供するみたい。

一応、これだけかな」

「そうですか、全体的に判断して良い方向になったみたいですね。

しかし、EUや日本はまだしも非公式とはいえ、まさかアメリカ企業ほぼ全部に協力関係を取り付けるとは、賢次も頑張りましたね。」

「まあ、彼らは彼らなりの考えがあるということなのかもしれないが、信用は出来ると思う。ああ、それとナイトクロウに関して何かわかった？」

「はい、アメリカの公式文書を漁ってみました。そのような部署は存在してませんでした。あってもアメリカ宇宙軍BETA研究所くらいで、しかも、そのようなコードネームに関してもありませんでした。」

「え、じゃあ俺が接触したのは何者？」
驚きに変わっていた。

「わかりませんが、少なくともアメリカ軍やCIAや宇宙軍の類ではないみたいです。普通なら賢次を狙いますし、技術を譲って欲しいだけで国連の機密とアメリカ内部の情報などの重要なものを要求されて了承するとは思えないのですが？」

「そう、だよな、いずれにせよ。危険だがもう一度接触を図った方が良いかもしれないな。」
冷汗が出てきたぞ。まったく何者だ？

「接触するのはいいのですが、気をつけてくださいね。」

「ああ、しかし何者だ？」

「まあ、いいか。ナイトクロウに関しては、また後だな。」

「そうですね、賢次。接触を終えましたが、これからどうします？」

「うーん、そうだな。世界を暗躍するのも面白いといえば面白いけど。」

「そうですね、では賢次。企業を立ち上げるのはどうでしょう？」

「企業ね。企業を立ち上げるにしても場所と受け入れてくれる国を探さないといけないし、問題が多いと思うが？」

「資金に関しては問題ありませんし、場所に関しては、オーストラリア大陸はどうでしょう？」

「なるほどな、あそこなら南極に近いし、その上、広大な大地だ。オーストラリア政府にかなりの援助を送れば国籍を含めて快く了承してくれるだろう。」

「そうですね、後は輸送手段に關してですが、南極の氷で、海上輸送に難があること、世界にこの場所の存在を知られてはならないことを考えて、無人隱密型1km級超大型輸送潜水艦を4隻常時ピストン輸送という形にします。」

「OKだ。各国潜水艦に気づかれるかも知れないが、船よりましだし後は、カモフラージュ用の港湾施設に工場（MSを造れるようにするが）後は隱密性高い大型潜水艦用の地下ドックが必要だな。荷卸が可能な位の大規模の。」

「そうですね。大体の計画は決まりました。」

「じゃ、接触してきます。」

「いつてらっしやいませ、賢次」

ということで、企業を立ち上げるため政府機関に接触を図る。そう簡単にはうまくいくのか？

待て次回・・・。

12部・企業を立ち上げるには下地が必要だ。（後書き）

序盤でした。

企業の設立場所をオーストラリアに決めました。

理由として南極に近く、ユーラシア大陸が遠いといえを安全に後方支援ができ、広い広大な土地がある場所を拠点に世界を周れるからです。他にも拠点を作りますが、一応、ベースとなります。

今回は報告会みたいだな。まあ、いいか。

感想や批評がありましたらお願いします。

13部・非公式に会うのは結構簡単ではない。(前書き)

つづいて政府機関に接触します。

物語に関係？特に関係ありません。

では、本編を。

13部・非公式に会うのは結構簡単ではない。

13部・非公式に会うのは結構簡単ではない。

「こちら蛇さん、今から侵入する。」

オーストラリア首相公邸

「で、侵入者の君が私に何のようだね？」

「そうですね、まずはオーストラリア国籍の取得とこの国に会社を立ち上げたく、首相にお会いした次第ですね。」

現在、賢次は真夜中に首相公邸に潜入し、警備員と某蛇さんゴツコしつつ首相の寝室に潜入した、首相は侵入者の賢次の姿を見ても騒がずに席に座り、賢次も向かいに席をついていた。

「国籍？なら普通に取得すれば良いだろう、会社だって私を通さずに興せば良いだろう？それ以前にこんなまねをする必要がある？」
眉をひそめた。

「そりやそうですが、そうはいかないのですよ。理由はいろいろありますが、時間が無いことと、私はこの世界では存在していないことですか？」

「……どういう意味だ？」

「1つ目はBETAですね。私どもには、BETAに対抗する術を

持っているといったほうが良いでしょうか。2つ目に時間ですが、近い将来に世界はBETAに食われます。3つ目に私はこの世界の人間ではないといった方が良いでしょうか。」

「・・・確かに世界はBETAに食われるだろうな、だが君がBETAに対抗する術があるとは信じられないし、この世界の人間ではないとはどういうことかね？全て絵空事にしか感じられないのだが？」

「では、これはどうでしょう。」

賢次は懐から見た目が大型自動拳銃の武器を取り出した。

「何だね、ただの拳銃に見えるが？」

「まあ、見ててください。」

自動拳銃を直ぐそばにある花瓶に向けて構え発射した。

「な！！！」

開いた口が塞がれないほど驚いた。

銃口から緑の光の線が飛び出し花瓶に穴を開けた。

「お分かりなられたでしょうか？」

拳銃を懐にしまった。

「光学兵器か！？まさか実用化されていたなんて、しかもこんな小型のサイズで君は何者かね？」

「何者かこの際どうでもいいんですが。そうですね、私の名前は秋津賢次といます。」

「わかった。この際、君が何者か詮索しない方が良くかもしれないな。Mr・秋津、君の目的は何だね？」

「目的は最初の通り、オーストラリア国籍の取得とこの国に会社を立ち上げたいだけです。ああ、この条件はあなたにもこの国にも大きな利益になることだと思いますが。」

「利益だと？」

「そうです、この国は資源と観光しかない場所です。私が入れば貴国は他を先んじて技術立国という状況になるのですよ。それに我々が開発した技術をあなた方に優先的に供給できる手はずになります、のであしからず。」

「それこそ絵空事だと思うが。」

「先ほどお見せした通り、我々はあのような兵器が大量生産できる、そのための足がかりとして貴方の国で会社を興したいのですよ。」

「ふふ、つまり私の国を隠れ蓑に会社を興して、兵器の生産を行う算段かね？」

苦笑いを浮かべた。

「まあ、そうなりますね。いずれにせよ今の世界の状況ではBET Aに勝てませんから、出来るだけ我々が世界に兵器を早く供給しておかないと世界は破滅します。ですから貴方の国を足がかりに会社を興させてほしいのです。」

「・・・なるほどな、ではMr・秋津、最後に聞きたいことがある。」

「何でしょう?」

「君は、我々には無い力がある、君達は世界をどうしようとしているのだ?」

「笑われるかもしれませんが、今の人類を救うためといった方が良いかもありません。それと、今の戦力バランスを崩す目的といった方がよろしいかと思います。」

「そう、か、人類の為か確かに世界は地獄に染まってしまっている。いつ私の国がBETAに食われるか夜も眠れない時もあった。君ならもしかしたら何とかなるかもしれないな。そんな気がする。」
目を瞑りながら言った。

「買いかぶりすぎですが、ですが何とかしてみますよ。世界のいや、人類の未来のために!」
握りこぶしを作りながら言った。

「ふふ、その言葉、覚えておくよ。君が提示した国籍だが数日中に受理しておくから、会社に関しては資金面など援助できないが、出来るだけバックアップしておくよ。」

「ありがとうございます、首相。」

「何、君が提示した未来を見てみたいと思うのだよ。たのむよ。」

「はい。では私はそろそろ退室させていただきますね。」

「ああ、まただなMr・秋津、つぎ会う時は酒を飲み交わそうでは

ないかね。」

「せめて、あと二年お待ちください。さすがに未成年ですので。」

「ふふ、ではまたな。」

「はい、首相もお元気で。」

そう言つて賢次は退出した。

首相寢室

首相は寢酒にワインを飲みながら考えていた。

「人類の未来のために、か。若いなとは思つたが、今の先の見えな
い地獄より、一条の光に賭けてみるか。ふふ、今夜は悪夢を見ずに
ぐっすり眠れそうだ。」

グラスのワインを飲みきりベットに入った。この日から悪夢は、見
なくなった

サイド賢次

「よし、これで接触完了、と後は土地の購入と港湾施設の買収だな。
人員も探さないとな。」

何とか許可が下りた会社設立はまだまだ先になりそう。
待て次回……。

13部・非公式に会うのは結構簡単ではない。（後書き）

首相に接触しました。

この国は連邦制と立憲君主制が混ざっているため凄くわかりづらい政治システムになっているんですよ。

ですので今回は賢次は首相に接触しました。物語に関係ありませんが、一応繋ぎですね。

感想と批評があればお願いします。

14部・設立は金が掛かるが、それ以前に時間が掛かる。（前書き）

今回は会社設立の為の工事です。

では、本編を。

14部・設立は金が掛かるが、それ以前に時間が掛かる。

14部・設立は金が掛かるが、それ以前に時間が掛かる。

シドニー近郊ホテル

賢次は、会社設立のため関係各所に周り、大体の目的を完遂していった。結果確認のためにホテルの机で各方面の確認を行った。

「うーん、欲しい港湾施設は何とか手に入ったけど、大型タンカークラスまでは入港できないな。土木関係の人に拡張工事をお願いするか。後、工場を建てる土地も見つかったし、後は人員か。確かBETA戦争で難民や職あぶれている人もいるから、まずはそちらから雇おうかな、当然能力のある人は率先して引き抜くけど。最後は地下ドックか。大型潜水艦が入港できるほどのある程度深度がある場所がないといけないな。」

とある土木関係事務所

「という、わけです。」

「なるほど、港湾施設の拡張工事ですか。ですが国の許可に関しては大丈夫なのですか？」

「ええ、それはこちらに。」

アタッシュケースから書類を取り出す。

「・・・なるほど、わかりました。後、資金に関しては大丈夫なのですか？」

「こちらになります。」

賢次は一般の適正価格より2倍に水増した金額の小切手取り出した。それを見た代表はホクホク顔になっていた。

「こんなにも、ありがとうございます。では納期まで必ず。」

「ええ、お願いします。ああ、そうそう納期より早く工事が済みましたら幾らか報奨金を出しますので。」

「えーと、いくらに？」

「そうですね、3日ごとに今回提示した価格の1割でどうでしょう？」

「ぶ！明らかに金額がおかしいですよ。」

「私どもも、少し急いでいるのですよ。ですので、金に糸目を付けませんよ。」

神妙な顔つきで言った。

「・・・わかりました。この際、理由は聞きませんが、できるだけ急がせます。」

「よろしくお願いします。」

「ええ、こちらこそ。必ず。」
握手が交わされた。

とある建築関係事務所

「というわけです。」

「なるほど、格納庫、工場とビル等の建設ですね。国の許可も有るようですし、問題ありませんね。」

「それで、完成時期は？」

「最低、半年かかりますね。他の関係各所を利用してですから、其れ位は待っていただかないと、いけませんね。」

「そうですか、できれば少し、早めてくださいませんか。お金はいくらか出しますのです。」

「早めるのはすこし・・・。」

「分かりました、ではこの金額はどうでしょう？」

賢次が、提示した金額を見た。

「う！」

「どうでしょう？」

「わかりました。関係各所に連絡して直ぐに取り掛かります。」

「おねがいします。」

まあ、そんなこんなで何とかなったけど。しかし、遅いな間に合うか？

後は人材の確保だけと結構、難民や職にあぶれた人もいて、特に会

社関係やその重役などの様々な分野の人たちもいたため“君たちを雇いたいのだが、どうかね？”と言って、それ相応の金額を提示するとほとんどの人が来てくれることが決まった。

ただ会社は、工場や会社設立にはまだまだ先になりそうだから、とりあえず半年分の資金を渡し、また完成時期になったら必要な人材がいたら集めてくれと言っておいた、大勢が了承してくれた。

とりあえず、何とか基盤を整え始めたけど。

最後に、大型潜水艦に関してだけと真上が国立公園という最悪な条件しかなくてこちらが大慌てになった。

流石に許可をもらえないので仕方が無く、隠れて大型地下ドックの設営を目指している。で、現在、地下に坑道を通らせて自社工場方面の倉庫群に繋ぐという離れ業をしなければならなくなったが。

しかも一人で、泣きそうである。アリスさん。ヘルプミーー。

まあ、そんなこんなでオーストラリアの夏を地下で過ごした俺は、年中行事など関係なく掘っていた。

このとき年号が1996年変わったことに気づいていたが、世界に介入するには、まだこちらに戦力もなく技術は世界にまだ完全に出回っていないし、MSに至っては一機も排出できていないのである。どうしたものかと思う、いずれにせよ会社の設立が終わるまでは地下のドックの建設と坑道の拡張作業である。

まあ何とか3〜4ヶ月以内には終わりそうではあるが、それまではモグラさんゴツコである。

待て次回・・・。

14部・設立は金が掛かるが、それ以前に時間が掛かる。（後書き）

開発日記でした。現実では、ここまでやると許可を含めて普通一年では済みそうではないのですが。

次回は企業設立？です。

感想や批評がありましたらお願いします。

15部・販売網を広げるには、パイプが必要だ。(前書き)

続きまして、前回の続きです。

では、本編を。

15部・販売網を広げるには、パイプが必要だ。

15部・販売網を広げるには、パイプが必要だ。

「ふう、何とか完成させた。」

今後のことも考えて大型潜水艦を6隻収容できるドック、巨大な荷物が積み下ろし出来るクレーン、その隣に大型格納庫という、巨大な地下潜水ドックを完成させた。

坑道は、MSを運べるように大きく造つたため、MSサイズでもある程度動き回れるぐらい広い。

その全てを3ヶ月半で完成させた。

「さてと、向こうの工事の状況を確認しておくか。」

港湾施設工事現場

「ほあ、なかなか進んでるね。」

目の前ではトラックや作業員等が行きかい大いに賑わっていた。

「おお、Mr・秋津よく来てくれました。」

作業着姿の髭面のがつしりした男性が声を掛けてきた。

「ああ、監督さんお世話になります。」

「いえいえ、こちらこそ。ではこちらです。」

監督の各工事の現場案内の下、それぞれの工事の経過状況を報告された。

「なるほど、結構工事の状況は結構進んでいる方ということですか。」

「ええ、うちも久しぶりの大仕事で大張り切りなんですよ。昼夜交代で休みなしで行ったおかげでかなり工事が捗りましたね。ですの
で、納期はかなり短縮されそうですよ。」

「なるほど、それはありがたい。ならせめて作業員には無茶だけは
しないで下さい、とお伝えください」

「ふ、ははは、ありがとうございます、M r・秋津。わかりました、作業員
にはそうお伝えしときますよ。」

最後に握手が交わされ、本社ビル、工場建設現場に向かった。

ビル建設現場

「こちらです。M r・秋津。」

若いきつめの女性が現場を案内していた。

「全体の建設状況はどうですか？」

「ご希望通り、先に格納庫と倉庫の建設は完了し、工場は6割完了
し、ビル建設は7割という建設状況ですね。」

「なるほど。経過状況では早い方ですか？」

「そうですね、なんとか予定の半年を繰り上げ、5ヶ月から5ヵ月

半を目標に建設してますから。急ピッチ建設中ですね。後、1ヶ月か1ヶ月半までには完成予定です。」

「それは、また、お仕事かんばって下さいね。」

「はい、ありがとうございます。」

地下ドック

地下ドック完成が完成して数日後、2隻の輸送潜水艦がドックに到着した。

「さすが、1km級、でか」

鯨みたいなフォルム大きな黒い鉄の塊、一つ一つの港湾に無人隠密型1km級超大型輸送潜水艦が接岸していた。

「さてと、後はアリスさんが動かすといってたけど何が。」

「うん？」

一つの潜水艦前面が大きく開きハッチからMDリーオー4機が出てきた。

「サポートの無人機か。なるほど。」

無人機は詰まれたコンテナを船から降ろしていく。

MSを積んだ車が走り出し船から坑道へ走っていく。

「MS輸送車まで無人機なんて何か複雑。というよりこわいわ!」

賢次は報告書を読んでいく。

「えーと、“賢次へ 一人で大丈夫でしょうか?今回は、サポートのMDを4機ずつ合計8機、MS20機ずつ合計40機を其方に輸

送しました。その他、部品や装備、食品関係なども積みこんでおきました。お役立てればと思います。追伸・実戦の前に訓練に参加してください。”・・・・・・なにこのおかーさん？俺は子供じゃないと思うが、どちらかといえばアリスの方が、と思うのだが。なんか複雑だ。”

MDは黙々と装備や部品などを積んだコンテナを無人機トラックに積み込んでいく。

「まあ、いいか。確かにこんな馬鹿みたいな量、俺一人じゃ運びきれないよ。アリスには感謝してますよ。まったく。」
苦笑いを浮かべていた。

そんなこんなで、賢次は坑道を通り自社倉庫群地帯に足を向けた。造つておいた大型エレベータを使いMSなどを搬入していく。

自社倉庫・MS格納庫

そこには運び込まれたMSや搬入された物資が所狭しと並んでいた。
「ふう、これで終わりとなんとか終わったな。」

「後は、販売網の構築だな。国とのパイプは首相しかいないんだよな。何とか頼んでみよう。」

携帯にある番号に掛ける。

プルルルル プルル ガチャ

「ハイ、私だが」

「あ、首相、秋津です。」

「ああ、君かね、何か用かね？」

「実は、戦術機に変わる兵器を開発したのですが、それを他国に販売したいのですが、なにぶんこちらには他国とのパイプが無いため何とか首相に接触する機会与えてほしいのですが。」

「なるほどね、接触する機会はどうにかしよう。とりあえず実物が見たいのだが？」

「わかりました。とりあえず、政府関係者、軍関係者とそれに乗る衛士の派遣もお願いしてよろしいですか?」

「わかった、詳しい日程は追って知らせる。」

「ありがとうございます。首相」

「なに、君との仲だ。これくらいはな、たのむぞ」

「はい、では失礼します。」

「さて、パイプも作ってくれるし、とうとうMSが世界にお披露目だよ。ふふふ、驚きが目に浮かぶ。ふふふはははhhh hh hh。」「だれもいない格納庫に笑い声が響いていた。」

まで、次回・・・。

15部・販売網を広げるには、パイプが必要だ。（後書き）

主人公壊れました（笑）

そんなことはどうでもいいんですが、実際に会社がパイプを作るのは並大抵のことではないと思いますね。

賢次がなぜ首相に接触したのかはこのためだったのですが。

普通、実績の無い企業は良いものを造っても、怪しくてあまり手を出しません。

当たり前ですが。

さて、次回はMSが世界にお披露目です。どうなることやら。

感想や批評がありましたらお願いします。

16部・評価は人それぞれだ。（前書き）

なんか、展開が遅いような気がする。
もっと、早くしたほうが良いのかな？

今回は、MSのプレゼンですね。

では、本編を。

16部・評価は人それぞれだ。

16部・評価は人それぞれだ。

自社格納庫

遠方から数台の車が来て格納庫前で止まる。

その、一台の車から運転手がドアを開け首相が出てくる。

その後を関係者がぞろぞろと軍関係者、政府関係の役人約20名が車から出てきた。

「ようこそいらつしゃいました。首相」

握手を交わした。

「ああ、早速だが新兵器を見たい。」

「かしこまりました。では、皆様こちらです。」

「……な!」「……」

賢次は、格納庫の扉を開けると、多くがMS群に驚きの声を上げていた。

「こ、これは何かねMr・秋津いつの間にこんなものを?」

「まあ、少し面白いルートがあるんですよ。色々と。」

「は、はは、君には色々聞きたいことが有るが、あえて聞くまいで、これは、何かね?」

「はい、戦術機に変わる兵器、RMS-141、ゼク・アインとい

うMSです。」

「MS？戦術機じゃないのかね？」

「別に、戦術機と呼んでも構わないのですが。機体の基本コンセプトは、戦術機と根本的に違いますし、この世界においてだと革新的な技術の盛り沢山でしょうね。各国が見れば喉から手どころか足を出しかねないほどの、技術が詰まっていますね。」

「つまり、戦術機と呼ぶには完全な別物と、言うことか。」

「そうなりますね。では、皆様、機体の説明を行いますのでこちらへ」

賢次は、関係者を会議室に集め機体のプレゼンを行う。

「では、機体の説明をさせていただきます。RMS-141、ゼク・アイン、全高19.2m、本体重量37.6トン、この機体の主な特徴は作戦に応じて武装を変更できるハードポイントを有している点です。基本を三つの兵装に別れており、第一種兵装はビームライフルなどを使用したビーム携行型

第二種兵装は管制用ディスク・レドームを付けスマートガンによる長距離狙撃を可能とした狙撃型

第三種兵装は、実弾を主とする専用マシンガン、バズーカやグレネードランチャー、両肩のラッチにマガジンドラムを搭載。マガジンドラムから専用120mmマシンガンに給弾を行う要塞戦型と分かれています。また、その他の兵装にも換装可能になっています。

なぜ、このような兵装変化が可能になったかは、こちらをご覧下さい。機体にムーバブルフレームと呼ばれる技術を利用することで、より機体の頑丈さを兼ね備え重装備にも耐えられる機体となっているのです。」

説明に沿って基本図、兵装説明、内部構造等の映像が流れていく。

「次に、装甲に関してですが、ガンダリウムと呼ばれる。装甲を使用し、一般的な戦車砲程度の攻撃を物ともしません。

次にコックピットに関してですが、全天周囲モニターを使用しており内部の球体コックピット全体に周囲の情景を投影するシステムとなっています。

・・・以上でプレゼンを終わります。

「

周囲は、開いた口が塞がっていないか、考え込んでいるか。それぞれが口を開こうとしなかった。いや、あまりのことで声が上げられなかった。

一人の軍関係者が手を挙げた。

「どうぞ。」

「あー、戦術機いやMSだったかビーム兵器が標準装備ということかね？」

「そうです、MSはミノフスキー核融合炉を利用することで高い電力を出せることが強みです。このことで本体からの接続でビームスートガンなどの出力の高いビームが使用できるようになりました。また、ビームライフルにはEパックと呼ばれる。カートリッジを接続して使用できるようになっています。」

「すごいな、ビーム兵器が使用可能、しかも今の戦術機には搭載が難しい大口径の実弾兵器を大量に積載が可能、これは凄いな。これが、量産されれば人類はBETAに勝てるかもしれん。」

また、一人、手を挙げた。

「コックピットシステムに関してだけど。今の戦術機と比べて問題が生じないか？」

「確かに、今の戦術機に使われている汎用戦術機コックピットシステムとは完全に違いますから、問題が生じるのは否めません。この場合、パイロットの訓練しだいとなりましょう。しかし、その分周囲の索敵、パイロットの安全性等を考慮されて作られているため。今のシステムよりも格段に向上しています。」

「なるほどね、安全性を上げているのは有り難いな。」

その後、幾つかの質問が飛び交っていたが、きちんと答えられたと思う。

「さて、質問はないようなので次は実際にMSを動かしてもらいましょう。動かす衛士の方は？」

関係者の中に二つの手が上がった

「エイミー・グレントン少尉です。」

栗色髪の若い女性が言った。

「トーマス・J・ウィリアム少尉です。よろしく。」

金髪の男性が言った。

「秋津賢次です。よろしく。」

二人に握手を交わす。

「では、二人はパイロットスーツに着替えるため部下に着いていくてください。」

後の、皆様は私にきてください。」

そう言ってそれぞれが会議室から出て行く。

関係者を引き連れ格納庫前に連れて行った。

目の前には、武装を施していないゼク・アイン、二機が佇んでいた。

関係者を来賓席に座らせ。パイロットを待った。10分後、部下が二人を連れてきた。

二人の服装は、一般的な戦術機用に着用されている強化服ではなく、グリップス戦域方面に使用されていたパイロットスーツであり色は連邦仕様のバージョンで着用されていた。

「では、二人は、搭乗してください。」

二人は頷くとワイヤーに掴まるとコンピットへと乗り込んでいく。賢次は、インカムを持つと起動方法の説明する。

起動方法の説明が終えると、モノアイがビコーンと光った。

「では、二人には基本となる歩きを行ってもらいます。」

「“了解”」

二機のゼク・アインの足がゆっくりと上がり、前進する。

「どうですか？」

「“そうですね。拳動に少しコツがいりますが、意外と操縦方法は簡単のようですね。”」

「“こちらも、同じです。戦術機というより玩具の用に動かしやすい”」

最初は拳動に違和感があったが直ぐに歩いたり走ったりしていた。

「では、二人とも、次はジャンプやブースターとスラスター制御による方向転換を行ってください。」

「“了解”」

二人は、機体を高くジャンプさせたり、急加速、急な方向転換を行っていた。

「それくらいで良いですよ。（戦術機に乗っていたとはいえ、俺より上達が早い様な？）」

「では、次に射撃操作に移ってもらいます。格納庫前のトラックにビームライフルが積んでいますので、それをお取りください。」

二機は、格納庫前に行きトラックからビームライフルを手についた。

「では、射撃目標を出しますので、それを狙って破壊してください。」

「“了解”」

遠方から目標がそれぞれ8機、置かれていた。

「では、目標を破壊してもいます。」

ビューン ドカン

エイミー機が放ったビームが目標に当たった。

「命中確認」

ビューン ドカン

トーマス機が放ったビームも命中した。

「よし、命中」

「こちらからでも命中を確認しました。では交互に目標を破壊していきましょう。」

「“了解”」

ビューン ドカン ビューン ドカン

二機は、1発の撃ちもらしなく全ての目標を破壊した。

「デモンストレーションは完了しましたね。では、二人は機体を格納庫までおねがいします。」

「「了解です」」

二機が格納庫に行くのを確認すると、それぞれの感想を聞いた。

「これは、凄いな戦術機とは別物だな」とか

「ビーム兵器が現実目の前に」とか

「量産の暁には、れぴ」とか

とにかく、賞賛の嵐だと思う。

まあ、そんなこんなで、二人が戻ってきた。

「お疲れ様です。機体の搭乗しての感想は、どうでしたか？」

「今までの、戦術機と比べて扱いやすく動きに無駄が無いですね。

今、どちらに乗れと言われたら間違いなくMSの方が良いですね。」

「エイミーと同意見ですね。確かに機体にコツが要りますが、その分、性能に見合った働きをしてくれますよ。あの機体は」

「それは、良かった。作った甲斐があったというものです。」

まあ、なんとかお客さんの対応を終えた。

首相が帰る直前。

「お忙しいところご足労、ありがとうございます。首相」

「なに、有意義な見学だったよ。いずれ、こちらも君の兵器を買う

と思うから、また頼むよ。」

微笑を浮かべていた。

「はい、ありがとうございます。」

「では、失礼するよ。」

そう言った後、首相の車が走り出し、車列が見えなくなるまで賢次は見送った。

首相専用車

一人の軍高官が言った。

「首相、いくらBETA戦に必要とはいえ、あのような兵器は無用な争いの引き金なるのではないでしょうか？」

「ああ、確かに世界が狙うだろう特にアメリカ政府だろうな。」

「でしたら、なぜ、兵器輸出を止めないのですか。いずれ、彼、本人が狙われると思いますか？」

「・・・それは、わかっている。だが我々には時間が無い。いずれ、BETAは東南アジアを抜け、このオーストラリアを狙ってくるだろう。そうなったら国どころの騒ぎではなくなる。我々は追い詰められているのだよ。地球という檻の中だな。」

「・・・確かにそうですね。」

「だが、彼自身もそれを承知の上で行っているのだよ。人類の未来のために、な」

「人類の未来のために、ですか？」

「そうだ、だから出来るだけ我々が手助けしていこうではないかね。」

「は、了解しました。」

別の政府関係の車

「なあ、エイミー。MS、凄かったな。」

「確かに明らかな性能差を感じたわ。動きも火力も全てにおいて。」

「確かに、だがあれが量産されれば戦局は変わるな、それにお前の祖国も。」

「馬鹿、それは母がイギリス出身というだけじゃない。それに生まれも育ちもオーストラリアよ。国籍は二つ有るけど。」

「まあ、良いじゃないか。この、ご時勢、どこも劣勢なんだ。助けられるなら助けようじゃないか。それで良いんじゃないか？」

「ふふ、そうね。たまには貴方の説教でも聞いてあげようじゃない。」

「はは、たまには、は、余計だよ。」

そうしながら、車列は走っていく。

サイド賢次

自社簡易会議室

賢次は書類の確認を行っていた。

「ふんふん、第一段階は終了。会社設立も完了するし、後の兵器も送られてくる。後は、他国の軍事関係者に接触だな。」

事務所の外は、暗くなっていた。

待て、次回……。

16部・評価は人それぞれだ。（後書き）

うーん、戦術機に慣れていればMSはこれくらい可能なのかな？
判断しにくいのですよ。確かに戦術機はMSより扱いにくいとは思
うのですがここまで短時間で操作に慣れるものなのか？と、思いま
すね。

そんなこんなで、ゼク・アインが世界の舞台に立ち始めたというこ
とになりました。

他の兵器も出てきます。

企業編長くなりそうだ（汗）

感想や批評がありましたらお願いします。

17部・思惑は人それぞれだ。（前書き）

書くのはいいのだが歴史が合っているか？

難しい所です。

では本編を。

17部・思惑は人それぞれだ。

17部・思惑は人それぞれだ。

やあ、賢次だ。ナイトクロウの接触のため、現在アメリカにいる。とは言っても、直ぐに接触も面白くないから、現在、国連総本部を見学（潜入）し、会議を見学している。

国連総本部・本会議場

「では、オルタネイティブ予備計画召集に關しての會議を始めます。

」

議長席の議長がいった。

「では、計画提案国のアメリカ大使に創案を述べてもらいます。アメリカ大使どうぞ。」

「では、述べさせていただきます。現状におけるBETA戦線の状況は著しくありません。

また、現状においてのオルタネイティブ4計画の対BETA諜報員育成計画に關しても、確實とはいえません。よつて、我々が提案する予備計画として、G弾集中運用案による大量破壊兵器を使用した殲滅作戦を提案します。」

会議場の各国の席が騒がしくなつた。

「静肅に」

日本代表が手を挙げた。

「日本大使どうぞ。」

「アメリカ大使。それは、我々が提案した案を完全否定することですか？」

「そうでは、ありません。あなた方が提案した案では確実性が無いということですよ。」

「何を根拠に？」

「いいでしょうか。仮に対BETA諜報員育成計画に関して成功したとしましょう。果たしてそれでBETAに勝てるのですか？何千、何万のBETAに勝てるのですか？創案自体もこの場にいる皆様方にも、荒唐無稽と思われるのではないのですか？」

「く、しかし、オルタネイティブ4計画は、BETAの情報収集並びに殲滅を目的とした計画ですよ！」

「それは、わかります。しかし、先の計画も含め大きな犠牲を払って得た情報は微々たる物なのですよ。今回の計画も途中で頓挫する恐れがある。そう考えているのですよ。」

「・・・だから、今回の予備計画案なのですか？」

「そうですね、BETAを殲滅するには大火力で広範囲を破壊する。G弾を使用することで人員の損失も少なく。効果的にBETAを殲滅する、理想的ではないですか？」

会議場が騒がしくなった。

「静粛に」

「・・・しかし、G弾を使用することで、その地域は、問題のある場所になるのですよ?」

「それは、仕方ありません。ですが、今、現状の打破できない以上、G弾の使用はやむおえないではないですか?」

会場がまた騒がしくなった。

(まあ、アメリカの言い分もわからなくはないな。最終的な結果がわからない以上、G弾の使用は致し方ないな。それでも、自分の故郷に核などが落ちたら俺でも怒るだろうな。まあ、どちらにしてもどの陣営につく気はないが。こちらはG弾より恐ろしいものを大量に保有してるし・・・。)

「静粛に、では表決を採りたいと思います。お手元のボタンに賛成、反対をお願いします。」

結果は、賛成 アメリカを含む南アメリカ諸国とアフリカ諸国とその他。反対 日本 ソ連 EU アジア諸国の少数 無投票が多数という結果になったが。結果は可決という結果になったなんだろうか?

「では、次の議題に移りたいと思います。日本等戦術機開発国が提案した、プロミネンス計画に議題に移ります。」

「では、代表者の方どうぞ。」

「はい、プロミネンス計画に関しての計画がまとまりましたので述べさせていただきます。」

まず、各国が提唱した先進戦術機技術開発計画に關してですが、その実験場に関して何箇所かの候補がありました。が、アラスカの国連軍ユーコン基地を実験場が一番適当と決まりました。

なお、先進戦術機技術開発計画に運用する上では、基地の規模では問題があるため、拡張工事が行う必要あるとのこと。以上です。

「

「反対の方はどうぞ。」

「……無い様なのでプロミネンス計画の発動を宣言します。」

「では、以上で今回の国連総会は、閉会とさせていただきます。」

（ふうん、プロミネンス計画か。TEの方々だな。確か、アルゴス試験小隊とかだな、いずれ仕事上接触するかもな。あれ、でも干渉に關係あるのかな？まあ、いいか、其の時は表舞台に立っているか歴史が変わっているかもな。ふふふ。）

ワシントンD・C ポトマック河畔

「ほあ、これは凄い桜並木だな」

戦争中にもかかわらず多くの人々が満開の桜を見に来ていた。

「ベンチがあるし待ちますか。しかし、サンドイッチを食べながら桜を見るのは、なんかシユールの氣がする。まあ、真下でBBQする馬鹿よりマシだが。」

ベンチに座りながら桜を見ていた。

目の前に流れてくる花びらが河に落ちるたびに波紋が起きる。

「まあ、いいか。こういうのも、確か日本から送られた桜で、お返しにハナミズキだったかな。でも友好の桜か。後の出来事を考えると、悲しい出来事だよ。まったく。」

その時、黒いスーツの男性が声を掛けてきた。

「すいません、そちら空いていますか？」

「ええ、空いていますよ。どうぞ」

「ありがとうございます。」

男性が隣に座った。

「夜烏ですか？」

「・・・そうです。」

「ご用件は？」

「一言で言います。あなた方は何者ですか？」

「・・・最初にお会いしたとおり、アメリカであってアメリカではない部署です。」

「・・・しかし、アメリカの公式文書を漁ってみましたが、そのような部署は無いのですか？」

「・・・当たり前ですよ。我々は公式文書にも存在していない部署ですから、大統領やその上層部でさえ、その存在を知りませんね。」

「・・・。」

啞然としていた。

「我々は、当初の目的通りに貴方に技術を貰い、その代わりに情報提供をする。それ以上もそれ以下もありません。ですから、安心してください。」

「・・・わかりました。私もそれ以上は聞きません。しかし、一つ聞きたいのですが。」

「何でしょう？」

「あなたは、どちらの味方かを。」

「我々は、この星のために戦うものです。それを邪魔するものは、たとえ祖国でも容赦しません。それが、答えですね。」

「まあ、あなたとの友好関係は維持したいと思いますので安心してください。」

「わかりました。その言葉、信じてみましょう。」

「ありがとうございます。他は？」

「A.L.予備計画のメンバーに関してを。」

「A.L.予備計画は、国内でも大統領、軍上層部過激派並びに大多数の上院と下院の賛成派が多いですね。中立も多いのですが、少なからず反対者もいることですね。副大統領も我々もその一人ですが。」

「なるほど。何とか止める方法は？」

「現状では無理ですね。何かきっかけがないと現状打破するのは、

容易ではありませんね。」

「そう、ですか。（いずれにせよ。歴史どおりに事が進むことになるかもな？）わかりました。大体、把握しました。」

「他はありますか？」

「大丈夫です。色々ありがとうございました。」

「いえ、こちらこそ。また何かありましたら、ご連絡してください。」

「ありがとうございます。」

「では、また。」

そう言って男性は離れていった。

「ええ、では」

目の前で桜の花びらが飛んでいる。

「さて、これからどうするか。そろそろ、会社も完成するし、首相に頼んでいた各国軍のお偉方に接触しないといけないな。一度、戻るか。」

そろそろ、桜は散り始めていた。

さて、次回……。

17部・思惑は人それぞれだ。（後書き）

本編でした。

AL5は実際は1997年に完成するのですが。

その完成する前の1996年の仮案を出しました。

TEは、接触はするのかな？とつと本編進ませるべきか？

うーん、難しいところだ。接触しない可能性が高いような気がする。

感想や批評がありましたらお願いします。

18部・会社が出来ると、管理が苦労する。（前書き）

今回は、企業が設立します。

では、本編を。

18部・会社が出来ると、管理が苦勞する。

18部・会社が出来ると、管理が苦勞する。

企業設立式典

ようやく、本社ビルの建設が終わり、社員全員と関係各社の代表や首相を含む政府関係者を企業設立式典に招いての式典を催していた。賢次、会場の中央の演説台で社長挨拶を行っていた。

「お忙しい中、集まった皆様方は完成を祝福していただきありがとうございます。」

皆様は、社長にしては若すぎると思う方が多いと思います。

ですが、世界は、BETAに、よって脅かされ現在においても予断を許さない状況になっているのは皆様もご承知のはずです。

また、こうしている間にも、多くの兵たちが命を落としているのです。

そのためにも、わが社が兵器を生産し人類の勝利を導かないといけないのです。

最後に若輩の身ではありますが、この秋津賢次は会社のために粉骨碎身していきますので、よろしく願います。」

ワーワー

「ありがとうございます。では、シャンパンを、乾杯。」

「「「乾杯」「」」」

それぞれが飲み干していく。

「では、式典は、終わります。では、パーティーをお楽しみください。」

賢次の挨拶が終わると部下は、式典を終えると同時に政府関係者と関係各所の代表とうちの重役を連れてパーティー会場に連れていき、後の者は、この場でのパーティーという形となった。とはいっても区切られた同じ場所ではあるが。

賢次は、関係者に挨拶回りしつつ、首相に挨拶をしていた。

「首相、お忙しい中、参加していただきありがとうございます。」

「いやなに、こんなパーティーなら、毎日でも構わんさ。」

「ははは、それはまた。そういえば、日程は決まりましたか。」

「ああ、接触は、2週間後のシドニーで開催されることになったよ。」

「それは、タイミングが良いですね。」

「ん？なんか有ったのかね。」

「実は、MSまたは戦術機支援用の次世代戦車、簡易型索敵機が完成し、いずれ首相にお見せしようとしていたんですよ。」

「ほお、いつの間にか言いたい所だが君ならやりかねんな。ははhhhh。」

大笑いしていた。

「ふふ、それはもう。」

「で、予定通りの性能かね？」

「ええ、一つはメーサーを利用した戦車で、もう一つ多機能と機動性を有した索敵車ということですね。」

「ほお、それは面白いことになりそうだな。期待しとるよ。」

握手を交わした。

「はい、ありがとうございます。」

別の場所

タキシード姿のトーマスが皿いっぱい料理を積んで食べていた。

「エイミー料理うまいぞ。全部、食材が天然なんて太っ腹だよ。この社長。」

トーマスが言ったことだが、南極で生産された食材を輸送しているため、色々な天然食材がこちらに大量に来ていたのである。

まあ、流石にビンテージの酒の類は無理だが。

赤いドレス姿のエイミーがジト目で睨んでいた。

「トーマス、行儀悪いわよ。でも、そうね、ここまでの食材は揃えるなんて普通無いわね。有ってもアメリカ位のものね。」

「そうだな、しかもだよ。政府関係者はまだしも、社員全員にまで天然なんて信じられないぞ。」

「そうね、この会社の財力というより、どこでここまでの食材を揃えたかが気になるけど。」

「まあ、いいじゃないか。料理が旨い、酒が旨い、パーティーを楽しまなきゃ損だろ。」

トーマスは、口いっぱいに料理放り込んでいた。

「ふふ、そうね。楽しまなきゃ損ね。」

微笑んでいた。

サイド賢次

うちの重役の一人が言った。

「社長」

「うん？」

パーティー会場の端っこに連れ出す。

耳元で言った

「じつは、自社倉庫方面に侵入者が入り込んだようです。」

「それで？」

「はい、警備の者が追い駆け、なんとか捕まえました。」

「で、何者が吐かせた？」

「それが、齒の中に毒を仕込んでいたらしく、捕まえた時にはもう。」

「・・・そうか。わかった報告感謝します。」

「しかし、何者だ？」

「わかりません。遺留品を調べましたが、身元がわかる物は何も。」

「わかった。引き続き警戒を厳にしておいてください。」

「は。」

そう言って下がっていった。

（何者だ。各国諜報員にしてはあからさま過ぎるが、有力はアメリカ、ソ連だな、日本も入る可能性があるな。

まさか、他国の企業が？いずれにせよ、俺が世に出てきた以上こうなることは予測済みといえば、そうなんだが。

敵味方がはつきりしない以上、気をつけないと。当分は様子見だな。）

「まあ、いずれにせよパーティーを楽しまないとな。」

パーティーの夜は更けていった。

待て、次回……。

18部・会社が出来ると、管理が苦勞する。（後書き）

式典でした。

みじかー！。

企業名は何にしよう。ぜんぜん決まっています。

日本なら人の名前や地名でもいいのですが、何かいい名前ないかな？

ということで、当分の間は名前が出てきません。

考えておけよ。

すいません。

感想や批評ありましたらお願いします。

19部・顧客確保は地道である。(前書き)

今回は各国プレゼンです。

では、本編を。

19部・顧客確保は地道である。

19部・顧客確保は地道である。

シドニー 軍部会議場

賢次だ。健在、我が社が開発した兵器のプレゼンを行うため軍の会議場に来ている。

えーと、BETA戦争に参加している国は。まず、日本、ソ連、EU、アジア諸国（大東亜連合）、アメリカ、その他の多くの軍関係者が俺の兵器のプレゼンを見るために集まったみたいだ。集めすぎですよ、首相（泣）

まあ、そんなこんなでプレゼンを開始し始めて、会場に集まった全員がアツといわせたのは面白かったけど、その横で実際にMSを見たうちの軍関係者はニヤニヤしつつである。

気持ちはわかるが。

前回とほぼ同じ説明だから省くが、MSが今までの戦術機概念と大きく違うからか。

みんな、終始無言というより、啞然としてるか、うなり続けていたが。

「このように、戦術機に変わる兵器として開発されたのが、このMSゼク・アインなのです。」

「では、ご質問は？」

これも、大体、前回と同じで
ビーム兵器に関して、

次に兵装システムに関して

次にムーバブルフレームに関して

次にガンダリウムに関しては、現在の地球では今のところ製造できない。うちの社が供給（能力で取り出す）という形になるな。

次にミノフスキー核融合炉に関してはヘリウム3が生成できないから、此方の独占になる。

次にコックピットに関しては、軍関係者は少し懐疑的だったな。

要するにそのような方法にして大丈夫なのか。

はつきりいつてそちらのより性能が桁違いなんだが。

横槍が多かったのがアメリカ（持っている特許を独占しているため）だったな。

といっても世界が真似できる技術は

UCに使われているビーム兵器の完全再現は難しいだろうな。おそらく同じ出力と射程するのに大型化する可能性が高いことだな。

ムーバブルフレームに関してだけど再現は可能だけど劣化するか。

今の戦術機では根本的に設計をやり直さなければならぬだろうな。

ガンダリウムとミノフスキー核融合炉は技術と材料的に無理がある。

最後にコックピットシステムだけど技術面の問題があるが世界に一般化させるには大雑把に見ても10年以上はかかると考えている。

そのため、おそらくコストを除けてもわが社のMSの独壇場になる

ことは紛れも無い事実なと思う。

提供するMSはブラックボックス化を施しておくけど。この国は必

要ないかもな。仮に奪われても再現は無理だし。

しかし、今思えば、前に各国企業に送った技術は、何とかなったの

かな？

かな？

「では、次に戦術機等の支援兵器として、92式メーサータンクについて説明させていただきます。」

投影された図から、亀の甲羅みたいな形状、その両側に8個の車輪、砲頭部にパラボラ型という変わった形の戦車の写真が出てきた。

「型式番号DAG-MBT-MB92正式名称を92式メーサービーム戦車と呼びます。全長16メートル 全幅9.5メートル 全高4.8メートル 重量55トン 最高速度時速90キロとなり、乗員は二名、砲手と運転手となります。この戦車の兵装は500万ボルトメーサー砲1基、8連装ミサイルランチャー2基となります。では、メーサー砲に関して説明します。このメーサー砲の光線発生システムはプラズマを発生・加熱し中間子の生成を行い、収束照射というプラズマ加熱ミラータイプ改で砲塔後部には超伝導発電システムと冷却システムが搭載されています。」

「では、質問はありますでしょうか。」
いくつか質問があったが要約すると。
まず、「メーサー兵器の実用化など信じられない。」いや、目の前に実現してますけど。

次に「天候などにより威力減衰と最大射程は？」改造して15kmまで跳ばすようにしたけど。まあ、減衰を考えても、10kmまでなら予定通りの性能が出るけど。流石に試してないけど威力的に最大距離でもBETAもちろんのこと戦術機でも消滅できるような気がする。流石にGは無理だけど。あれは、勝てん。

次に「こんな巨大な戦車はどう動かすのかね。」一応、改造して装甲を変えたり小型核融合エンジンを変えたりして元の重量よりは大幅に減らしてあるけど、まあ下手な橋とかじゃなければどこでも運用できるし、前のよりよくなっているはずだが。サイズは変わっていないけど。

とまあ、完全に別物のメーサータンクではあるけど、これは完全ブラックボックス化にしておく必要のあるやばい代物になった。提供するだけでも恐ろしいぞ、これ（汗）

まあ、以上が質問内容だった。なんといいですか、皆様の心拍数大丈夫かなと、思うが。

はい、そのうちの連中、ニヤニヤから大爆笑に変わりそうだからやめなさい。

「えーでは、索敵機に関して説明させていただきます。装甲兵員輸送車ホバートトラックです。

このホバートトラックの特徴は、戦術機に随伴しての早期警戒や多目的支援を目的に開発された。車両です。

このため、戦術機に機動性についていくためキャタピラやタイヤではなくホバーシステム利用し、悪条件な道も対処が可能となります。そのため、多用途の作戦に対応できるよう各種の索敵機器のも充実させています。また、車両後部の荷台には少量ながら、武器弾薬や兵員の輸送が可能となっています。最後に本兵装は20mmバルカンのみとなります。」

「では、質問をお願いします。」

要約すると

まずは、「行動に関しても限界は？」前線に出るわけだから極端な場所でなければ、どこでもいけるはずですが。

「索敵能力は？」元々、ミノフスキー下での運用を考えて作られているから、地下のBETAからF-22の探知まで何でもござれですが。

「武装が少なすぎないか。」戦場は、主に戦術機とMSですから、生産性と戦術機の運用特性が無い人のために運用できるように開発されたのですが。これ以上コストを高くするつもりですか？必要なら自分で付けてください。

「では、以上で我が社のプレゼンを終わりたいと思います。ご視聴いただきありがとうございました。」

プレゼン終了後の会議場

EUの軍関係者が賢次に近づいてきた。

「Mr・秋津」

「あの兵器らを我がEUに送ってほしい。」

「あ、抜け駆けするな、大東亜連合にもお願いします。」

「それなら、日本も買いましょう。」

「待ってください、皆様方にもお売りしたいのですが。まだ生産が整っていないため、待っていただく形になりますよ。」

「それは、わかっている。今どれだけ、あるのかね。」

「そうですね、うちの国に納入する兵器を除けても、今、あなた方に提供できるのは、MSが50機、MBTが20車、HTが140車という感じですね。（まだ、輸送が整っていないし、下手に出しすぎると変に勘繰られるな。他のところにも恨まれるし。実際にはそれぞれ2〜4倍は最低あるんだが。徐々に出していくか。）」

「ほお、出来たばかりの会社なのに、もうそんなにも。」

「生産方法に秘密があるだけですよ。」

「まあいい、値段交渉と納入量は後ほどお願いしますよ。」

「ええ、わかりました。では、そのときに。」

別サイド アメリカ

「あの男何者だ？」

「少佐」

「うん、何かわかったかね。」

「実は、CIAの情報によりますと。あの男は7、8ヶ月前に他国と我が国の企業に技術提供したことが、報告されているのです。それもビーム兵器などの革新的な技術を。」

「あの男、何が目的だ？意図が読めんのだが。」

「さあ。CIAにも身元を調べましたが、過去の経歴並びに出生も不明でした。確認されているのはオーストラリア国籍を持っていることだけです。」

「・・・それだけかね？」

「はい、他は何も。」

「余計に謎だ。」

「しかし、少佐。このままでは我々の国の兵器産業に大打撃を与えるのは必死だと思いますが。」

「なに、問題ないだろう。やつらが生産を整っているところには戦争は終わっているよ。G弾によってな。」

「そうだいいのですが、気をつけたほうが。」

「そうだな、監視だけは続ける。」

「は」

別サイド 日本

「なにか、わかったか？」

「いえ、日本人ではあると思いますが、どこにもリストがありませんでした。」

「・・・つまり、我が国の人間かわからないと？」

「そうなります。」

「今回、彼がプレゼンした兵器は魅力的ではあるが、うちの石頭どもは買わないだろうな。」

「どうしてですか？」

「一つは、実績が無い企業だからと他国の購入競争に勝てるかわかんこと、一番の問題はアメリカ派の存在だな。」

「やはり、アメリカですか。」

「ああ、日本は弱いのだよ。アメリカの要求に撥ね返す力はないからな。おそらく、購入できても現状では数機が限界だろう。」

「・・・心中お察します。」

「とりあえず、どうかして彼にコンタクトしておく必要があるな。」

「わかりました。何とかしてみます。」

別サイド ソ連

「ビーム兵器が標準装備、メーサー戦車の量産、信じられん。いや、あの時、我が国の兵器省に接触してきたのも、あの男だったな。」

「はい、そう報告されています。」

「しかし、政府も馬鹿だな。あのような真似をしなければ、警戒されずにこちらに引き込めたものを。」

「・・・流石にその言動は。」

「気にするな、今は君しかない。前のことを考えても、手を出せないだろうな。まあ、今の状況では、彼に関する情報収集が精一杯だろうな。せめて、技術が習得出来ればいいのだが。」

「そうなりますね。」

「いずれにせよ。本国に連絡して、兵器関する報告書を送っておけ。」

「了解です。」

別サイド 大東亜連合

「くそ、この間、配備した戦術機など関係なく高性能機を開発しやがって忌々しい。」

「確か、MSでしたか？」

「そうだ、やっと新世代機の配備が始まったというのに、戦術機の予算がパーだよ。」

「そうですが、我々もビーム兵器に関しては何とかなりそうだったではないですか？」

「馬鹿か君は、あの男が来日して研究所に連行した後、いきなり戦術機が現れて研究所は完膚なきまでに、破壊されたよ。提供された技術も含めてな。おかげで何年、研究が遅れるかわからんよ。」

「は、はは、それはまた。」

「まあ、とにかく、あの男から目を離すなよ。少なくとも、あの時の戦術機に関わっているのは確かだ。」

「はい。」

別サイド イギリス
EU

「各国も動きますか。」

「はい、そうなります。」

「どうなるかですけど。できるだけ、あの企業の兵器を独占的に受注したいものです。」

「それは、難しいかと。」

「そういいますが、ヨーロッパは、殆んどBETAに占領されているですよ。今、どうにかしないといけないと思いますよ。」

「それはそうですが。」

「それに、今の戦術機では今のBETAに対抗するには力不足です。祖国イギリスの為にMSなどがほしいのですよ。」

「おっしゃるとおりです。わかりました、何とか交渉します。」

「待ちなさい。」

「はい。」

「私も連れて行きなさい。」

「それは、なりません。貴方様自らは流石に問題が。」

「だから、行くのですよ。わざわざ私が交渉するのですから向こうも無下には出来ないはずよ。」

「わかりました。王女殿下。」

別サイド オーストラリア

「司令、面白かったですね。」

「まあ、我々も最初見たときは彼らと同じだったから複雑だが。確かに面白かったな。」

「そうですね、我々に優先的に配備されますから何とかなると思うんですけど。」

「まあ、そこは使い方しだいだな。後は運用してのお楽しみだな。」

「はい。」

「所で、彼の状況はどうかね？」

「はい、部下に見張らせてガードしてますから何とかなると思います。しかし。」

「しかし、何だ？」

「突然消えるんですよ、彼。雲か霧のように。」

「はは、まるで忍者か幽霊かね？」

「さあ、彼は違うと言ってますが。」

「まあいいさ、引き続き警護を頼むぞ。」

「は。」

サイド賢次

（なんとか、おちついたな。いったん南極に戻るか。訓練と実戦もまだだし。兵器の生産状況も確認したいし。）

室内電話で副社長宛に掛ける。

「副社長。」

「何でしょう社長？」

「少し出てくるから、留守を頼む。」

「……えーと、どちらに？」

「南極とBETAに戯れてくる。」

「……はあ？」

「では、頼んだよ。」

「ちょ、しゃ」（ガチャン）

「さて戻りますか。」

そう言って社長室から出て行った。

その日から副社長のオフィスに頭痛薬と胃腸薬が常備されるようになった。

さて、次回……。

19部・顧客確保は地道である。（後書き）

本編でした。メーサータンクは設定を少し変えさせていただきました。

重量やら威力やら、魔がつく改造になってしまいました。やりすぎだ。

反省してます。実際、あの重さの問題があると思い設定を変更してしまいました。

次回に関してですが、とうとうスーパーが出てきます。といっても魔がつく改造風景ですけど。

それ以降は、訓練といよいよ実戦になります。何とかがんばりたいと思います。

感想や批評がありましたらお願いします。

20部・需要と供給はバランスが必要である。(前書き)

現状報告みたいな話になった、気がする。
では、本編を。

20部・需要と供給はバランスが必要である。

20部・需要と供給はバランスが必要である。

南極基地本部・会議室

「ただいまー。」

「おかえりなさい、賢次。それで首尾は？」

「んー上々ではあるけど。その分問題が多くなった。」

「そうですか。問題とは？」

「いやあ、企業設立には成功したけど。他国に目をつけられてな。」

「なるほど！確かにそれは厄介ですが。どうしますか？」

「なにぶん、敵味方がわからない以上、下手に動けないんだよな。信用できるのが、うちの企業とオーストラリア政府とアメリカのナイトクロウだけだな。」

「後は、信用というか何を考えているか、かな？」

「後の行動次第と思うが？」

「・・・そうですか。兵器に関してはどうでしたか？」

「ああ、何とか兵器の紹介も済んで、いよいよ販売開始だね。当分は。うちの政府に兵器の提供する流れにして、後は、ばれない」

ように少しずつ世界に流れさせるけど。

まあ、向こうも馬鹿じゃないから、いつか何らかのアプローチはあるな。過激なほうの、な。」

「・・・気をつけてくださいね。私もお手伝いしますから。」

「・・・すまないな。」

「いえ、それでこれからどうします?」

「ああ、それだけど、まず兵器生産の計画を少し繰り上げようと思うんだ。」

「え、つまり第二目標を始動するつもりですか?」

「そうなる、実は兵器を世界に提供していくのだが、問題が発生してな。

一つは購入量とコスト面で需要がまだということ、次に生産量をごまかさないといけなくて、少なく提示していること。

次に需要よりも供給が多すぎて倉庫の在庫が今のところいっぱい寸前なんだ。

とりあえず、第一目標の生産量は当分間、そのままにして、増築した工場に第二目標の生産を始めたいんだ。」

「わかりました、必要があれば生産量を増加させますのでやってみましょう。」

「お願いするよ。」

「わかりました。では、例の計画に関してですが、改修状況は全

体の20%というところでしょうか。」

「わかった、実物を見たい。」

「わかりました。第8区画にお越しく下さい。」

第8区画隔壁前

「ここか。」

第8区画の隔壁に着いた。

「ここは、セキュリティレベルが最大の場所だったな。俺がアリスでないと入れないようになってるんだっけ。」

（IDカード、パスワード、網膜認識、静脈認識、声紋認識のため合言葉をどうぞ。）

まず、IDカードをいれ、コンソールにパスワード入力、網膜、静脈認証を行い。最後に合言葉を言った。

（・・・認証確認。 隔壁の開放を行います。）

ゴゴゴゴゴ

隔壁が完全に開くとその中に足を踏み入れた。

「・・・久しぶりに見たけど、でかいなあ。」

その中は、円柱状の空間が広がり、目の前に巨大な物が立っていた。丸みを帯びた体躯に滑らかなメタリックボディ、恐竜のような頭部、短い尻尾。

背中の大型ブースターユニット、肩部二門のハイパワーメーサービームキャノンを装備したスーパーメカゴジラがアームに固定されて

聳え立っていた。

「高さ120mといえば茨城県の牛久大仏と同じだったな。・・・
変な想像してしまった。」

「まあ、それはいいとしてアリスに改造状況を聞きに中央制御室に行かないとな。」

エレベーターを使って制御室に向かった。

第8区画中央制御室

IDカードを使い中に入ると、中央に大型ディスプレイとその周りに端末が置かれていた。

「起動つと。」

ディスプレイのコンソールを叩いた。

(ログイン中・・・。)

(・・・確認。 ご用件をどうぞ。)

「アリスと繋いでくれ。」

(・・・確認。 繋がりました。)

「賢次。」

「ああ、アリス。 予定の改修部分は？」

「はい、スーパーメカゴジラの改修は、まずエンジン部をレーザー核融合炉から縮退炉に換装を行い、エネルギーの余裕を与えます。次に武器等の使用による熱暴走の対策のため冷却システムの改修。次に基本装甲の変更。」

次に対怪獣兵器の排除と武器の改修、使用武器の変更。

次にバリアシステムの換装。

次に稼働部の運動性の向上とブースターシステムの改修。

次にコックピットを通常の3人から1人で行えるように大幅改修。
そのためのOSの変更となります。

以上が予定としている改修計画です。」

「細かい改修計画書は？」

「こちらになります。」

えーと以上、計画書ではこうなっている。

スーパーメカゴジラ改修計画書

計画案作成者 アリス

計画目的

かつて開発されたメカゴジラの問題点の解決とより強力な兵器として改修計画を図る。

計画案

1. エンジン

レーザー核融合炉から縮退炉に換装することで、エネルギー兵器の照射時間と威力の増加を図る。

次に今まで高エネルギー使用する武器ならびに防御システム等の機体の稼働に対する使用時間の限界の向上を図る。

次にエネルギーの余裕が出るため、そのほかのシステムに廻せるようにする。

2．冷却システム

今までの冷却システムから新しいシステムに変更することで、今まで問題となっていた武器の連続使用による熱暴走をなくす。

次に、エネルギー炉や砲身等による全体加熱の軽減を図る。

次に高熱量兵器の対する対処のための対策を図る。

3．装甲

現在のメカゴジラにはNT-1と呼ばれる装甲が使われている。

これを変更し、より軽量で耐熱性、柔軟性と強度を持った装甲に変更を図る。

なお、ダイヤモンドコーティングに関しては、現状のままの装備にしておく。

4．回路

内装部における素材等を変更し、より伝達速度の向上と回路の過熱を防ぐ。また、センサー部の改修を図る

5．駆動部

元々、メカゴジラは、駆動部における運動性が低いため、より運動性を上げるため駆動部の改修を図る。

6．ブースター

本体のブースター並びにガルーダのブースターを使用することでマッハ2までの飛行を実現していたが、ブースターを新しいシステムに組み替えることでより高速で飛行できるようにする、

7．コックピット

搭乗人数は通常3名 ガルーダに1人で行うため、一人または無人で操縦できるように改修を図る。

次にそれをサポートする人工頭脳の開発を図る。

次に機体の動きによる搭乗者の悪影響（揺れやG等）などを軽減するため、コックピット内に重力制御を行い、影響の軽減を図る。

次にコックピット内の安全性を図るための改修を行う。

8．武装

対G兵器の排除と変更並びに光線兵器の射程並びに威力強化等の改修を図る。

排除対象

ショックアンカー

パラライズ・ミサイル

トランキライザー・ミサイル

変更兵器

ショックアンカー 高出力拡散レ

ーザーシステム

パラライズ・ミサイル 分裂ミサ

イル

トランキライザー・ミサイル プ

ラズマ弾頭ミサイル

改造対象兵器

メガバスター

レーザーキャノン

ハイパワーレーザービームキャノン

備考・射程と威力の強化を図る。

変更並びに改造対象

プラズマ・グレネード

備考・G等が存在しないこと。

ダイヤモンドコーティングの溶解によ

る使用不能

かつての問題があるため対策と改造が

必要とする。

9・ 防御システム

実体弾やエネルギー兵器などの対策のため、バリアシステムの検討を図る。

10・ ガルダ

MDシステムを利用して運用できるようにしつつ、基本状態をメガゴジラとのドッキング状態にしておき、必要に応じて分離と合体が行えるようにする。

11・ マイクロ波によるエネルギー送信

衛星からのエネルギーを背びれからエネルギー供給できるようにする。 また、衛星からのデータリンクを可能にする。

とまあ、以上が改造計画の概要である。

「なるほどね。 ここまでの改修であると一から作り直したほうが早いような気がする。」

頭を掻いていた。

「そうなりますね。 どうしますか？」

「・・・一からと元からの改造ならどちらがかる？」

「・・・普通なら元からの方がかかりますね。 ですが元の部分も残しつつ改修を行うため。 あまり変わったものではないと思いますが。」

「なるほどね。まあ、いいや多少時間がかかっても良いから、1998年の前に完成を目指してくれないか？」

「わかりました。それまでには改修作業は終わると思います。」

「わかった。頼むよ。」

「はい。」

「うーん、これで計画案はまとまったみたいだけど。次、どうしよう?」

「そうですね。訓練が一時的にストップしてましたから、その再開とメニュー終了後の実戦はどうでしょう?」

「そうだな!? もう、そろそろ実戦を経験しないといけないし!」

「では、最初のメニューとして、久しぶりですから、私との模擬戦。

次に私と組んでの作戦行動。BETAに関する座学。

最後にBETA戦などを想定しての2対大量の演習機との戦闘。実戦となります。」

「メニューが多いが、ブランクもあるし、チーム組んでの作戦行動や大量戦闘による長期戦等もしたことないからな。やっておく必要はあるな。」

「そうなりますね。では、善は急げといいますから、今日からはじめますか?」

「ああ、お願いするよ。」

さて、アリスとの訓練再開だけど、ものすごく苦勞するだろうな。

待て、次回・・・。

20部・需要と供給はバランスが必要である。（後書き）

・・・とうとう出してしまった（汗）

後悔？まあいいか。それ以前に単体でもBETAに勝てそうな超兵器な気がする。

敵はBETAじゃなくてGでも勝てそうな気がする。

計画段階での話だから変更も考えておこう。

魔改造じゃなくなっているような、完全に別物だろこれ・・・。

感想や批評がありましたらお願いします。

21部・二人で行動すると作戦の幅が広がるが、その分制限が多い。(前書き)

今回は、ふたりで組んでの作戦行動訓練です。

では、本編を・・・。

21部・二人で行動すると作戦の幅が広がるが、その分制限が多い。

21部・二人で行動すると作戦の幅が広がるが、その分制限が多い。

MS闘技場

「はあ、はあ。」

賢次は、コックピット内で満身創痍の状態だった。

「お疲れ様です。賢次。」

「あ、ああ！？　なんとか、な。」

今まで、アリスとの様々な条件の模擬戦を行っていたのだが、通算42戦　0勝　40敗　2引き分けという散々な結果となっていた。引き分けは、全部時間切れであつたが。

「一時的なブランクもあるとはいえ、一度もアリスに勝てないなんて！？　凹むぞ！」

「当たり前ですよ。私は賢次の反応よりも速いですし、賢次は元人間とはいえパターンが出やすいんですよ！　ですから、対処されやすいということです。」

「は、はは。これは、当分の間は、アリスの扱きだな。まったくく！？」

「それでも、賢次は下手な衛士よりも、遥かに強いですし。この間、研究施設の戦術機を撃破したではないですか？」

「いや、あれは成り行きだし。コックピットを避けていたとはいえ、それ以前に第二世代機だったし、負ける以前の問題のようなく。」

「それでも、結果を示したのですから、いいと思いますよ。」

「・・・そうだな。とりあえずどうする？」

「そうですね。賢次も比較的1対1の戦闘においては、強い方の正規兵クラスですから。流石にベテランやエースレベルではないと思いますが。ただ、戦闘経験がないことと様々な教習が必要なことですね。それを解決すればさらに上位に入りますから、次のメニューにいきましょう。」

「わかった。」

「では、ツーマンセルによる作戦行動に移ります。」

「ツーマンセル？」

「二人のチームですよ。」

「なるほど、つまりアリスと組んで作戦行動を行うメニューですか？」

「そうなります。なお、指示を飛ばすのは賢次となります。私はその指示に従うだけです。」

「指揮か。慣れてないと問題が生じるな。」

「そのための訓練ですよ。後は経験と行動あるのみです！」

「わかった。やるよ、場所は？」

「兵器実験区画です。」

兵器実験区画

「では、訓練を開始します。作戦目標は目標地点まで行軍到着後、基地破壊と基地に配備されている部隊の無力化となります。では、隊長指示を。」

マップを開き現在地、予定進路と破壊目標の場所の確認を行っていた。

「では、まず基地までの通常の行軍ルートではあるが各要所に演習機の防御陣地が敷かれている。このため、時間と相談しながら迂回もしくは、突破の形となる。次に基地に関してだが、当然ながら多数の演習機がその周りを守備している可能性が高い。まずは、着いてから基地の規模を確認してからが当たり前だが。まずセオリーとして、基地を強襲かく乱し注意を引き付けつつ、その背後を叩く流れとなる。または、正面から距離を保ちつつ強襲により敵を各個撃破、となる形になるかと思う。後はタイミングが大事だが。」

「了解です。賢次、では兵装はどうしますか？」

「そうだな、基地破壊と部隊殲滅が目的だから、今回は二機とも第三種兵装でいこう。もっといけば他の役割を決めれるのだが、仕方がない。今回は少数での殲滅作戦だから。危険が大きいな。」

「そうなりますね。」

「とりあえず、行軍を開始する。」

ドシーン ドシーン ドシーン

「賢次、どうやら一つ目の防衛陣地が見えてきました。」

防衛陣地にはトーチカや戦車や高射砲などの兵器が進路上を立ち塞がっていた。

「数は比較的少数ではある、か。基地破壊が主任務であるから、弾薬の節約。下手に倒すと敵に警戒される可能性があるな。ここは、時間は余裕があるから迂回し基地に向かう。」

「了解です。」

進路変更して、基地に向かう。

ドシーン ドシーン

「賢次、基地5km手前に到達しました。」

「ああ、見えてるよ。接近どころか隠れる場所がないぞ！おまけにメーサータンクがいるし、下手に食らえば死ぬぞ！？」

何とか、基地手前約5km地点に来ていたが基地の周りには何も無い荒野という。動けばバレバレという状況である。演習用メーサータンクは基地の東西南北に一機ずつ配置され、その周りを戦車などが配置されていた。

「賢次、どうしましょう？」

「うーん、制限時間と日暮れは？」

「時間は後2時間、日暮れまでは約1時間30分という所でしょうか。」

「夜襲でもと、考えていたが実質、30分間での作戦になるな。かといって今からだとバレバレだし。」

「まあ、やれないこともないでしょうが、どうします？」

「では、俺が日暮れ5分前に行動開始、敵をひきつける。アリスは反対側に行きその5分後に行動開始、基地本体の背後を叩く。その後は、基地部隊の無力化だ。」

「了解！」

「アリス頼んだよ。」

「ええ、賢次も気をつけて。」

「やってみるさ。」

ドシーン ドシーン

アリス機は作戦場所の移動を開始した。

「さて、時間まで各部のチェックと武器の状態を確認しておくか。」
賢次は各部のチェック終えるとやることが無くなり暇を持て余したが、作戦開始時間20分前に差し掛かっていた。

「後20分、か。 時間があるようでないな。」
そんなこんなで1分前になっていた。

「5、4、3、2、1、作戦開始」
ドシーン ドシーン

賢次は行軍を開始した。

「さて、お客さんは。（パアーン）うわぁ！」

真横をメーサービームがすり抜けていった。

「はは！ おいおい、幾らなんでも無茶苦茶だろう！？」

取り巻きの戦車も攻撃を開始する。

バアーン バアーン ドーン ドーン

「くう！ 何とか応戦しないと！？」

何とか、交わしながら、マシンガンで応戦を開始する。

ババババババン

ドン ドン

戦車などには命中しているが砲火の嵐を回避しながらという状態であつたため有効弾が当たっていなかった。

「取り巻きが！（パアーン）くう、せめてメーサーだけでも破壊しないと！」

十字砲火にさらされながらも大きな損傷もなく回避を続けていた。

「武器を変更！ クレイバズーカで何とかー！ 当たれー！」

バアン

メーサーに弾が吸い込まれていく。

ドカーン

「よし！ 破壊を（パアーン）またかー！」

防衛をしていた残りのメーサータンク3機が、賢次の機に接近してきた。

「おいおい、シャレになら（パアーン）ないぞー！？ バカヤロー！」

三機のメーサービームを何とか避けてはいたが装甲が焼けてきていた。

パアーン　パアーン　パアーン

「死ぬ、死ぬ！？　アリスさん、早く来てくれー！」

ドカーン

基地の方から爆発と煙が見えていた。

「アリス！？　やったな！」

高速で接近する機体が、バズーカの弾を放った。
ドカーン

賢次、前方のメーサータンクの一機が爆発した。

「何とかがんばりましたね。　賢次。」

通信越しに凛々しい声が響いていた。

「ああ！　危うく蒸発になりそうになったよ！」

「ふふ、ここまでやれたの（パアーン）　話は後ですね！」

「ああ、潰すぞ！」

「了解！」

二人はメーサータンクを全滅させ、最終的に基地防衛隊を壊滅させた。

通信・・・。

「ミッションコンプリートですね！　賢次。」

「ああ、死ぬかと思った。」

「ですが、レーザー級のほかも相手をしますから、実際はもっと苦勞しますよ!」

「確かに、メーサータンクをレーザー級と考えれば余裕で避けられない。」

「一応、MSは重レーザー級でなければ何とか耐えられますので安心して下さい! と言っても避けることが大事ですけど。」

「てか、メーサータンク半端じゃないんですが?」

「そうですね。あれは、レーザー級と比べて射程距離は短くても連射速度と威力はBETAのより高いはずですから、普通は避けられませんね。」

「はは、それはまた、しかも当たれば蒸発、シャレにならないな。冷や汗が出ていた。」

「まあ、そうなりますね。ですがBETAの予行演習にはなっただけだと思いますか?」

「ああ、十分すぎるくらいにな。で、次は確かBETAを想定しての大量戦だっけ?」

「そうなります。といつても演習機ですから、実際のBETAとは違うのですが。それに近いことになります。」

「大体わかった。とりあえず演習とはいえBETA戦の空気とい

うもの感じないとな。」

「そうですね、機体の整備のついでに、BETAの座学を始めますので本部会議室にまでお願いします。」

「わかった。」

演習用のメーサーとはいえ光線級クラスの攻撃を避けるのは困難を極める。

これからどうなることやら。

待て、次回……。

21部・二人で行動すると作戦の幅が広がるが、その分制限が多い。
(後書き)

本編でした。

戦闘描写や作戦方法を思い浮かぶのはむずかしいな。

実際の戦争でも、ツーマンセルやスリーマンセルなどでチームを組んで作戦行動していることが多いみたいですな。

次にメーサーは化け物ですね、わかります。

実際に飛んできた場合は気づく前に蒸発ですから、発射前に回避もしくは動き回るしかないんですね。

牽制としても、威力的にも化け物クラスでした。しかし、ここまでやってGに通じないなんてありえないな。でも、そこがいい。

一応、この話の設定ではメーサーの威力は、通常のビーム兵器より高く設定してます。

問題は、小回りと砲塔の回転速度ですけど。戦車としては最強ですね。おそらく。

感想や批評がありましたらお願いします。

22部・知識も対処方法も必要だと思う。(前書き)

本当は今日、対BETA演習にと思いましたが、次回に持ち越しになりそうです。申し訳ない。

今回はBETAの知識に関しての話です。と、いつでも簡潔ですが。

では、本編を・・・。

22部・知識も対処方法も必要だと思う。

22部・知識も対処方法も必要だと思う。

本部会議室

演習後、賢次BETAに関しての座学を行うため。会議室に来ていた。

中央の大型ディスプレイからBETAのデータが映し出される。

「では、賢次。講義を始めます。」

「ああ頼む。」

映像から様々なBETAのデータが出ていた。

「では、この世界において現在確認されている、BETAを説明していきます。」

BETAは兵士級、闘士級、戦車級、要撃級、突撃級、光線級、重光線級、要塞級となります。

それらのBETAは、それぞれに役割があり。

まず、人間を基本的に攻撃する、兵士級と闘士級。

次に戦術機等に取り付き装甲に穴を開け人間を食らう戦車級。

次に戦術機の相手を行う要撃級、前面に硬い装甲を持つ突撃級。

大きく動きは緩慢では有るが10本足、尾節の触手を持ち高い攻撃力と防御力持っている要塞級。

次に380?離れた高度1万mの飛翔体を的確に捕捉し、30?以内の進入を許さない光線級、これは原種と呼ばれるものですね。

次にその進化型の天候に関係なく高度500mで低空飛行する標的に対しても約100?以上の有効射程距離を持つうえに決して味方誤射はしない、重光線級に分けられます。」

「なるほどね。　なんとかMSだと脅威度はある程度下がるが、しかし何、この光線級の射程！？　いくら改造メーサータンクやMSでも下手に食らえばただではすまんぞ。」

「賢次、言いますがこれらが何千、何万と押し寄せてくるのですよ！」

「うわゝ。　無茶苦茶だな、確かこれに良く似たのが？　トップの宇　獣だったかな？」

「まあゝ、それに比べればBETAは可愛いもの？　て、あの世界のより、この世界の方が悲惨ですよ！」

「まあ、そうなるな。　やはり、一番厄介なのは重レーザー級だな。」

「そうなりますね。　何とかこちらにはMSやビーム兵器等がありますし、他はフィールド搭載機が有ればいいのですが。　企業に提供した技術が世界に芽が出ればいいのですが。」

「それは、この世界の人のがんばり次第だろうな。　流石に俺の能力に限界がある以上、出来るだけ支援したいが。」

「それはそうですが。　それを、邪魔する馬鹿がいるのも事実なんですよね！」

「ふうゝ。　そうなんだよなゝ。　この世界の連中は追い詰められているのに足を引っ張り合っている。　しかも、自分の故郷の星を捨てて逃げるといっておまけつき。」

頂垂れていた。

「どこに逃げても、ずっとBETAの影に怯えなければならないのに。」

「彼らからすれば、それが最善だということさ。他に選択儀が無ければ、ね。」

「そうですね。我々がこの世界の人たちに選択儀を与えることで生き残る可能性を増やすのですね？」

「そうなる。後は行動次第だが。」

「わかりました、賢次。まだ、講義の途中なので続けます。」

「わかった、頼む。」

「はい、後々判明するBETAに関してですが。オリジナル以外のハイブの中核を担っているブレイン級と呼ばれるものです。これは、BETAのエネルギー生成や捕獲した炭素系生命の生命維持活動、情報を集め指揮や上位主に報告をになう存在で一般では反応炉と呼ばれますが。」

「一応、BETAの一種に分類されます。当然、これが破壊されるとハイブは文字通り死ぬことになります。」

「なるほど。これがAL4横浜基地の中核になっていたのか！」

「そうなります。ですので明星作戦の横浜ハイブでは、ブレインを破壊せず周りのBETAのみの殲滅なと思います。」

「つまり、明星作戦においてはモゲラによるブレインの直接攻撃はなく、スーパーメカゴジラやMD達による面攻撃になるのか。・・
・G弾の攻撃状況によっては、かなり投入しないといけないかもな。」

「はい。まあ、干渉で変化しない可能性がありますので、どこまで介入できるか？、ですが。」

「干渉か。歴史どおりBETAとやり合わないといけないし！
かといって下手にやれば干渉されるし、やってられんぞ！？」

「・・・後は、やりようですね。続けます。
桜花作戦において確認されたBETAですが、まず、地中を進み多数のBETAを運ぶ母艦級。

オリジナルハイヴの大広間と上位存在のブロックを結ぶ横坑の両端に存在するBETAではないのですが門級。

そして、最後にオリジナルハイヴの中央部に存在している重ブレイン級と呼ばれるBETAがいます。

一応、この地球上の全てのBETAを指揮している存在で、日本においては、あ号標的と呼ばれています。

これは、各ハイブのブレイン級と通信し指揮を行う司令官の役割を担っています。これを倒せば何とかかなりますね。」

「ここまでいくと、無茶苦茶だな！？メカゴジラやモゲラよりでかいなんて！！」

「それでも、でかいだけでメカゴジラやモゲラの方が火力と防御力は世界最大だと思いますが？」

「いやまあ〜ね。改造するといえオリハイブに直接乗り込んで

も余裕もって二機か三機いたら確実勝てるな！

まあ、流石に能力に限界があるし、それ以前に時間が……。

しかし、重ブレイン級か。この世界の最終目標ではあるが、こちらからでは動けないだろうな。

……おそらく他人任せになるが白銀君らがどうにかしてもらわないと、何が起こるかわからないだろうな。」

「そうなりますね。では、どうしますか？」

「うーん。其の時にしないとわからないけど。当分の間は世界の支援、時期になったら裏で支援の形になるな。接触できないし。」

「わかりました。講習も終わりましたので。この後、対BETA演習を行いますよ！」

「わかった。」

対BETA演習のため賢次は格納庫へと歩いていく。

待て、次回……。

22部・知識も対処方法も必要だと思う。（後書き）

本編でした。

BETAに関してはあれだけの大群をMSでもかなり苦勞すると感じられます。

オリジナルハイクの内部は確か200m弱の凄乃皇四型でも通れる大きさでしたね。

どれだけでかいんだよ。

まったく、120mクラスのメカゴジラが余裕で歩けるレベルの空洞やりすぎ（汗）

物語の流れですが当分は企業での活動がメインだと思います。兵器活躍の話や戦場が、多く出るつもりですが。別段関係ない歴史は変わります。（一応、ゲームの歴史どうり進むのですが）。

最後におそらく賢次は主人公らに接触しません。

よって接触しての会話や話はないと思います。間接的に支援話と

かは有りますが。

とは、いつでも主人公らがどういう行動したかによりますけど。

感想や批評がありましたらお願いします。

23部・補給も休息も必要だと思う。 (前書き)

訓練編やつと終わります。

少し変更がありました。申し訳ない。

今回、やつと搭乗機が出てきます。

では、本編を・・・。

23部・補給も休息も必要だと思う。

23部・補給も休息も必要だと思う。

兵器実験区画

対BETA演習を行うため、賢次とアリスのゼク・アインが佇んでいた。

コックピットでアリスの説明を受けていた。

「では、作戦方法を説明します。今回、目的は一定時間の防衛となります。」

2機での行動、時間は、3時間、補給があり、攻撃へのバリエードを随所に設けています。

今回はBETA戦という状況で行うため、それぞれのBETAの特性に似た演習機と大群で防衛陣地迫るという形になります。なお、今回用意する演習機は5000機用意し、一定時間に増加する形になります。」

「普通、ここまでいくと放棄したくなるのは山々なんだがな〜！とりあえず、俺の兵装は第三種兵装でアリスはレーザー級の狙撃を行うため第二種兵装で行こうと思う。」

「わかりました。時間がかかりますが兵装の変更も可能にしますので。」

「わかった。では、始めるか！」

「了解！」

激戦が始まった。装甲のみ強化した戦車、MDが接近防衛陣地に向けて進軍し、敵の唯一の遠距離攻撃がメーサービーム攻撃のみという異様な状況ではあったが、数が200機ほど進軍してきた。

パーン パーン パーン

賢次が牽制と回避をしつつ指示を飛ばす。

「アリス！」

「了解！」

アリス機は、ビームスマートガンを構えメーサータンクに照準を合わせ、狙撃を行う。

ビューン ドカーン

「破壊確認！」

「よし！ とりあえずアリスはメーサーを狙撃、俺は他の敵の足止めを行う！」

「了解！」

賢次は接近してくる敵を殲滅しつつ、敵をひき付けていた。アリスは一機ずつメーサーを狙撃破壊していった。

ある程度、演習機の残骸となっていたが後ろから援軍が接近していた。

「はあ、はあ！？ いくら潰したんだ？ 100から覚えてないぞ！？」

「賢次は、352機撃墜、私は104機ですね!」

「実質、後4500以上も潰さないといけないのかよ!？」

「そうなりますね! 賢次、そろそろ弾薬が尽きそうですが!」

「先にアリスは第三種兵装に変更! その入れ替わりに俺が第二種兵装に変更を行う!」

「了解!」

アリス機が補給のため後退した。

「後は、アリスが来るまでの間、敵を引き付けな!」

バババババン

接近する戦車やMDに風穴を開け殲滅していく。

「くう!？ そろそろ弾薬が!？（パーン）くそ、メーサーが鬱陶しい!」

「賢次!」

バババババン

アリスの機が兵装の変更を終え戻ってきた。

「助かった! 俺も補給に戻るから、少しの間頼む!」

「了解!」

補給場所に到着すると、巨大な建物にアームが伸びていた。

「武装をパージ、第二種兵装に変更開始！」

アームが装備をパージさせ、アームから武装を取り付けていく。
取り付けが完了すると画面に完了と出ていた。

「さて行きますか！」

賢次は、戦場に戻った。

「はあ、はあ！ 後何分だ？」

「後、20分です！」

「そろそろだが、きつい！」

「賢次、頑張ってください！（パアーン）賢次が崩れればこちら
も持ちません！」

「わかっている！ いくら演習とはいえ実際のBETAなら死んで
るぞ！？（パアーン）まったく！？」

「そんな事いつてる暇は無いでしょう！ 頑張ってください！」

「わかってるよ！」

何とか、攻撃を凌ぎきり演習は終了した。

通信・・・

「お疲れ様です。 賢次！」

「ぜえ、ぜえ！？ いくらなんでもあれは無茶苦茶だろう！」

「いいですが、実際はもつと危ないと思いますよ！ あれでもまだ妥協した戦いでしたから。」

「妥協、か。 確かに実際はどうなるかわからん覚悟を決めてやらないとな！」

「そうなります。 では、訓練を終えたので実戦の前に搭乗機に乗ってもらいます。」

「お、やつと俺の搭乗機が出るのか！」

「はい、一応私にも搭乗機がありますが。」

「アリスにもか。 わかった、場所は？」

「第一区画 第四格納庫になります。」

「わかった。 早速行こう。」

第一区画 第四格納庫

隔壁を開けると1機のMSが佇んでいた。

2本のアンテナのZ系の頭部、背中の大型バックパック、4本の背部ビームカノン、大型のビームスマートガン、無骨さと華奢なボディを兼ね備えた連邦系ガンダムのEX-Sガンダムが佇んでいた

「これは、EX-Sガンダムかよ！」

「どうですか、賢次？」

「また、面白いものがきたな。」

「そう、いいですが。賢次が乗るガンダムでは一番いい機体ですよ。」

「なぜに？」

「一番の理由は、賢次にニュータイプの適性が無いこと。次にこのガンダムは未熟なパイロットでも人工頭脳のサポートで縦可能だということ。」

次に装備にはレーザー級に耐用できる、常時ではないですがフィールドが搭載されていること。

次にインコムとリフレクターインコムが搭載していることですね」

「なるほどね。俺にニュータイプの適正が無いのは仕方がないし、未熟なのも事実だな。」

レーザーに対処できるフィールドがあるのは有難い何とかなりそうだ。

確かインコムは火気管制システムのサポートで制御されているんだっけ。

まあ、いいや。これはいい機体だ大切にに使わせてもらっよう。」

「ありがとうございます、賢次。一応、機会があつたらその機体も改修作業に廻らせてほしいのですが？」

「理由は？」

「性能的には、なんら問題ない機体なのですが。なにぶんIフィールドの展開時間が短いためジェネレーター部などの改修が必要だと思ふのですよ。」

「・・・なるほどね。わかった、時間があつたら改修を頼むよ。」

「はい、わかりました。」

「それで、アリスの操るMDは何？」

「この格納庫にはありませんが、ガンダムエピオンが私の搭乗機となります。」

「・・・ガンダムに乗ってれば強いのかよー！」

「・・・賢次の機もガンダムなんですが。」

「あほかー！ゼロシステムを搭載してる時点で化け物じゃねーか！趣味か趣味なのかー！」

「趣味ですよ。当然でしょう！」

「・・・もう良いですよ。わかりました。アリスの機はそれで良いですよ。どうせ、俺はNT機使えませんよ。」
いじけていた。

「いじけないで下さい、賢次。一番あつた機なのですから良いじゃないですか。」

「確かにオールドタイプとしては一番いい機体かもしれないな。
・・・まあいいか俺の相棒になる機だからがんばるか。」

「その意気ですよ！　では、これから賢次だけ専用機に乗って私は専用機ではなく別の機体で実戦に参加します。」

「・・・実戦か。　場所は？」

「ビルマ（ミャンマー）領マンダレー管区マンダレー方面　マンダレーハイブ近郊での戦闘になります。」

「・・・ちよつと待て！　いきなりハイブ方面戦かよ！」

「大丈夫ですよ。　まだ、フェイズ2には到達してませんし、規模も小さいのでその戦力を削ぐという形になりますよ。　ですから、可能ならハイブを攻略という形になりますね。」

「・・・まあ、それで良いよ。　出発時刻と到着時刻、参加部隊数は？」

「出発は明日。　到着は3日後の未明でしょう。　参加部隊に関しては賢次と私のみとなりますね。」

「わかった。　後を頼むよ。」

「はい。」

規模が小さいとはいえ、下手すればハイブ戦に突入する可能性があるかもしれない。
どうなることやら。

待て、次回・・・。

23部・補給も休息も必要だと思う。（後書き）

本編でした。

前々から搭乗機の話はありましたから、そろそろ出すべきだということでした。

私的にEX-Sガンダムは、スキなんですけど。

次にアリス機はA・C世紀方面の兵器をMDを使いますからイメージということではエピオンになりました、とはいってももう少し後になります。変更になります。

最後に実戦に関してですが、なれない機体ですから、攻略しない感じになります。

感想や批評がありましたらお願いします。

24部・実戦は、予想どおりにいかないものだ。（前書き）

今回は実戦です。

少し問題があったため、少し内容が変わります。

まずりました、闘士級ではなく要撃級でした。申し訳ない（汗）
では、本編を・・・。

24部・実戦は、予想どおりにいかないものだ。

24部・実戦は、予想どおりにいかないものだ。

ベンガル湾 ビルマ（ミャンマー）領 シットウエ西150km海中
賢次らは実戦ため、強襲用潜水艦に乗り込み三日間の航海後、現在
ビルマ領海に来ていた。

潜水艦CIC

「賢次、そろそろですよ。」

「ん、そうか。」

賢次は、格納庫に向かう。

MS格納庫

格納庫の扉を開けると二機のMSが佇んでいた。

「俺の乗機は？ あれ？」

今回、操縦するはずのEX-Sガンダムではなく、増加ユニットを
排除したSガンダムが佇んでいた。

格納庫でアリスが放送してきた

「申し訳ありません、賢次。 今回、地上での戦闘ではEX-Sガ
ンダムでは重量等の運用上の問題があったため、今回は増加ユニッ
トを排除した後日、改修して運用できるようにしておきます。」

「・・・わかった。 となると、かなり武装と装備が制限されるな。」

「とりあえず。 今回はSガンダムをお願いします。」

「・・・了解した。　しかし、おれはその隣が気になるのですが？」

黒く華奢なボディ、四角いカメラアイ尖がった頭部、OZ-12S MS MDトールラスが佇んでいた。

「他のMDではスピードではどうしてもSガンダムに負けるため、それについていくため、この機体になりました。　それに比較的、この機体は一級品だと思いますよ。」

「それは、そうだが。　MDとしてはいい機体だな。　あれ？　でもエピオンは？」

「まだ、機体の調整と私とのリンクが完全ではないため、今回は使えません。」

「ふん。　まあ、いいか、何もハイブを落とすわけではないんだし。」

「あくまで、実戦の空気を感じるためですから無茶はいけませんよ！」

「わかっている。　無茶はしないつもりだ。」

「では、賢次。　そろそろ浮上しますのでコックピットに乗り込んでください。」

「了解！」

浮上し格納庫の前面が開放される。

「賢次、私が先に行きます！ 賢次は後についてきてください！」
トールスがカタパルトに固定される。

「了解！」

「システムオールグリーン、トールス出ます。」

シャーン

高速でトールスが射出される。

射出後カタパルトにSガンダムが固定される。

「さて、これからが実戦か。・・・どうなることやら。」

「システムオールグリーン！ まあ、頑張ってみるか！ 秋津賢次、Sガンダム出るぞ。」

カタパルトからSガンダムが射出された。

マンダレーハイブ南西200km地点チンドウィン川 昼

「しかし、密林が多いから下手に動きづらいな。」

現在、チンドウィン川を沿ってマンダレーを目指しているが、道が切り開かれているとはいえ密林により行動に支障をきたしていた。

「そうですね。ここはBETAの勢力圏内のはずですから、そろそろBETAの反応が！？ 来ました！ 数は！ 小型級約200、突撃級50、要撃級40、重レーザー級が10、要塞級1ほどの部隊が前方約20km地点をこちらに向かって進軍中です。」

「わかった！ 起伏が激しいここで待ち構え、重レーザー級を優先的に撃破！ その後、要塞を撃破する！ 後は各個撃破だ！」

「了解！」

数十分後、BETA部隊が現れた。

「アリス、狙撃するぞ！」

「賢次、私のビームライフルでは、届きませんので！ 賢次のスマートガンで狙撃してください！」

「了解だ！」

ビームスマートガンを構え重レーザー級にターゲティングを行う。

「（ピピ）！？ レーザー警報！？ 賢次、隠れてください！？」

「な！？ （バアーン）うあ、あぶねえ！？」

「注意してください！ レーザーに当たればMSでも蒸発ですよ！」
怒声が響いていた。

「わかつている！？ くそ、あの探知能力と射程は鬼か！」

「賢次、私がBETAをひきつけます！ その間にレーザーを！」
トールスがブースター吹き、密林を陰にしながら、接近を行う。

「了解！ くう、照準内に遮蔽物が！？ ええい南無三！」
ビューン

スマートガンから、放たれた青いビームが、遮蔽物となっていた突撃級ごと、ぶち抜き目標の重レーザー級を沈黙させた。

「よし！ これなら！ アリスもってくれよ！」
ビューン ビューン

賢次は、照準内にいる重レーザー級を撃破していく。

「よし、後1匹！（バアーン）くそ、さっさと落ちやがれ！？」
ビューン

「よし全レーザーを撃破！ アリス！」

「こちら大丈夫です！ 要塞級をお願いします！」

トールスには少々の被弾が見られたが、高速で動きながらビームライフルで要撃級等を撃破して、BETAを翻弄していく。

「オーケーだ！ さつさと落ちろーデカ物がー！」
ビューン

ビームが胴体部を包み込み大穴を開け要塞級が崩れ落ちていく。

「アリス撃破した！ 残った残敵を撃破していくぞ！」

「了解！」

突撃級の数体が賢次に向かって高速で接近してきた。

「その程度の突撃で当たるかー！」
回避していく。

「さて兵器を試させてもらう、インコム射出！」

頭部に搭載されていたインコムが、動きながら突撃級の後ろに周り、ビームを放った。

ビューン ビューン ビューン

放ったビームが、突撃級の背中を突き刺し接近してきた突撃級を沈黙させた。

「よし、これで突撃級は全滅が出来た！ 後は殲滅あるのみ！」

「賢次！ こちらも要撃級の全滅に成功しました！ 後は、小型種のみです！」

「了解した！ 殲滅するぞ！」

「了解！」

その十数分後、BETAの全滅した。

戦闘後、周りはBETAの死骸が折り重なっていた。

「ふう〜。これで全滅か？」

「・・・そのようですね。近くに反応はありませんから、おそらく遊撃部隊かなんかでしょう。」

「・・・そうか。しかし、実物のBETAを見るとエグイな。」

「そうですね。これが何千、何万もいるのですから、やってられませんね。」

「ああ、まるで軍隊蟻のようだな。数と凶暴性だと。」

「・・・人よりでかいですし、知恵もありますから余計に性質が悪いですけど。」

「そうだな、これからどうする？」

「そうですね。実戦は経験しましたし、賢次も私も少し被弾がありますから、大事をとって今回は撤退しましょう。」

「そうだな。では、回収ポイントまで行くか！」

「はい。」

ベンガル湾、予定回収ポイント近辺 夜

「ん、戦闘？」

前方5キロ地点で発砲音と爆発が響いていた。

「・・・そうみたいです。少数とはいえBETAと大東亜連合のF-18と交戦中のようです。・・・どうします？」

「んー。戦闘状況は？」

「思わしくありません。何機かやられているようです。」

「うーん、助けでもいいんだけど。隠密行動だからなあ。・・・
ばれたらまずいんだよな。」

「いずれにせよ。戦局は思わしくありませんから助けましょう。
回収ポイントは変更すれば良いですし。」

「わかった。助太刀するか！」

「了解！」

サイド 大東亜連合衛士

「隊長、このままでは持ちません!?」

「援軍が到着まで、何とか、持ちこたえるんだ！」

「無茶言わないで下さい！ その前に全滅ですよ!？」
バババン バババババババン

突撃銃の弾をばら撒きながら、B E A Tに応戦していた。

「とりつかれたー！？ 助けてくれ！」

「脱出装置が！ う、うわぁー！」

また一つ、また一つと悲鳴と通信が消えていく。

「くそ！ このままでは！」

「隊長避けてください！」

「なにー！？」

突撃級が目の前に迫っていつていた。

ビューン

青い光が突撃級を焼いた。

「な！ なんだ！？ え、戦術機、か？」

サイド 賢次

「まったく！？ 無茶やりすぎだな！？ さっさと後退すればいいものを！」

「そういますが、向こうも必死ということですよ！」

「この際、向こうの都合など、どうでも良いんだが。・・・殲滅するぞ！」

「了解。」

「インコム」

インコムが動き回りB E T Aの死角に攻撃を加え焼いていく。

「その程度では、衛士には当てられても私には当たりませんよ!」
トーラスが回避しながら、的確にビームを当て殲滅していく。

「落ちろ蚊トンボー!」

ビューン ビューン

青いビームが、多くのB E T Aを巻き込みながら夜空を照らしていた。

10分後、B E T A殲滅が完了した。

「さて、帰るか!」

「賢次、大東亜連合機が通信を呼びかけていますが。 どうします?」

「うーん。 無視。 撤退するぞ。」

「了解!」

2機はブースターを吹かし夜空へと消えていった。

サイド 大東亜連合衛士

「な、なんだったんだ? あれは!?!」

「・・・さあー？ 一応、味方だったと思いますが。」

「そうだと良いが。明らかに戦術機の動きでは無かった！ それにあれらの戦術機に使われていた武器はまさか！ 光線兵器ではないのかね！？」

「そうだと思いますね。明らかにBETAを焼きましたし、うちの軍のものではないと思いますね。」

「・・・いずれにせよ。軍本部に報告しないといけないな。今回の戦闘や所属不明の戦術機に関してを。」

「そうですね。」

夜空に星が輝いていた。

サイド 賢次 潜水艦内部

「実戦は、予想外のことが多いな。」

「そうなりますね。それでも賢次も頑張りましたし、及第点ですよ！」

「そうだな。しかし、あの数だったから良いものを、あれが何十倍というと思うと寒気がするよ。」

「とりあえず、数と質を揃えないと未来はありませんから、これからの頑張り次第ですね。」

「そうだな。アリス、このまま本社に戻るから頼む！」

「わかりました。では、地下ドックに向かいます。」

「ああ、頼むよ。」

さて、実戦に関しては何とかなっただけ。あれより何倍、何十倍もの数を相手にするとなると、一人では不可能だろうな。もう少し味方がいれば。

待て、次回……。

24部・実戦は、予想どおりにいかないものだ。（後書き）

本編でした。

ハイブ戦どころか方面にも行っていないじゃん。
申し訳ない、内容調整したらこんなことになった。

それと、大東亜軍の接触は、姿のみのため通信系をレコーダなどには記録されていません。

向こうは、異様な戦術機が居たとしかわかりません。
どちらにしても所属は賢次の企業ではないため、未確認戦術機という形になると思います。とはいっても、国連やら何やらで大騒ぎになるのですが。

それは、後ほどで。

感想や批評がありましたらお願いします。

25部・予算と納入時期は、きちんと決めないといけない。（前書き）

内容合わせが難しい。

今回は、現在の企業の状況に関してですね。

なんか、進ませたいのにアイディア思い浮かばないな。
どうしよう。

追記・時期的に季節を間違えました。

8月中旬ですからまだ、冬でした。申し訳ない。
では、本編を。

25部・予算と納入時期は、きちんと決めないといけない。

25部・予算と納入時期は、きちんと決めないといけない。

ジェフウティー社 本社ビル 会議室

賢次は軍に提供する受注生産に関して会議を行うため自社本社に戻っていた。

「では、兵器の受注に関する会議を行う。では、報告を頼む。」
報告書を確認しながら、ディスプレイでのデータを見ていた。

受注担当者が席を立ち、各データの説明を始めた。

「はい。では、報告させていただきます。」

今回、MSに受注に関してですがオーストラリア政府は、今年中に50機 また戦力増加のため、戦術機用のビーム兵器などの装備をお願いしたいそうです。 来年度に関しても必要数が注文する可能性があるので。

次にEUに関してですが、再来年の3月までに各20機ずつ総数で80機の注文ということです。

また、ソ連に関しては、試験機として5機を、兵装などの装備は20機分がほしいことでした。

次にアジア各国ならびに大東亜連合は、試験的に使用するためMSを3機ずつ総数9機、装備10機分。

日本においては、MSは試験用に2機、装備品関係15機分や戦術機用のビーム兵器の注文がありました。

アメリカに関してですが来年の11月までにMSを30機、戦術機用に換装できる装備があればお願いしたいそうでした。

最後にその他の国に関してですが、多くの国に関心がありました。

値段と数量の交渉に折り合いが付かず現在も難航しているそうです。

「

「うーん、現在、わが社が保有しているMSの総数に関してはどうだ？」

倉庫管理担当者

「はい、現在、わが社が保有しているMSの総数に関してですが、100機が此方の倉庫で保管されています。装備に関してですが、約160機分の装備が保有されています。」

「・・・そうか、工場の生産に関しては？」

工場管理担当者

「はい、工場に関してですが、兵器の生産は可能にはなったのですが。月産15機生産は、まだ無理ということでした。」

「・・・つまり、今回あるだけで送らなければならないな。（実際は、南極や地下ドックにもMSなどが多くおいてあるんだが、南極の存在を知られてはならないし。地下ドックもそうだし。倉庫区画に関しては部分機密になっているから、うちの重役でもその存在を部分的に知っている程度だろうしな。どちらにしても、大量放出はまだ無理だろうな。）」

「そうなります。では、続けまして、メーサータンクに関してですが、多くの国で大量販売してほしいことでした。現在の希望数は総数で500車ですが、増加しそうです。ですが、現在保有数やコスト面や技術面で我々の会社では、生産がまだ難しいため、少量販売になります。」

「・・・そうか。（まあ、無理だろうな。この世界で作れる技術にしていけないわけだし、オーバーテクノロジーの塊にしてみましたからな。」

大体、原子炉を小型核融合炉に換えた時点で滅茶苦茶性能が良くなった。

現在、メーサータンクは、この世界の技術では生産はまだ難しいだろうな。大体の材料や技術を俺やアリスが生産しているからな。」

これは、仕方が無いな。」

「ですが、生産状況が進み次第、増産していく形になります。」

「ん、頼むよ。」

「はい。続きまして、ホバートラックに関してですが。これは、多くの国が大量受注してほしいと希望がありました。」

「社長、ライセンスはどうしますか？」

「・・・とりあえず、受注数の確保を最優先。次にメーサータンク生産量の増加、並びに新型の開発、次にホバートラックに変わる索敵機の開発だな。とりあえず、兵器のライセンス生産はそれからだ。」

「はい、かしこまりました。」

「では、これで受注に関しての報告は終わります。」

「少し前に試験的にオーストラリア軍に供与した兵器に関しての要望は？」

担当者

「はい、MSと戦術機に関してですが。

まず、操縦系統に関して大きな違いがあるようで、ある程度の訓練期間が要るようです。次にMS用パイロットスーツと強化服の兼用で問題があるようです。

次にビーム兵器に関して、大口径実弾兵器に関してですね。

まずは、ビーム兵器に関してですが、やはり動力機関に関して問題があり、ゼク・アインに使用されているビームスマートガン等の高出力兵器が使用できないことですね。何とか、Eパックタイプのビーム兵器は使用できるのですが。

大口径実弾兵器に関してですが、一応、使用が出来ますが、やはり、MSほどの武器を積載しては、行動に支障をきたす恐れがあるということです。

どちらしても、性能面ではMSが戦術機を凌駕してますが。」

「操縦系統はどうしようもないかな、流石に衛士の訓練次第だろう。パイロットスーツは徐々に変更するしかないな。私的には強化服はデザインのちよつと……。男性にしても女性にしても、あれはいろいろな意味で、な。」

「……。聞かなかったことにしておきます。」

「……。ああ、頼む。」

まあ、動力機関に関しては、換装しなおすか、新しく戦術機の改良型を作るしかないだろう。まあ、せっかくビーム兵器が有ることだし、何とかEパックタイプを放出するぞ。」

「はい、ではそのように。」

メーサータンクに関してですが、大量に数が、ほしいとのこと。

後、戦車ですから機動性に難があること。また、整備面でも戦車に比べて少々、問題のようです。」

「・・・大体予想していたが、数はどうしようもないな。

機動性は簡易的な改造が可能にするよう開発部に言っておいてくれ。

後は、整備性が、あれだけ弄った機体の簡素化を難しいだろうな。大量にパーツを生産して、一気に取替えさせた方が安上がりのような気がする。それは、追々だな。」

「わかりました、何とかやってみます。

次に、ホバートラックに関してですが、機動性は他の戦闘指揮車に比べれば全ての面でいいのですが。やはり、戦術機等についていくのは条件によって困難な場合があるため。何とか、強行偵察タイプの特Sの要望があるようです。」

「まあ、いくら機動性が高いとはいえ、車両だからか。だが、いくらなんでもMSタイプだとコスト面で問題がでると思うが。」

「社長なら、何か対策があるのではないですか？」

「無いことは無いんだが。とりあえずコスト面で少数生産なるな。」

「わかりました。では、それは後ほどで。・・・以上で報告を終わります。」

「では、これにて本社会議を終えるが。諸君は、纏められた報告書で事に励んでくれ、以上だ。解散！」

「『『『は！』『』『』」

社長室

「社長。」

「ん、なんだ？」

「はい、お客様が、後日、社長を訪ねに本社にいらっしゃるそうです。」

「ふん、どこの？」

「一つはイギリス王室のエリザベス王女殿下です。 もう一つが、日本帝国の外務省の方々です。」

「ぶー？ 日本帝国外務省はまだしも、何でイギリス王室関係が、うちに来るんだよー！」

「さあー？ おそらく、うちの兵器の交渉ではないですか？」

「・・・十中八九そうだろうな。 しかし、極端な組み合わせだな（しかし、イギリス王室の名前は俺の世界では女王陛下のはずだよな。・・・世界が違うということか。）」

「社長、どうしますか？」

「どちらにしても、訪ねてくる以上は、きちんとした会見の場にする。・・・準備を頼むぞ。」

「はい。」

（しかし、日本帝国外務省か、おそらくA L 4 関係に関わるのは必至かも知れんな。主人公に関わりもてないんだがなあ。絶対ややこしくなるだろうし。いや、もうなっているか。どうしたもののかなあ。

次にイギリス王室か。わざわざ出てくる意図がわからんな。どちらにしても注意しておかないとな。できれば、パイプを作って後ろ盾になってほしいんだが。日本の場合、直接的な関わりは持てないし主にA L 4 は出来ないな。どちらにしても、これからの行動次第だな。）

オーストラリアの寒い冬は続いていた。

待て、次回……。

25部・予算と納入時期は、きちんと決めないといけない。（後書き）

本編でした。

やっと、企業名が決まりました。

遅すぎだろ。

申し訳ない。色々悩んだ結果ですね。

この名前は、エジプト読みになっており、皆様なら、トトかトートが有名かと思います。

それでも、ゲーム等をなさったことがある方は直ぐにお分かりなられた方もいるとは思いますが。

選ばれた理由が、ゲームではないのですが、神話は結構好きで、本当は、もう一つ候補でプタハという鍛冶や職人の守護神も良かったのですが。

時の管理者であり夜の地上を守護する、つまり歴史の裏側で守護する存在とかけて選ばれました。

センスがいけないかもしれませんが（汗）

最後に王室ですが、なんと言つか他に思い付きが無かったというか、しっくりこないというか。

おもつきり後悔してますね。いろんな意味で（汗）

物語では後の話でも重要になります。

感想や批評がありましたらお願いします。

26部・人間、必死になると無茶な要求をするものだ。(前書き)

今回は、会談ですね。

では、本編を・・・。

26部・人間、必死になると無茶な要求をするものだ。

26部・人間、必死になると無茶な要求をするものだ。

ジェフウティー社 本社ビル 社長室

「社長。おみえになりました。」

「じゃ、行くから応接室に通して。」

「は。」

応接室

応接室に入ると二人の背広の男性が席を立った。

「日本帝国外務次官 藤蔵泰明です。お時間とっていただきありがとうございます。こちらは、部下の村本洋司です。」

「村本洋司です。よろしく。」

「ジェフウティー社、社長 秋津賢次です。こちらこそ、よろしくお願いします。」

二人に握手を交わした。

「では、おかけください。」

二人にソファーに座らせると、賢次もその向かいに座った。

「では、ご用件を伺いましょう。」

藤倉泰明

「じつは、我が帝国に技術支援をお願いしたいのです。」

「・・・理由は？」

「はい、実は我が帝国内では、ある計画のホストになっているのですが、それを有利に進ませるため。貴社に技術支援をお願いしたいのです。」

「・・・その、計画とは？」

「それは、申し訳ありませんが機密のため内容まではいえないのですが。AL計画と呼ばれています。」

「・・・AL計画ね。（はい、やばいフラグが来ましたよ。）」

「はい、我が帝国では、その支援のためMS等の技術をお願いしたいのです。」

「・・・技術支援をしたとしましょう。それは、我が方にどのようなメリットがあるのですか？」

「そうですね。帝国はそちらの兵器を買い形というのはどうでしょう。」

「・・・それでは、こちらにメリットが無いのではないですか？それに内容さえもわからない計画に技術支援したところで、どのような物の支援をすればいいか分かりかねますが？（AL4自体の概要は知っているが、下手にやればこちらに、実害がこうむる可能性が出るな。）そこらへんはどうお考えですか？」

「それは。我々には計画自体を話す権限が無いため。それは、上に掛け合わないといけませんので今の段階では。」

「・・・（こいつら大丈夫か？） まあ、それはいいでしょう。だが、仮にこちらの兵器を大量に買ってくださったとしましょう。しかし、それでは貴方の国の企業が、黙ってはいないと思いますか？」

「それは。こちらで根回しという形になりますね。」

「根回しですか（どちらにしても、摩擦が出るのは必至だな。カードを切ってみるか。）で、結局は私に直接交渉しにきたのもアメリカ派が原因ですかな？」

二人が青ざめた。

「（ビンゴか。）・・・なるほど、お顔でわかりましたよ。内部の状況が悪いから私に接触して何とか有利に進めたいということですか？」

つばを飲み込み、言葉をつむいだ。

「・・・そうです。お察しの通り、大まかに我々AL派と保守派とアメリカ派とで派閥同士で問題となっているのです。そのため、貴方の企業の兵器を大量に注文したかったのですが、アメリカ派やわが国の企業に阻まれ、今回少数でしか注文できなかったのです。」

「そうですか。（まあ、元々予想していたことだけど。歴史上ではかなり問題になるからなあ。後のクーデターにもいろいろ関係していくはずだけど。）つまり、我々にパイプを持ちたい、そういうことですか？」

「そうなります、なんとかありますでしょうか？」

「・・・まあ、いいでしょう。ただし、私としてもアメリカに睨まれたくないので、大きな支援は行えませんが。」

「構いません。そちらが支援してもらえるだけでもありがたい。」

「わかりました。もう一つですが、A Lに関してですが、あなた方を通してから支援ということをお願いしますか？」

「・・・なぜ、そんな回りくどいことを？」

「大まかには、アメリカの存在ですね。他はA L計画というわけわからない計画に直接関わりたくないというのが、本音ですね。理由はそれだけです。（接触したくないというか出来ないというか。）」

「・・・わかりました。では、我が帝国を通して間接的にA L計画を支援という形ですね。では、そのように伝えておきます。」

「ええ、お願いします。後は、それだけですか？」

「ええ、私どもは元々、貴方にパイプを持つことでしたから。それだけでも大きな収穫です。」

「そうですか。それは良かった。」

本社玄関

「では、秋津社長。またの機会に。」

「ええ、そちらも。」

握手を交わして、帰っていった。

三日後、本社玄関

賢次もうちの重役連中も緊張しながら待っていると車列がやってきた。

車列には一台の高級車と大量の護衛の車という異様な状況であったが。

高級車が玄関前に止まり、運転手が後部の扉を開けると中から、一人の金髪セミロングの少女が出てきた。

「ようこそ、いらつしやいました。エリザベス王女殿下。ジェフウティー社、社長、秋津賢次です。王女殿下にお会いできて光栄です。」

「ええ、こちらこそ。Mr・秋津。では、お願いできるかしら。」

「はい。」

本社ビル 会議場

「では、王女殿下、ご用件を伺いましょう。」

「そうですね。単刀直入にいいいます。貴方を貰いたいのです！」

「……………はあ？（え、え、何を、俺〜！？）」

「

「・・・間違えました。貴方の持っている兵器を優先的に貰いたいのです。」

「・・・兵器ですか。（なんだったんだ？） 流石に優先的には、今のところ不可能ですが。」

「・・・そうですか。 なんとか、直ぐに兵や祖国のために高性能兵器を供与してほしかったのですが。」

「うーん、そうですねー。 わかりました、新しい兵器を開発したら、他国より優先的に供給できるようにしますよ。」

「ありがとうございます、Mr・秋津。 祖国を代表して感謝の意を表します。」

「大げさだと思いますが。 まあ、いいでしょう。 では、私も後々、何か行うと思いますので手助けしてほしいのですが。」

「場合に、よりますが。 ですが、貴方が私の要求に応えてくれましたから、私ども出来るだけの範囲で手助けしましょう。」

「感謝します、王女殿下。 他には？」

「そうですねー。 では、あなた方が開発した兵器を見せて欲しいのですが。」

「わかりました。 では、格納庫へ。」

格納庫

「では、こちらです。」

格納庫の扉を開けるとメーサータンクやゼク・アインが左右に別れておかれていた。

「これは、すごい！　これが報告にあった、92式メーサービームタンクで、こちらが戦術機に変わる兵器のMSゼク・アインなのですね！」

「そうです。では、まず、メーサータンクを出しますので。少し離れてください。」

「わかりました。」

ガガガガガ

メーサータンクが格納庫から出てくる。

「では、メーサービームを発射しますので、少し離れてください。」
見物人を下からせる。

「発射しろ。」

パアーン

メーサーから放たれた青白い光が、空に伸びていった。

「どうですか、王女殿下？」

「すごいですね！？　レーザー級の光線を出せる戦車なんて初めてです！」

「喜んで何よりです。では、MSを出しますよ。」

「ちょっと待って下さい！」

「何でしょう？」

「私にMSの操縦をさせてほしいのです！」

「・・・構いませんが。失礼ですが戦術機の操縦経験は有るのでしょうか？」

「安心してください！ 訓練校では主席で卒業しましたから。」

「それは、また。では、念のため複座式のタイプにしますよ。後部座席に私が乗りますので。」

「ええ、お願いします。」

ゼク・アイン コックピット

「では、起動方法に関して説明します。」

説明し終わると、画面が起動し、外の情景が映し出した。その時、モノアイにピンクの光が灯った。

「出来ましたー！」

「では、次は基本となる、歩くですね。操縦桿を調整しながら、歩いてみてください。」

ドシーン ドシーン ドシーン

「問題ないですね。では、他の工程を行いますよ。」
訓練どおり。走る、ブースター制御や方向転換など工程を、難なくクリアしていった。

「センスがいいですね。殿下。（明らかに、前の人より上達がおかしいぞ！ まさか、あの系統か？）」

「ありがとうございます。 Mr・秋津。 MSというのは戦術機より扱いやすいですね!」

「操縦された方はほとんどそう言いますね。 私はMSしか操縦したことはないんですが、それだけ扱いやすいということでしょう。」

「戦術機の簡易型と考えればいいのですよ! 本当に扱いやすいものなのです!」

「なるほど。 では、ビーム兵器の使い方を教えますね。」

「ええ、おねがいします!」

基本的なビーム兵器の使い方、サーベルを取り出しての説明を行い、実践していったが直ぐに使いこなせて行った。

「お見事です。(ここまでセンスが良いと、・・・だんだん凹むぞ、俺。)」

「ありがとうございます。」

「では、そろそろ。 説明を終わりましたので、機体から降りますよ。」

「ええ。」

MSを格納庫まで戻し、降りた。こうして、MSの説明は終わった。

本社ビル 玄関

「何から何までありがとうございます。Mr・秋津。」

「いえ、王女殿下に来ていただき光栄です。」

「ありがとうございます。ですが、同い年なんですから、今度会うときは格式ぶった挨拶は抜きして、プライベートの時はエリザと呼んでくださいね。」

「え、あ、はい。わかりました。王女殿下。」

「エリザ！」

「・・・わかりました。エリザ。」

「ふふ、ではまた会いましょう。賢次。」

「ええ、エリザもまた会いましょう。」

「はい、また。」

そう言つて車に乗り込んだ。

その後、車が走り出し、賢次は車列が見えなくなるまで見送った。

サイド 外務次官

「何とかなつたな。」

「ええ、これでアメリカ派の牽制にはなると、思います。」

「そうなるな。しかし、いずれにせよ。現状は悪くなる一方だが

な。」

「・・・そうですね。我々の行動が帝国にとって有益であればいいのですが。」

「そうだな。」

サイド エリザベス

「同年なのに、あそこまで上がったのは凄いわ！」

「ですが、あの男が何か隠しているのは確かでしょう。」

「確かにそうだけど。私は、あの人を信じてもいいと思うわよ！」

「ですが、王女殿下。得体の知れない男ですよ。」

「大丈夫よ。すこし、一緒にいて思ったもの、あの方は信用できるとね。勘だけどね。」

「勘ですか？」

「そう、勘よ。でも、私の勘は外れたこと無いもの。彼とは、ブライベートの付き合いがしたいものね。」

「それなら、いいのですが。一応、気をつけてください。」

「ふふ、ありがとう。」

サイド 賢次

「しかし、なんだったんだ、ありゃー。・・・まあいいか一応、パイプを持てたし。後は、日本でのA L 4をどうなるかだな。しかし、新型機何にしよう。考えておくか。」

忙しくなることはあっても、暇になることはなることはなさそうだ・・・。

待て、次回・・・。

26部・人間、必死になると無茶な要求をするものだ。（後書き）

本編でした。

接触した帝国の人間はA L派の人間にしました。

理由としては、親米派、完全な保守派、A L 4 計画派、色々な派閥があるはずですから今回はそういう感じで出しました。

エリザの場合は色々な方面で助けられる存在になります。

一応、この二つの勢力の接触は物語に大きく関係していくのですが、それは後ほどで。

感想や批評がありましたらお願いします。

27部・要望を聞いて解決するには時間がかかる。（前書き）

訂正がありました。

ブレゼンの話にガンダニウムと記載しましたが、実際はガンダリウムです。申し訳ない。

賢次の勢力はガンダニウムとチタニウムなのですが。

此方の間違いでした。

今回は、国内に関してですね。

では、本編を・・・。

27部・要望を聞いて解決するには時間がかかる。

27部・要望を聞いて解決するには時間がかかる。

オーストラリア軍 軍令部 朝

「ようこそ、いらっしやいました。 Mr・秋津。」

「ええ、こちらこそ。」

握手を交わす。

「では、こちらへ。」

「ええ。」

士官室

賢次は、軍からの要望書を片手に、軍高官の会談をしていた。

「要望書は、以上ですか？」

「はい、そうなります。」

「わかりました。 出来るだけ早急に行いましょう。」

「ありがとうございます、Mr・秋津。 それとですが、貴方が所有している、港ですが、我々に一時的にお貸しできますでしょうか？」

「・・・理由をお聞きしてもよろしいですが？」

「申し訳ありません。不躰かもしれませんが、軍の機密で、まだ、お話できないんですよ。」

「・・・できれば、理由をお聞き出来れば、我々もお力をお貸しできるのですが。（軍の機密？国連の作戦に関係しているのか？）」

「・・・聞いた後は、誰も喋らず、忘れたことにしてほしいのです。」

「・・・誓いましょう。」

「実は、BETA戦線に関してなのです。」

「・・・BETA戦線ですか。（どこか、戦線が崩れ始めたか。光州か？いや、まだだ。どこだ？）」

「はい、アラビア半島での戦線は、ご存知で？」

「はい、確か10年以上、BETAの侵攻を食い止めていましたね。」

「ええ、実は、その戦線が崩れそうなんですよ。」

「・・・それは、また。（あそこか。介入しても、MSもMDも足りないから戦線を押し戻すのは困難だぞ。）それで、いつまで持ちますか？」

「・・・おそらく、大きく見積もっても、来年の初頭まで、でしょう。」

「・・・直ぐではないですか！」

「ええ、ですから支援のため、我々が派兵されることが、現在、閣議で論争になっています。」

「・・・それは、また。ですが、わが社の兵器は、まだ、そこらには十分に届いていませんし、そちらにも兵器に慣れるための訓練期間必要だと思えますし、幾らなんでも時間がなさ過ぎますよ！」

「ええ、ですが、我々が派兵されるのは、ほぼ決定事項ですから派兵は、おそらく今年の終わりかと。」

「・・・無茶苦茶でしょう。いくら、MSやメーサータンクが戦術機や戦車に比べて高性能とはいえ数を揃えないと、食われますよ！」

「ええ、ですから最低でも揃えられるMSやメーサーの注文と戦術機に揃えられるビーム兵器が必要なのです。」

「・・・わかりました。できるだけ何とかしてみましよう。港に関して、期間を有してかつ、わが社の商売に支障がきたさない程度にお願いしますよ。」

「わかっています。いずれ、政府から通達があると思いますので、よろしく願います。」

「わかりました。要望書と港の件は、出来るだけそちらの要望通りの形にしておきます。」

「ありがとうございます。では、Mr・秋津、これから私は演習の方の見学を行うのだが、どうですか？」

「へえ、演習ですか。時間もありますから、せっかくだから見学しましょう。」

「ありがとうございます。では、迎えの車が来ますので着いてきてください。」

オーストラリア軍 軍演習場 昼。

バババン ビューン バババン パアーン ドーン ドカーン

賢次だ。現在、オーストラリア軍と共に砂漠地帯と荒地の混ざった演習場の観覧席にいるのだが、なんというか。

新旧やら世界の違うようなことになっている、まず、戦術機はオーストラリア軍のほとんどがF-18ホーネットで構成されている。スパーも無いことないみたいだけど、数は無いみたい。

次にMSに関してだけど、数が少ないため、F-18とゼク・アインがツーマンかスリーマンセルで組んで、作戦行動している感じである。

まず、戦術機は前衛に立って注意を引き付けるか、もしくは、角飾り（隊長機）のゼク・アインの援護を行っていたりする。今回、戦術機用にEパックタイプのガンダムMk-?タイプのビームライフルやビームサーベル（Eパック用に少し改造して少しMS用より大型化したサーベル、タイプは長刀タイプから普通タイプ。）等が、実弾装備に混じって装備されていた。

次に、MSに関してだが、とにかく種類が多い、基本となる第一種

兵装、少し後方に第二種兵装、その中間に第三種兵装と感じでは有るが、部分的に戦術機に搭載されていた誘導弾を付けていたり、突撃銃や長刀を背負った機体もいた。要するに色々付けられ重い物も運用でき、かつ高出力のビームを撃てるという万能型であるためであろう。

次に、援護となる戦車とロケットだが、主に戦車は人型兵器の少し後方に配置され、まず、通常戦車、後ろにメーサータンク、その後ろに野砲やロケットという形となっている。

最後に、ホバートラックに関してだが、戦術機とMSの真後ろに配置である。

ついでにいうと全体の比率はこうである。

前衛

MS 1 : 戦術機 4

中衛

MS 1 : 戦術機 2 : ホバートラック 2

後衛

通常戦車 8 : メーサータンク 1 : ロケットや野砲など 1

1 : ホバートラック 3 : その他 13

という比率である。

なんというか、玩具箱をひっくり返したというか、夢のコラボというか。いろんな意味で感動したといえる。これで、うちのMDらが加われれば全部かな？

それでも、演習だから言えることだが、実戦は兵士も死ぬ可能性が多いから、出てほしくないのが本音であるが・・・。

「どうですか、Mr・秋津。」

パーン

「これは、凄いですね。今回の演習は、実弾訓練と全体訓練です

か。」

「そうなります。本当は、MSと戦術機の共同訓練のみだったのですが、Mr・秋津がくるということで、急遽予定を変更して全体演習という形になったのですよ。」

「・・・それは、皆様にご迷惑をお掛けした様な気がしますが。」
ビューン

「お気になさらないで下さい。近いうちに、計画では明日の朝に行うつもりでしたし、こちらとしても、いい訓練になります。」

「それなら、いいのですが。（ドーン）しかし、凄いですね。」

「そうですね。ですが、これでも大量のBETAに相手をするのは少なすぎますから。もっと国から予算をまわしてほしいのですが。やはり、兵器も人員も足りませんね。」

「・・・そうですか。（ただでさえ、世界人口が少なくなっているし、下手に兵力だけにすると、生産が出来なくなる。どうしてもないな。とはいっても、うちは関係ないけど。）流石に、わが社でもどうしようもありませんね。」
パーン

「気にしないで下さい。どうしても、バランスを保つのは大変ですから軍としても何とかしますよ。」

「わかりました。」

これにて、2時間に及ぶ演習は終了した。

オーストラリア軍 軍令部

「では、Mr・秋津。今日は、ありがとうございました。」

「いえ、わざわざここまでして下さったのです。（・・・大量対大量か。どちらにしても損害が少なく絶対に勝たないとな。）こちらがお礼をいいたいくらいですよ。」

「それは、良かった。」

「では、指令も頑張ってください。」

「ええ、Mr・秋津も。」

握手を交わし賢次は、車に乗り込んだ。

「首相官邸に向かってくれ。」

「は。」

首相官邸 執務室 夕方

賢次は、官邸に到着すると、そのまま案内人についていくと、執務室に通された。

コンコン

「入れ。」

「失礼します。」

案内人は、賢次を招きいれると、そのまま部屋を出て行った。

「お久しぶりですね。首相。」

「ああ、そうだな。君を呼んだのは頼みごとがあつてな。」

「派兵の話ですか？」

「・・・もう、耳に入つたのかね。」

「すこし、情報が速いだけですよ。」

「詳しく言つ必要は無いな。アラビア半島の件はわかつているだろう？」

「はい。」

「私としては、派兵に関しては、少し早すぎると考えられるのだよ。」

「私も同感ですが。なぜ、このような状況に？」

「国連の要請もそうなのだが、まだ、あれは強制ではないからいいのだが。実は、多数の抗戦派やその他の派閥で、派兵を行おうとする動きがあるのだよ。」

「はあ、うちも一枚岩というわけ、ではないのですね。」

「そうなる、まあ、私では、止められない。そのため、派兵準備のため、色々手伝つて欲しいのだよ。もちろん、資金も出す。」

「・・・わかりました。何とかしてみましよう。ですが、国連の要請など珍しいですね。」

「たぶん、アメリカだろうな。自分でMSを試す前に、我々を戦わせて結果を見たいのだよ。まあ、他国もそうだろうが。」

「はあ。そうですね。ですが、軍の訓練や兵力が揃えられていない、現在で、今年の終わりの派兵は、無茶ではないのですか？」

「それは、軍でも政府の見解もそうなのだが。戦線状況は悪いことと外交は何かしないといけない。どうしようもないのだよ。」

「・・・わかりました。では、確認したいのですが？ まず、派兵時期に関して、次に派遣する部隊に関して、最後にうちの支援に関してですね。」

「そうだな、まず派兵時期に関しては、決まっていらないが、今年の終わりを予定にしている。次に派遣される部隊に関してだが、予定では戦術機を1個中隊、MSを1個小隊、その他支援部隊、という形になっている。最後に君にやってもらいたいのは、港の使用とMSと戦術機装備の生産、整備用のパーツ等の生産を行ってほしいのだよ。」

「・・・なるほど。わかりました。では、出来るだけなんとかしておきましょう。」

「頼む。いずれ、通達があるから、お願いする。」

「はい。」

本社社長室

（しかし、アラビア半島の侵攻は、今の戦力では止められないだろうな。戦線崩壊は来年だろうから何とかできれば。できれば、少ない被害で国連のスエズにおける戦線を構築する時間が出来ればあるいは。・・・いずれにせよ、部隊の後退の手助けをしないと。今年の終わりにアリスに相談しておくか・・・。）

季節が過ぎ、暑い夏が始まろうとしていた。

待て、次回・・・。

27部・要望を聞いて解決するには時間がかかる。（後書き）

本編でした。

国からの要請というのは、金になりますが企業によっては基本的に逆らえないと思います。

なお、アラビアにおける戦線崩壊は、来年の初頭にしました。実際はもっと遅いのかも知れませんが。

作者自身、時間軸がすこしわからなかったため、早めに発生することになりました。

感想や批評がありましたらお願いします。

28部・準備は、期間が必要である。（前書き）

今回は、行動方針ですね。

追記：私用が忙しくなりそうなので、更新が微妙な不定期になりそうです。

申し訳ない。

では、本編を・・・。

28部・準備は、期間が必要である。

28部・準備は、期間が必要である。

1996年12月中旬

ジェフウティー社 管理港湾施設

戦争中でも、多くの民間輸送船や軍の輸送船が接岸され、港に大型コンテナが積まれており、それを運ぶ民間業者や軍人、コンテナを積んだ車で忙しそうに行きかっていた。

賢次は、状況確認のため、管理事務所に足を運んでいた。

「現在の作業状況は？」

輸送管理担当者

「はい、現在、軍では派兵時期に間に合わせるため、急ピッチで積み込み作業を行っているところです。次に、わが社の各国に送る兵器の状況ですが、第一次便が、三日前に送り出したところです。現在は、予定通りに輸送は進んでいます。」

「ふーん、輸送状況は、予定通りか・・・。およそ、軍のコンテナの全ての積み込み作業にいつまで掛かる？」

「そうですね。現在は、大型輸送艦にMSなどの積み込みもあるようですから。一週間以内には完了すると思います。」

「わかった。引き続き、積み込みを急いでくれ。」

「は。」

ジエフウティー社 本社開発部会議室

「で、開発状況は？」

開発部担当者

「はい、MSに関してですが。ゼク・アインにホバートラックの設備を簡易的に搭載させることで、より高い機動性を持ったMSの索敵機が開発できそうです。なお、これには高度な技能も必要になると考えられるので、複座式タイプになりそうです。」

次に、戦術機用の兵装に関してですが、ビームライフルとは、別にマシンガンタイプとショットガンタイプ並びにビームガンタイプを生産できるよう急いでいます。一応、元となるMS用のタイプがありますから、急げば来年の初めには、実用化、生産が可能となります。」

次に、社長がガンダリウムとは、別に提供された装甲材、チタン合金セラミック複合材は我々でも何とか生成が可能になりました。」

社長の指示でいつでも生産が可能です。ただ、装甲材ガンダリウムに関しては、まだなのですが。」

次に、戦車の機動性に関しては、戦術機に搭載されている、ブースターユニットを使用することで、急旋回または、急加速を可能にしようと考えています。ただ、戦術機のブースターユニットではコストと出力が高すぎるため、簡易化と出力調整の方向で行うつもりです。それに伴い、乗員の安全を考えての装備と調整を行わないといけません。」

「ふーん、ゼク・アインの索敵型か。索敵能力は、簡易搭載した分、ホバートラックに比べれば若干落ちるが、必要な設備を揃えられている点では、問題ないな。」

「はい、求められる条件は揃えられていると思いますが。」

「よし、オーケーだ。完成に伴い生産を通達しておく。（当分間の繋ぎになるな。改良すればあるいは。それは、後々だな・・・）」

「ありがとうございます。」

「戦術機のビーム兵器の充実化は、急務だからなあ。出来るだけ急いでくれ。」

「は。」

「次に、装甲材に関してだが、戦術機に搭載できそうか？」

「・・・すこし、難しいと思います。主に戦術機に使われている装甲材とでは、性質が違いますから、何らかの問題が生じるのは確実だと思います。」

「・・・そうか。どこまで、使用可能だ？」

「そうですね。全体に施すのは基本無理だと思いますから、コックピットなど重要な部分に施すぐらいになると思います。」

「そうか。完全とはいかないか。」

「ですが、MSを含め、戦術機に搭載できれば、生産性や性能の向上は図れると思います。」

「うーん、わかった。当面は、各国に提供するMSは、従来の装

甲材にしておき、軍に提供するMSに関しては、それでいい。戦術機に関しては軍に連絡して改修出来るようにしておく。ライセンスに関しては、もう少し間を空けてかなりガチガチにしておかないとな。大量生産されては困るし。」

「わかりました。では、そのように。」

「次に、戦車用に関してだが、問題は出力調整とコストか。それは、役員会議でだな。とりあえず開発はしておいてくれ。」

開発担当者

「わかりました。」

「では、以上の報告で開発に励んでくれ。解散！」

「……は！……」

本社生産部会議室

「生産状況は？」

「はい。派兵の件によりMS生産と整備用のパーツ並びに装備の生産を重点的に生産しているため、生産に関しては、月産MS7機、メーサータンク3車、ホバートラック15車という形の生産状況になっています。」

「そうか。他は構わないがMSに関しては、出来れば15機生産を目指してくれ。」

「は。」

「ああ、それと、チタン合金セラミック複合材を使ってMSの生産を行ってくれないか？　うちに送る兵器だけだが。」

「ですが、それでは生産に弊害出るのでは？」

「それは、問題ない。所有しているMSの量があるから、これらの工場生産をその装甲材に使用してくればいい。」

「わかりました。では、そのように。」

「ああ、頼むよ。」

「は！」

社長室

「と、以上がわが社の行動方針になる。」

「わかりました。では、そのように。」
重役が部屋から出て行った。

「さて、状況確認は出来た。いったんもどるか。」

副社長宛に電話を掛ける、

「副社長、少し出てくるよ。」

「・・・また、ですか？　え〜と、いつまで？」

「当分になりそうだ。来年の初頭までには帰ってくるから、後、よろしく〜。」

「ちょ！　しゃち（ガシャン）」

「さて、もどるか。」

上着を取り部屋を出て行く。

三日後　南極基地　会議室

「とまあ、そんなことになった。」

「そうですか、アラビア半島が。それで、どうするんですか？」

「そうだな、今回の行動方針は、国連軍のスエズ撤退を支援だ。」

「わかりました。ですが、支援となるとかなり困難になりますし、隠密行動で行うとなると、作戦に弊害が出ると思いますが？」

「そうだな、MD部隊の状況は。」

「そうですね。一通り部隊が揃っていますが。」

「そうだな、今回は、かなり部隊を連れて行くと思う。」

「わかりました。検討してみましよう。」

「ああ、それとアリス。お前が使用していたMD　3機を今回、連れて行くぞ。」

「本当ですか！？　嘘ではないのですね！」

「ああ、あれもやばい兵器だから指示はするが。いずれにせよ、あれだけのBETAに相手にするには、どうしても数が少ないからな。時間稼ぎと一網打尽にするためにも、な。」

「わかりました。視野に入れておきます。うふふ、あれが使用できる。うふふふふ。」

「落ち着いてくださいよ。（こわ、怖すぎるぞ・・・。） 注意をこちらに逸らす作戦でもあるんだ。頼むよ。」

「はい。」

「では、作戦開始は、来年の初頭になる。頼むよ。」

「はい。」

（大丈夫かな？ まあいいか、それにしてもあれを連れて行くにしても、こちらもかなりの損害出るのは必至だろうな。出来れば、俺の行動が、良き未来に進めばいいのだが。）

1年も終わりとなろうとしていた。

待て、次回・・・。

28部・準備は、期間が必要である。（後書き）

本編でした。

行動方針というより、現状報告のような気がする。

次回は、アラビアにおける支援作戦の開始です。

MDのことは、忘れた方もいらっしゃるでしょうが。

次回、出てきます。

どこまで使われるかは、別としてですが。

感想や批評がありましたらお願いします。

29部・裏で動くのは困難、極まる。 前編・・・（前書き）

今回は、作戦の前哨戦です。

本当は、前編や後半をいれずに書きたかったのですが。

では、本編を・・・。

29部・裏で動くのは困難、極まる。 前編・・・

29部・裏で動くのは困難、極まる。 前編・・・

1997年 初頭

賢次は、アラビア半島における撤退を支援するため現在、大型強襲潜水母艦5隻と護衛のためのミサイル潜水艦6隻を伴ってスエズ方面に向かっていた。

インド洋 紅海入り口10km地点 強襲潜水艦 CIC

「では、経過を説明してくれ。」
ディスプレイから、マップデータが出てくる。

「では、説明します。 過去、国連軍はスエズを中心に扇状に半径300kmの範囲に防衛線を構築していました。 ですが、その防衛線も完全ではなく、この間の防衛線崩壊のため、現在、スエズ方面まで後退中のことです。 また、多く部隊が各地で孤立、交戦中とのことです。」

「やはり、こうなったか・・・。 ……スエズの防衛はどうなっている？」

「はい、傍受した情報によるとスエズに部隊の集結中とのことですが、急ピッチで防衛陣地の構築を急いでいますが、まだ完全ではありません。 今、BETAが侵入されると大きな被害は、必至だと思えますね。」

「なるほどな。 接近中のBETAの数は？」

「はい、スエズに向けて侵攻中のBETAの数はおよそ3万、また、後続に待機しているBETAは4万という形になりますね。」

「……これなんて、無理ゲー。後続は待機しているんだな？」

「はい、約4万はスエズ東300km地点の都市マーンを中心に待機中ですね。」

「なるほどね、3万の予備として置かれているんだらうと、考えられるが。おそらく、3万が全滅が少なくなれば、そのまま侵攻という形になるな。……消耗した軍には厄介なことこの上ないな。」

「BETAの意図が、どうかわかりませんが。前衛も厄介ですが、後続の存在は、一番厄介だと思いますね。」

「うーん、今回は国連軍の支援が目的だったが、今回は国連軍が前衛部隊と交戦中に我々が後続の部隊を叩く。ただし、長期戦になることは覚悟してくれ。」

「了解です！」

「では、アリス。今回、投入される部隊数は？」

「はい、隠密を主体としますから大部隊を連れていけないのが、厄介ですね。まず、賢次の機ですが、まだ、調整が完全ではないため、今回もSガンダムになります。」

次に、私の機ですが、やっと調整が済んだエピオンを使います。

MDに関してですが、ビルゴを3機編成の10部隊、ヴァイエイトとメリクリウスの2機編成の2部隊、トーラス15機、サーペント10機、EWACリーオー3機、Gビット（サテライトキャノン）3機、補給などのサポートを行うリーオーは20機ですね。」

「少なくとも、ないが長期戦になれば大きな被害は必至だな。最悪、サテライトキャノンの使用を許可しないといけないかもな。」

「わかりました。そのようにしますね。うふふふふ。」

「・・・張り切りすぎて落ちるなよ。それで、上陸地点は、どうする?」

「そうですね。スエズ近海は、防衛艦隊がいますから、その地点の上陸は無理ですね。ここは南東のアカパ湾に入り、夜にまぎれながらに出撃、目標のBETAを確認後、殲滅を行います。」

「わかった。準備を頼む。」

「はい、賢次!」

アカパ湾 上陸開始地点 夜中

賢次は、Sガンダムに乗り込み、出撃を今かと待っていた。

「賢次、着きましたよ。」

「わかった、アリス。周りにBETA等は?」

「・・・数十kmの範囲には、見当たりませんね。浮上させます。」

「わかった。」

夜も明けていない海に潜水母艦4隻が浮上し、前面格納庫が開きながら、カタパルトが展開されていく。

「では、賢次、MD達の出撃後、私が先に行きます。賢次はその後をお願いします。」

「了解！」

ゴー

最初に黒いボディのMDビルゴがカタパルトに固定され、射出されていく。

シューーン シューーン シューーン

外の僚艦も、MDを射出していく。

アリスの機の番となっていた。

「では、賢次！ 先に行きます！」

黒と紫のボディ、左手のヒートロッド、ガンダム特有の二本のアンテナ、OZ-13MSガンダムエピオンがカタパルトに固定されつつあった。

「了解！」

「システムオールグリーン。エピオン、出ます！」

シューーン

エピオンがカタパルトから射出された。

「さて、次は俺か。」

Sガンダムがカタパルトに固定される。

「システムオールグリーン！・・・出来ればこちらに被害がなければいいが。秋津賢次、Sガンダム出るぞ！」

シューーン

艦から全機発進した。

アラビア半島 アカパ北10km地点 朝

ズシーン ズシーン

夜が明け、太陽の照る暑さ、陽炎が立ち、砂漠と荒野を足して二で割ったような風景が、延々と続いていた。 目標の部隊のいる地点、マーンに目指していた。

その中を、MDとガンダムが歩いていた。

「しかし、本当に砂漠は砂のみかと思えば、部分的に荒野もある、意外だ。」

「そうですね。 大体の人はサハラ砂漠のような砂のみの世界を思い浮かべると思いますが。 荒野に近いですね。」

「しかし、今回のことを含めても気分は、盗まれた過去を探し続けて俺は」

「・・・なぜに、ボズ？」

「・・・いや、なんというか。 最初の戦場は、地下で次はジャングルで、次は砂漠だし。 止めに地獄みたいな大群と相手にしないといけないから、そんな気分。」

「・・・まあ、いいたいことはわかりますが。 そんなにむせますか？」

「気分だ、気分。」

「気分ですか。（ピピ）賢次、どうやらお客さんのようです！」

「数は？」

「多いですね。総数は1500。約1000ほどが小型種のようですが、500ほどが大型種のクラスのように。速度的に十数分後には、此方に接敵します！」

「わかった。ビルゴを前面、トーラスはビルゴの援護、中衛にサパーントを廻せ。後方にEWACリーオー、最後にヴァイエイトとメリクリウスは俺とアリスの援護だ。後のためにサポートのリーオーとGビットは、後方に下がらせろ！」

「了解！」

十数分後、BETAが接近してきた。

「賢次、来ました！」

「では、作戦開始！いくぞ！」

「了解。」

バアン バシン バアン バシン
三機ずつのビルゴの編隊が、プラネイトディフェンサーを展開し重レーザー級のレーザーを防いでいく。
それぞれのビルゴが応射を開始する。

バアン バアン バアン

多くの前衛にいたBETAに風穴が開いていく。
そして、撃ち洩らしたBETAをトーラスが狙撃を行い破壊していく。

ババババン ババババン ドーン ドーン
サーペントは、その持ち前の火力で、小型種等をガトリングとマイクロミサイルを使用して粉碎していく。

「落ちなさい！」

ブン ガシャーン

エピオンは、BETA群に接近し、ビームソードを横に振り斬り、突撃級等を真つ二つにしていく。

「横が、がら空きなんだよ！ 落ちろー！」

ビューン

要塞級に横腹に青いビームが貫いた。要塞級がゆっくりと崩れ落ち、下にいたBETAを押し潰していく。

「燃え尽きなさい！」

バシユン

赤く染まったヒートロッドが、舐めるように要撃級を包み込み焼いていく。

「ターゲッティング完了！ 発^{ヒート}な！？ レーザー警報！？ く、

避けられない！？」

バアーン

重レーザー級の放ったレーザーがSガンダムを貫こうとしていた。

バシン

「え！？」

メリクリウスのプラネエイトディフェンサーが、賢次の機の目の前で浮遊しレーザーを防いだ。

ブブブ バアン

ヴァイエイトの放ったビームキャノンが、重レーザー級を蒸発させ

た。

「ふふふ、感謝するぜ！ まったく、生きた心地がなかったな！
二機とも行くぞ！」

二機は、ブースターを吹かし賢次の機に着いていく。

30分ほど続いた戦闘もBETAの全滅で終結した。

「アリス、被害状況は？」

「はい、現状における被害は軽微、戦闘には支障はありません。
ですが、今後の補給なども考えても、同じような戦闘は何回も出来
ませんね。」

「・・・目標部隊は？」

「依然、動いていません。経路にもBETAの部隊はいませんか
ら、このままいけば数時間後には接敵しますね。」

「・・・BETAは、なにか目的があるのか？ いずれにせよ、進
軍するぞ。」

「了解です！」

作戦も始まったばかり。 いずれにせよ、これからが地獄を見そう
な気がする。

待て、後半・・・。

29部・裏で動くのは困難、極まる。 前編・・・（後書き）

本編でした。

MDが無双状態のような気がする。

隠密とはいえ国連軍に支援というより、単独で行動しているような問題ないかな。

一応、投入されているビルゴは、？タイプです。 ヴァイエイトやメリクリウスを含めて改良型が出すか考え中です。

次回は、BETA、4万と戦闘になります。 話的に苦勞する感じにしそうです。

どうしよう。 主人公が苦勞する話になりそうだな。 考えてみよ。

感想や批評がありましたら、お願いします。

30部・裏で動くのは困難、極まる。・・・後編（前書き）

後編です。

今回は苦戦？になっているのかな？

追記・プラネエイトディフェンサーに関してですが、確か原作ではレーザーは防げませんでしたから、このまま、レーザー対処強化済になっています。まだ、高出力ビームは防げませんが。

では、本編を・・・。

30部・裏で動くのは困難、極まる。・・・後編

30部・裏で動くのは困難、極まる。・・・後編

アラビア半島 都市マーン南西40km地点 昼

太陽も真上に来て直射日光が機体を焼き、陽炎が暑さを際立たせていた。

ズシーン ズシーン

「ふいふしかし、激戦よりも環境による体力低下がきついな。」

「そうですね。砂漠ですし、外気温50を越えてますから、影響が無い方がおかしいのですが、まあ何とかなるでしょう。」

「うん、そうだいいが。目標までは？」

「もう、まもなくですね。」

「そうか。しかし、MSがあるからなんとなるが、外に放り出されれば、俺でも生きてられるかどうかだな。あち。」

「私は機械ですから、暑さや寒さがわかりませんが、生物にとっては困難を極めますね。」

「まあな。おっと、着いたみたいだな。」

「そうみたいです。偵察にEWACリーオーを出して、情報を集めさせます。」

「わかった。頼む。」

ドーム上の頭部のE W A Cリーオーが偵察に出た。

数十分後・・・

「どうだ。」

「・・・それが。まずいことが判明しました！」

「どうした!？」

「つい、先ほど、B E T Aがスエズに向けて、侵攻を開始しました！ このままの侵攻速度では、約36時間以内には、国連軍の交戦地域に到着すると考えられます！」

「ち、このままでは消耗した国連軍が、全滅するぞ！ サテライトキャノンはどうだ?!」

「それが、衛星のサテライト照準レーザーが照射できる位置まで、後1時間は待つてください！」

「くうくう状況は、最悪だな!？・・・仕方が無い、予定より早い为目标に交戦を開始する！ また、当初の予定通りサテライトキャノンの使用を許可する！ その援護のためにも、サポートのリーオーも使うぞ！ 総力戦だ！」

「了解！」

「賢次！ 第一陣が接近してきました！」

「陣形は、前回どおり！ サポートのリーオーとGビットはEWA
Cリーオー側につけ！ 応戦して、サテライトキャノンの発射時間
を稼げ！」

「了解！」

激戦が始まった。熱砂の中、砂漠の色が見えないほどの数のBET
Aが、賢次軍の方を目掛けて津波のように突進を開始する。

賢次の機やアリス機とMD達は、持てる火力を持って、BET Aの
津波に対処しようとしていた。

「インコム！」

頭部のユニットが開放され有線が動き回り上に回る。

ビュン ビュン

要撃級の上部にビームの雨を浴びせる。

Sガンダムが、ビームスマートガンを構えてBET Aの集団に向け
て照準を合わせる。

「落ちろー！」

ビューン

Sガンダムのビームスマートガンの光が放たれ多くのBET Aを巻
き込んでいく。

「ここで、要塞級ですか！？」

要塞級の触手が、アリスを捕らえようとしていたが、寸前で避けて
いた。

「当たりませんよ！」

ブースター高速で接近を行う。

「この程度で！」

ブン ガチャーン

エピオンがビームソードを振り、要塞級を縦に真つ二つにした。

バアン バアン バアン バアーン バシン

前衛のビルゴもプラネイトディフェンサーを展開してレーザーに対処しつつ、ビームキャノンを発射し複数のBETAに対処していた。

ババババン バババババン ドドドン

サーペントやリーオー達の弾幕の雨をBETAの集団に浴びせ、蜂の巣にしてい

ビューン ビューン

トーラスが、ブースターを吹かし高速で動き回りながら、BETAにビームを浴びせ、沈黙させていく。

「アリス！ 発射時間は！？」

「後、15分です！」

「まだまだか！ いくぞ！」

要撃級がSガンダムに向けて急速接近してきた

「ち、要撃級！？ だが！」

要撃級の腕がSガンダムに振るわれるたが、スラスターを吹かして空振りにした。

「あまい！ 消える！」

ブン ガチャーン ブン ガチャーン

Sガンダムがビームサーベルを取り出して要撃級の両腕を飛ばした。

「・・・終わりだ！」

ビューン

Sガンダムはスマートガンで腕を飛ばされた要撃級の目の前に突きつけ、胴体を蒸発させた。

「ふう〜接近戦は得意じゃないんだが、何とかなったな。さて、次だ！」

バアーン バアーン バアーン

「レーザー程度で、私が落ちるとお思いですか！」

エピオンが、急加速で接近を行い、重レーザー級の懷に飛び込む。

そのまま、ビームソードを横に振る。

ブン ガシャーン

横に振るわれた緑の刃が、周りの重レーザー級を、真つ二つにしていく。

「（ピーピー） レーザー警報が鬱陶しいわね！？ メリクリウス！」

バシン

メリクリウスが浮遊したプラネイトディフェンサーと共にエピオンの前にでて、レーザーを防いだ。

「ヴァイエイトは、重レーザー級の狙撃を行いなさい！」

ヴァイエイトは、ビームキャノンを構えてレーザー級の集団に向けた。

ブブブ バアーン ドーン

着弾したビームが爆発を起こしBETAを吹き飛ばした。

「賢次！ まずいです！」

「どうした！？」

「サーペントとリーオーの弾が切れました！　このままでは、突破
されます！」

「サーペントは兵装をビームカノンに変更！　リーオーは、ビーム
ライフルが使用できるなら使用させる！」

「致し方ありませんね！　やってみます！」

「頼むぞ！」

「賢次！　発射可能時刻10秒前です！　10・9・8・7・6、
5・4・3・2・1　衛星が座標に入りました！」

「よし！　Gビットに発射体制を行わせろ！　目標は、敵主力中央
部！」

「了解！」

Gビットが横一列に並び背中 of 砲塔を展開していく。
ピー

砲塔が展開されていくと、空から緑の光の線が機体を包み、背中の
リフレクタープレートに光が灯った。

「70、80、90、100、賢次！」

「サテライトキャノン！　発射ー！」

パン　バーーーーーー

三機に放たれた巨大な光が、BETA群の中央へと伸びていき、そ
して。

カッ

ドカーーーーーー

太陽と間違えるような閃光と衝撃波が、BETA群を消し飛ばした。

「・・・敵中央部に着弾。被害状況を確認中・・・。」

「認しました。敵集団の約8割の消滅を確認、BETA群、ハイクに向けて撤退していきます。」

「ふうゝ何とか勝てたか。此方の被害状況は？」

「全機無事ではあるのですが。戦闘行動できる機体は、私たちを含め三分の一以下ですね。その他は、弾切れまたは、戦闘行動に支障をきたす損傷が見られます。」

「・・・大戦果といえるか、微妙だな。戦闘続行すれば、こちらがひとたまりもないし。・・・まあ、いいか。作戦終了、母艦に戻るぞ。」

「・・・了解。」

着弾した場所には、直径数kmの3つのクレーターが出来ていた。

強襲潜水艦 CIC

「此方はなんとか、終わったけど。スエズの状況は？」

「はい、スエズに接近していた3万のBETAですが、我々が後続を殲滅した後、撤退を開始したようです。」

「・・・そうか、被害状況は？」

「少ないとはいえませんが。戦線の構築する時間は稼げたようですね。その後、撤退するBETAに追撃を加えたので半数以上の撃破に成功したようです。」

「・・・我々の介入も無駄ではなかったということか。しかし、あれだけ派手な事したんだ。うすうす、気づいた連中もいるだろうな。」

「そうですね。いずれにせよ、我々の兵器の存在は、現段階では秘匿にしておく必要がありますね。」

「・・・まあな。・・・いずれにせよ秘密を知られたくないな、ただでさえ所有している兵器が超兵器過ぎるんだよねあ。まあ、どちらにしても、どの勢力につく気はないし、特に国連軍は特にな。別勢力でいる以上、最悪世界相手の戦争も考えないといけないし。それに目的があるし。」

「この際、仕方ありませんね。目的に関しては、アメリカの思惑を叩き潰すためでもありますから。できるだけ我々の存在を隠し通しましょう。」

「・・・そうだな。歴史に介入した以上、何らかの影響が出るのは必至だろう。後は、表の企業と裏の我々で何とかするしかないな。」

「ええ。」

「ああ、それとアリス、南極に戻って新型の開発を行うつもりだ。ということ、進路を南極で頼む。」

「了解です。賢次。」

歴史介入したが、大きな変化が起きたと思えないが、運命を変える
以上は変えなければならぬだろうな。しかし、我々の存在が、
果たして世界の光が闇に変わるかわからんな。現段階では・・・。

待て、次回・・・。

30部・裏で動くのは困難、極まる。・・・後編（後書き）

本編でした。

・・・苦戦？してたか？

なんか、今回、書いたサテライトキャノンの強さが無茶苦茶な気がします。

ですが、DXクラスは、小島程度吹き飛ばすくらいでしたから、こんなものなのかな？、と思います。

今後に関してですが、数話ほど利用して世界情勢や各勢力の状況などを書こうと思います。

物語的に来年までは、戦闘があるのかな？なと思っています。

当分は開発しつつ世界と国内を飛び回りそうですが。

目的に関しては、対したほどではないのですが、主人公の支援のためといった方がよろしいでしょうか。 とうなるかわかりませんが、
・・・。

感想や批評がありましたらお願いします。

31部・本人の知らないところでは、色々動いている。その一（前書き）

今回は、国連軍状況ですね。

では、本編を・・・。

31部・本人の知らないところでは、色々動いている。 その一

31部・本人の知らないところでは、色々動いている。 その一

国連総本部 中央会議室

広い会議室の中央に円卓の机が並び、それぞれの軍関係者が座っていた。

議長

「では、軍会議を始めたいと思います。 まずは、こちらをご覧ください。」

ディスプレイから、ある戦闘風景が映し出される。

「何だね、唯のBETAの戦闘映像ではないのかね？」

「もう少し、みていけばわかります。」

その映像は、機体カメラから夜での密林におけるBETAの戦闘映像だった。

「くそ、何でBETAがこんな所に!? HQに連絡!」

「HQに繋がりました! 一時間後に到着予定です!」

「無理だ! その前に部隊が全滅するぞ! くそ、任務中になんてことだ!」

「隊長、このままでは、押し切られます！ 撤退命令を！」

「撤退命令だと！ この挟まれた状態で撤退など不可能だぞ！ 応戦しろ！」

「りよ、了解！」

映像からは、夜とはいえ突撃砲のマブルフラッシュや着弾による爆発により、さながら昼間のような状況であった。

「バレク5、押し切られます！？ 後退命令を！」

「バレク7もお願いします！ このままでは！」

「無理だ！ 後ろも前も挟まれている！ なんとか応戦するんだ！」

「無茶言わないで下さい！（バレク5、避ける！）！？」
「バレク5のF-18に11時の方向から要撃級に接近されて、その硬い腕を振るわれてF-18の腹部を貫かれた。」

「バレク5！？」

「バレク6、戦車級に取り付かれた！ 機体が動けない！ たすけ！」

「バレク6！ おい、バルク6応答しろ！ つ、くそ！」

「バレク4、弾切れになります！ ストックは無いのですか！？」

「 ない！ 何とか対処するんだ！」

「 りよ、了解！」

「 バレク7、脱出装置が動かない！？ 助けてくれー！」

「 バレク7、今助けに！？ うわー！？ ”

「 くそ、バレク1からバレク2へ！ 状況を！」

「 こちら、バレク2！ 部隊の半数以上がやられました！ このままでは！」

「 くそ、最悪だ！」

「 隊長、このままでは持ちません！？ ”

「 援軍が到着まで、何とか、持ちこたえるんだ！」

「 無茶言わないで下さい！ その前に全滅ですよ！？ ”
バババン バババババババン

「 くそ！ このままでは！」

「 隊長避けてください！」

「 なにー！？ ”

突撃級が目の前に迫っていつていた。
ビューン

青い光が突撃級を焼いた。

「な！　なんだ！？　え、戦術機、か？」

月明かりと星明りの中、ブースターで上空を静止しながら、二機の異様な姿の戦術機がそこにいた。突撃級の焼いた一機は巨大なライフルを持ち青と白を基調としたボディ、頭に二本のアンテナ、華奢に見えるが、重装備にも見える骨格、Sガンダムが上空でスマートガン을構えていた。

もう一機は、一基のライフルを持ち黒と紫の華奢なボディ、尖った頭部、MDトールスがSガンダムの隣で静止していた。

上空に静止していた、二機はブースターによる急加速を行い、BETA群に接近し、Sガンダムは加速中にスマートガンを構え固まっているBETA群に青い光を浴びせ一網打尽にする。

トールスは、その持ち前の運動性能から、一機一機ずつBETAを駆逐していく。

「た、隊長、私たちは夢を見ているのでしょうか？　BETAが飴のように。」

「わ、私もそんな気分だ。　と、とにかく、未確認機と共にBETAを駆逐する、ぞ。」

「りよ、了解。」

その後も、Sガンダムは頭部のインコムを射出し上空からビームの雨を浴びせ、集まったところをスマートガンのビームを浴びせ後続を含めて殲滅していく。

トールスはBETAをヒットアウェイの要領で地味ではあるが的確に殲滅していく。

10分後BETAの部隊が全滅した。

「隊長、ここにいるBETAの殲滅に成功したようです。」

「あ、ああ、とりあえず、あの未確認戦術機に通信を行うぞ。」

「了解。」

「こちら、大東亜連合バレク隊、機々の支援に感謝する。貴君の所属と階級を確認したい。通信回線を開いてくれ。」

二機からの応答は無く、そのまま夜空に去っていった。

「以上が大東亜連合から齎された、映像記録です。」

国連軍高官A

「どこで撮られた、記録だ？」

「ビルマ（ミャンマー）領 シットウエ近郊の密林地帯ということです。」

「ふーん、それはわかった。その未確認戦術機は、ビーム兵器を搭載しており、今までの戦術機とは一線を画した機動性を有している、まるで今話題のMSのようにな。」

「・・・確かに、そうですが、ジェフウティー社の幹部にも確認を取りましたが、知らないということですし。MSという証拠もありませんから、この場では、どうこう言えませんが。」

軍高官B

「まあ、案外新型機の実戦テスト、ではないのかね？ アメリカがソ連軍のな。」

アメリカ&ソ連軍高官

「知るか！ あつたら、とっとと投入してるわー！」
二人が同時に言った。

日本&EU&統一中華戦線 軍高官

「……。（こちらもあるれば、そうするが……。）」

「……まあ、いずれにせよ。この、未確認機が存在は、注意しておく必要があるといえます。」

ソ連軍高官

「それは、異議なしだ。いずれにせよ。どこの鈴を付けているか分からんからな。」

アメリカ軍高官

「ふふふ、それはお互い様だろう。鈴には、気よつけたまえよ。」

「それは、それは、忠告感謝しますよ。」

「ふふふふ」

二人は、異様な笑いを浮かべていた。

日本&EU&統一中華戦線&大東亜連合 軍高官

「……。（早く、何とかしろー！）」

軍高官らが議長にアイコンタクトを交わした。議長は頷くと。言葉

を紡いだ。

「えー、では、纏めたいと思います。確認された未確認機に関しては戦闘を行わず、要観察と形で行いたいと思います。なお、向こうに我々に敵対行為があった場合には、即時破壊または捕獲が下りる形となります。よって、各方面にそのことを伝達しておいてください。異議のある方は挙手をお願いします。」

EU 軍高官が挙手をした。

「どうぞ。」

「仮に、向こうがこちらにコンタクトがあった場合はどうするのかね？」

「そうですね。状況次第でしょうが、味方なら国連に引き込み、敵なら殲滅という形にあると思いますね。捕獲できれば、機体の技術も得られるでしょうし。」

「なるほどな、分かった。」

「他には？・・・無いようなので、今回の案でいいと思います。では、次の議題に移ります。」

国連武官

「では、こちらをご覧下さい。」

アラビア半島の衛星映像であった。

国連軍高官C

「ん？ 唯の衛星の映像ではないのかな？」

「これは、アラビア半島におけるスエズ撤退作戦ごろに撮られた衛星からの映像です。」

「確か、その援護のために各国軍が、スエズに向けて派兵だったかね？」

「そうなります、この映像はスエズの西の都市マーンで、撮られた映像です。」

衛星の画像からマーンでの多数のBETAの影が映し出されていた。
「さて、スエズ方面にも大多数のBETAと交戦していたが、後続には、それよりも多かったのかな？」

「そうなります。では、次の画像を見てください。」

「「「な！」「」」

全員が驚きに変わっていた。

画像には、同じ場所に直径数kmの3つのクレーターがあった。

「ど、どういふことかね？ どこかの勢力が核でも使用したのかな？」

「いえ、偵察機を廻したところ、放射線等や重力場の影響が確認されませんでしたし、他国が核を使用したという声明はありませんでした。」

「・・・。つまり、核でもG弾の類でもないということかね？」

「・・・そうなります。」

「で、なにか分かったのか？」

「分かりません。隕石ではなく。ただ、核に似た高熱量の兵器を使用したのではないかと、思われます。」

「核の似た兵器か。留意しておく必要ありそうだ。」

「はい、我々の考えでは先の未確認機を含め、何らかの関係があるのではないかと考えています。」

「・・・憶測になりそうだな。」

「はい、そうなります。ですが、ここまでやってのける以上、他国からの支援があると考えられます。」

「・・・そうなるな。調査が必要だな。まさか、またアメリカとソ連かね？」

「またとは何だ！ それ以前に、ここまでまわりくどい事するか！」

また、同時に言った。

日本&EU&統一中華戦線&大東亜連合 軍高官

「「「「・・・。（結局、俺らには振ら無いんだ・・・。）」「」「」」

議長

「とにかく、何者かはともかく、驚異的な兵器がある以上、留意しておく必要があります。各国にはそれにおける情報提供をお願い

します。では、以上を持ちまして会議を終わります。」

サイド ソ連

（ふふふ、謎の勢力に影響のない核に近い兵器か、我々に引き込めればアメリカを出し抜けるぞ。待っておれよ。なんとしても、探し出して見せるぞ）

サイド アメリカ

（このままでは、計画が台無しになるぞ。ソ連の兵器か？ いや、それなら自国内でのハイブ破壊に投入されるはず、いずれにせよ忌々しい。・・・我々の邪魔をするなら消すまでだ。）

サイド EU

（・・・謎の勢力か。しかし、なぜ、国連に入らない？ いや、それ以前にどこかに属しているのか？ いずれにせよ向こうは、BETAに敵対している以上は味方と判断すべきだろうが、情報が少ないな。できれば、接触できれば・・・。）

サイド 日本

（まさか、外務省の人間が接触した秋津氏ではないのか？ いやまさかな、そこまでの組織なら、とっくに出てくるだろうし、彼も日本人だから、こちらにつくはずだ。ということなら、関係ないのか？、まさかな。）

サイド 大東亜連合

（いずれにせよ、関係しているのは、おそらくあの男だろう。いずれにせよ技術を齎したのもあの男だからな 仮に謎の組織のメンバーとしても、末端の可能性が高いな。どうかして、情報を集

めないと。
）

サイド オーストラリア

（Mr・秋津の仕業か？ いや、それなら、我々に接触なんかしないはず。ならば、あの兵器の生産量は、何だ？ 他に本拠があるのか？ それなら、目的は何だ？ 彼が介入したら、誰か得でもするのか？ 分かん。）

サイド 統一中華戦線

（蚊帳の外？）

賢次の影が、見え隠れしつつも、この世界にとってのイレギュラーの存在が、国連にとってどこまで影響するか、分からない。現段階では・・・。

待て、次回・・・。

31部・本人の知らないところでは、色々動いている。 その一（後書き）

本編でした・・・。

今回は、アラビア半島の作戦の細かい成否を入れてませんでした。一応、賢次が帰国してからどういった状況になったか入れるつもりです。

しかし、今回書いた、感じではバレバレになっている感じがすし、国連も馬鹿ではないと思うのですが。バランスが難しいですね。

次は、南極での話になるのかな？、他にも入れそうな気がしますすが？そろそろ、本編のキャラ入れようかな。また、オリジナルでも入れるべきか？どうしよう。

感想や批評がありましたらお願いします。

32部・本人の知らないところでは、色々動いている。その二（前書き）

仕事納めで、更新が・・・。

そんなことはどうでもいいのですが。

一応、その二です。

では、本編を・・・。

32部・本人の知らないところでは、色々動いている。 その二

32部・本人の知らないところでは、色々動いている。 その二

サイド 米国大統領

ワシントンDC ホワイトハウス 大統領執務室

比較的広い部屋に絨毯が敷き詰められ、その古びた執務用の机に初老の男性が座り、その目の前を大量の勲章を付けた軍高官が報告を続けていた。

「と以上が、計画の報告です。」

「・・・わかった。 以上を、まとめて国連に提出しろ。」

「はい、大統領閣下。 では、失礼します。」

軍高官が執務室を出て行くと、その入れ替わりに背広に少し、肥えた男性が入ってきた。

「大統領。」

「副大統領、君の意見は聞かんよ。」

「ですが、いくら祖国、人類のためとはいえ計画を行うのはどうかと・・・。」

「・・・君の言いたいことはわかっている。 だがね、4番目が確実ではない以上、この方法しかないのだよ。」

「ですが、かつてのG弾の影響については、実験で報告されている

でしょうに。」

「・・・わかってる。　だがな、現状で決定打がない以上は、致し仕方がないだろう。」

「・・・それは、帰るべき故郷を吹き飛ばしても、ですか？」

「・・・そうだ。　・・・君とてわかっているだろう、同じ軍時代にどれだけの犠牲を払ったか。　現在の世界の人口とて、わかっているのだろう！」

「・・・それは。」

「・・・副大統領、君の気持ちは分からないでもない。　だが、BETAはユーラシア大陸ほぼ手中に収めた以上、後がないのだよ。　君は、一時の感情のために祖国と家族を犠牲にするのかね！？」

「し、しかし。」

バンと部屋が揺れるのではないか、というほどの音が響き渡った。
「しかもない！　BETAが目の前に迫っているのだ！　家族と国民を守るためなら、悪魔にでも魂を売るつもりだよ！　邪魔する物が、BETAでも他国でも、たとえ親友の君でもだ！」

「・・・そこまでのお覚悟でしたか。　なら、私自身、何も言いません。　せめて、覚悟を決めてください。　・・・私から言えることは、それしかありません。」

「・・・すまない。」

「いえ、長い付き合いです。・・・貴方の言いたいことは、良くわかります。」

「・・・ありがとうございます。ああ、それとNASAからの惑星移住計画は、聞いているだろう?」

「はい、それは聞いています。」

「で、その惑星に移住することが、計画が上がったことで、予備計画と合わせる形にしようとなったのだよ。」

「・・・それは、ですが。いえ、何も。」

「安心したまえ、軍関係者が主となるが、私や君の家族にも席を残しておくよ。」

「・・・ありがとうございます。大統領。」

「ああ、すまないが。・・・少し一人にしてくれ。」

「・・・わかりました、では失礼します。」

副大統領が執務室を出て行くと、窓の夜の明かりを見ながら物思いに耽っていた。

（G弾の実戦投入許可、地球脱出計画、私の行き着く先は地獄だろうな・・・）

祖国のためにG弾を使用して他国の地を踏みしめる、祖国のため国民のためといいながら、家族を脱出させる。

・・・所詮、私は偽善者だな、罪の十字架を背負うのは私だけでいいだろう。計画においては彼をはずすべきか、彼にまで背負わ

せる気はないのだから、私、一人で十分だろう・・・。）
外では、町がきれいにライトアップされていた。

サイド ハイシリヒ・ルーデイル

「では、まもなく我が社にも、生産が可能なのだな？」

「はい、サンプルの120mmマシンガンを応用して、戦術機に大口径の実弾兵器が携行可能になりました。」

「そうか。 ビーム兵器はどうなっている？」

「はい、なんとか形にはなりましたが、ですがわが社の技術陣ではジェフウティー社のビームライフルに近づけるには・・・まだまだということになります。」

「・・・そうか、報告書では、そこまでの出力に近づけるには大型化、か。」

「はい、おそらく、どこの企業も似たようなものだと考えられますが。」

「・・・憶測で物事を判断するのはいけないことだが、まあ、どこも似たようなものだろうな。 他はどうなっている？」

「はい、EUの軍の報告会によると対ビームコーティングとマグネツトコーティングに関しては予想以上の性能ということですね。

ただ、対ビームコーティングはいいのですが。・・・マグネツトコーティングを施された戦術機を乗りこなす衛士は、少ないですね。振り回されるといいますか。」

「・・・それは、軍に頑張ってもらえないだろう。・・・わかった、なんとか社長に報告しておく。」

「はい。」

サイド 香月夕呼

「まったく、なによ。これ。」

夕呼は、格納庫の送られてきたMS、ゼク・アインを報告書と企業に齎されたカタログスペックを見ながら呆れていた。

「・・・どこの世界に、下手な戦車砲を物ともしない装甲、標準装備のビーム兵器、大量の積載量を持つ戦術機があるのよ。・・・いえ、MSだったかしら、明らかにおかしいわよ。」

「内部構造も、ミノフスキー核融合炉？、ムーバブルフレーム？、全天周囲モニター？、フィールドモーター駆動？、使われているOS自体も戦術機と違うし、機体の素材自体、私たちが使用しているものと明らかに違う・・・ということよ。」

「・・・はあ、研究対象としてはいいけど、これを理解するのに何年かかるかしら。ふざけているわよ！」

額に指を当てながら唸っていた。

「・・・たかが新興企業がここまでの物を作るにはおかしいわね、MSの製作過程が分からない上に、元はどうしたのよ。それに、ここまでの技術はいつたいどこから来たのよ。」

「・・・いずれにせよ、今までの戦術機と比べても性能が逸脱しているのは、明らかね。・・・目的のためにも、他の技術は手に入

らないかしらね。」

「・・・報告では、支援は米国の目があるから関わりたくない・・・ね。・・・果たして本音はどうなのかしらね？」

「ふふふ、どちらにしても私の面前で聞かせてもらうわよ！ 秋津賢次！」

サイド 賢次

「う・・・なんだ？」

「どうしました？ 賢次？」

「いや、なんか寒気が？」

「疲れでもありましたか？」

「いや、そうではない、と思うのだが。・・・なんだろう、まあいいか」

「そうですか。もうまもなく着きますよ。」

「わかった。」

なんか、本人の知らないところで目を付けられた。元々、接触できないのだが、どうなることやら。

待て、次回・・・。

32部・本人の知らないところでは、色々動いている。 その二（後書き）

本編でした。

今回は、AL5計画賛成派の過激？派の心情を書いてみました。

一応、この時代のG弾の使用許可は核兵器使用許可と同じで大統領とおもいますから書きました。

国の上層部も裏を返せば人間ですから、こんな感じかなと思います。まあ、自己解釈ですが……。少ししたら、国連にAL5計画の話が出てきます。それは、後ほどで。

次に、他国の企業に齎した技術に関しては、少しずつ芽が出ている感じです。企業の技術の差は大体、半年から一年の差という感じですよ。

一番、早いのはアメリカ企業でしょうか？大体そんな感じです。

次に、原作キャラに関しては、初めて出てきた感じです。

こちらも久しぶりの感じですので、本人に近いかどうか曖昧なのですが……。

感想と批評がありましたらお願いします。

33部・新しく作るにしても、作らないにしても計画通りにしないとけない。

今回は、計画の概要ですね。

では、本編を・・・。

33部・新しく作るにしても、作らないにしても計画通りにしないといけない。

33部・新しく作るにしても、作らないにしても計画通りにしないといけない。

南極基地 会議室

「アリスさん、生産状況は？」

「はい、生産は順調に進んでいます。ただ・・・。」

「ただ？」

「現在、世界にまわしている兵器ですが、生産数が第1規定数に到達したのですが、何分、豪州と此方の在庫が、まだまだ多いため第一目標の第二段階に移行するかどうかですね。」

「うーん、第二段階に移行するかどうか。まあ、出て間もないからかな。・・・だが、いずれにせよ世界で実戦投入された以上、需要は一気に増える可能性が高いと思うが・・・よし、第二段階は、在庫の半分になり次第に始動してくれ。」

「わかりました。次に我が軍の第二目標のMD兵器生産ですが・・・今年の初めに第二段階に移行しました。このまま順調に行けば、来年にはこちらの総数が1000機を超えますね。」

「・・・いつの間に、・・・ああ、そういうことか、ただでさえ世界の需要が少ないせいで、全体の生産をMDの生産にシフトしたせいか・・・。」

「そうなります。それでも、MS等の大量生産を図ると思いますから、少々修正をすると思いますが。」

「それは、状況次第だろうな。メカゴジラは、どうだ？」

「はい、現状の改修状況は、7割完了しました。機体の調整とリンク等を考えても、今年の6～8月に完了しますね。」

「なるほどね。完成後はメカゴジラの実戦結果が良好であれば、モゲラも同じような改修を行うことにするか。」

「わかりました。モゲラは元のメカゴジラを上回っていますし、大きな改修を必要がないと思いますから、メカゴジラより短期間ですむと思います。」

「うーん、まあ、これで計画の第一段階の南極の下地と企業の設立と兵器の実戦投入は成功したな。では次の段階に以降するか。アリスさん、第二段階の説明を。」

「了解です。まず、第二段階ですが、本拠地の南極を中心に海底に基地を設営します。対象は、太平洋に十数箇所、座標はマリアナ諸島、日本近海、ベーリング海、ハワイ諸島方面、太平洋中央の海域、南米方面になります。択捉や日本海でもいいのですが、BETAに接触する可能性と各国の目を避けるため設営しません。次にインド洋に数箇所、座標はオーストラリア西、マダガスカル方面、インド方面、インド洋中央部となります。」

次に大西洋に関してですが、グリーンランド、イギリス近海、ノルウェー方面、大西洋上部、大西洋中部、大西洋下部、フォークランド諸島、カナダ近郊、パナマ方面となります。アメリカ東海岸方

面や地中海は地理的や軍事的に設営が難しいため比較的に安全性が高い場所の設営を行います。

最後に北極海に関してですが、動きづらいう上にBETAの接触の可能性が出るため設営はどうするかですね。

これが基地の設営の計画ですね。ですが、少し時間がかかりますね。」

「・・・いつぐらいで完成予定になる？」

「全ての基地の設営に最低でも来年の後半かかるかと、各国の目も潜り抜けながら、ですからもう少しかかるかと。」

「・・・そうか・・・重要な場所をピックアップしてそこを重点的に設営だ。後、各国の邪魔を考えても、潜水MD必要だろうな。」

「では、MDは、何にしましょうか？」

「そうだな、作業用と併用としてザクマリナー、防衛用と攻撃用としてカプール、ズゴックE、ハイゴック、MAグラブロで行う。とはいっても基本BETAは、狙わず各国軍に相手なりそうだが。」

「・・・趣味ですか？」

「うん、趣味だ。」

「・・・まあ、何もいませんよ。ですが、ここまでいくと敵がBETAというより、この世界の人類のような。」

「・・・まあ、そうだけど。全てが信用できないわけではないが・・・いくらゲームの世界とはいえ、この世界の思惑は、かなり性質

が悪いんだよな。そうはいつでも、俺のいた世界も似たようなもんだけど。とにかく、俺がやっていることは偽善かもしれないが、足を引っ張り合っている奴らよりかは、ましではあると思うんだけどね。」

「・・・確かに。では、基本を隠密と監視、最悪危険と判断されれば殲滅を行います。殲滅すれば、調査隊で基地の存在もばれる可能性が出ますから、最終的に基地の放棄と破壊を視野に入れておきます。」

「・・・ああ、頼む。・・・まあ、本当はしたくないのだから。」

「・・・そうですね。では、次にいきます。」

大型建造ドックの完成により、我が軍が運用する大型艦船の建造計画を行いたいと思います。基本的にMDとMSの運搬と支援用になると思います。ですが、そのまま、運用すると本拠地の存在もばれる可能性があるので光学迷彩処理を施すか、時間と整備コストと大幅な改修が必要ですが転移装置の搭載するかによりますが。」

「うーん、基本的にUC世界の艦船自体は装甲が硬い上に、比較的使い易いの揃っているが。今現在使用している兵器を考えても、色々あるが、時代的な候補でいくと、アルビオン、アーガマ、センチネルのペガサス？、ネエルアーガマ、サダラーン、エンドラ、宇宙戦ならレウルーラ、グワダン、ドゴスギア、その他で火星圏までの出兵ならラーカイラムやジュピトリスと9かな、なんかここまでいくと木星圏まで行きそうな気がするけど。でも、他のガンダム世界の艦船は、ある意味極端なんだよな。後は、制限の多い転移装置よりかここは、光学迷彩の方が妥当か。」

「そうですね、では、ここはあえて、アドラスティア級はどうでしょ

う、ビームシールドや水中での運用も可能ですし。」

「・・・タイヤ戦艦の運用適正はいいけど、タイヤで日本等を走らせるは、生活圏の蹂躞にしか見えないな。考えただけでも、ある意味G弾より性質が悪い気がする。いくら飛べるとはいえ。」

「うん、ザムス・ガルは、バグで使用できませんし、ラーカイラム級やリンホースJrやマザーバンガードでもいいのしょうが、大量生産に向きませんね。」

「まあ、やりすぎてもいいが・・・ここは運用している兵器を考えて、旗艦をサダライン、巡洋艦をエンドラ、少数生産としてアーガマ級とネエルアーガマになりそうだな。・・・流石にハイパーメガ粒子砲は強力すぎるな。これは、使用場所が限られるな。」

「そうですね、わかりました。建造計画は、その形にしましょう。完成時期は半年後を目処に完成を目指します。」

「うん、それで頼む。」

「では、計画の続きですが、我が軍の新兵器に関してです。先のアラビアの戦闘結果から、新しく候補上がりました。」

「候補は？」

「今までの兵器の生産は変わりませんが、ビルゴと地上運用に改修した汎用性の高いビルゴ？と同時生産、ヴァイエイトとメリクリウスは、改良型のシュイヴァンタイプの生産を行います。」

「オーケーだ。それで、頼む。」

「はい、以上が我が軍の計画目標になります。」

「わかった。そちらはそれで任せる。」

「わかりました。では、賢次、企業の方はどうしますか？」

「そうだな。現在の輸送面では流石に、船の運搬だけじゃ時間がもったいないな。ガルダ級を使おうと思う。」

「ガルダ級ですか。確かにあれなら、かなりのMSが積みますし、空港か海があれば着陸できますね。」

「ああ、うちには大型の港もあるから、そこから世界を飛びまわれるし、運用方法は問題ないだろう。」

「一応、民間企業だから武装は施せないが積載量、速度、汎用性は問題ない上に、理論上は小型ロケットのプラットフォームにもなるからいいと思う。まあ、流石に運用は、うちの企業と豪軍だけにするがね。」

「そうですね。他は？」

「他は、そうだな。企業独自の実働部隊の設立を目指そうと思う。」

「実働部隊ですか。流石にかなり問題が出ると、思いますが大丈夫でしょうか？」

「それは、どうにかするしかないだろうな。PMCとして出すこと、新型機の運用テストのためもある。後は、可能であれば、横

浜基地の入り込み、あの計画の監視目的でもあるがな。」

「・・・A L計画ですか？」

「本来の目的はそうだな。後は、豪軍にくっついてユーコン基地の方にもな。」

「つまり、表向きは新型運用とP M Cの仕事、裏は状況確認のためですか。」

「そうなる。まあ、俺自身が直接出来ればいいのだが、イレギュラーが介入すれば、どうなるかわからない上に、出来るだけ接触しないに越した事はないからな。まあ、本音は組織に属していると色々動きづらくなるからかな。」

「確かに、ですが時間的に大丈夫でしょうか？」

「わからんな、大丈夫だと思うが、予定では設立を半年以内とし、元軍人を雇って使えるならテストパイロットや教官を行う、無理なら正規軍に頼むしかないが、ある程度形になったら志願兵の公募を行い。軍教育を行いつつ実働部隊を増員という形にし、実戦経験を行わせ、国連軍要請で動けるまでにするが。まあ、表向きは豪軍所属になるが・・・何とか、監視のために無理してでも入り込ませなければならぬしな。」

「そこは難しいですね。アメリカやホスト国の立場もありますから、なんとか、企業と豪軍の実験部隊という形にすれば可能性が？ですね。」

「まあ、出来るだけパイプを利用するしかないな。可能性がどこ

まで上がるかわからないが。」

「そこは、行動次第ですね。次はどうします。」

「新型機は、そうだな。世界にまわすのは93式ツインメーサータンク改、後々のうちの実働部隊の機として少数生産するガンダムMk-?とゼータプラスA型とFAZZの生産してくれ。」

「では、93式ツインメーサー改は92式と同じ量を生産します。実働部隊用にMk-?を2機とゼータプラスは12機、FAZZは6機でいいでしょうか?」

「ああ、それで頼む。ツインは、92式の素材を流用できるようにするとして。ああ、それと今回提示したMSは装甲材を変更しておいてくれ。」

「了解です。では、いつまでに?」

「ツインは出来るだけ早めに、実働部隊用は、状況次第だろうが7〜8月までには、こちらに送ってくれ。」

「わかりました、ではそのように。」

「ああ、それで頼む。」

「他は?」

「たぶん、大丈夫だと思うが。後は、向こうに行ってからだな。そろそろ戻るか。」

「では、お氣をつけて。」

「ああ、行ってくる。」

計画の第二段階は発動したが、思惑通りに事が進むことは限らない。世界が生き物とは、よく言ったものだが、いずれにせよなんらかの変更はあるといえる。

待て、次回・・・。

33部・新しく作るにしても、作らないにしても計画通りにしないといけない。

本編でした。

今回、全然話に情景描写がないな。

計画の概要と予定話だからいいのかな？

今回は、現在の話のひと区切りとして計画の一部の話が出ました。

まだ、計画には何段階があるのですが。それは、後々で。

海洋基地設営はに関してジオン系の水泳部の皆さんは、一部分は国連軍とガチでやり合うことになるかもしれません。そうなった場合には、色々ややこしくなるのですが。書くのか？どうしましょ？

それと、今回、話に出た新型機は、少々増えますが話に登場するのは、まだまだ先になります。

艦船に関しては、色々悩みましたが、主に登場する機体の時代方面とジオン系好きといくと、なぜか旗艦がサダラーンになってしまいました。

大気圏突入前のハマーン様の演説がいん……。いえ、なんでもありません。

まあ、流石にあまりに強すぎる艦船も問題が……。戦場の主役は、戦術機と戦車そしてMSですから、あくまで援護という形になると思いますね。

宇宙でなら、リーブラ等も出せるでしょうが、その場合は月の攻略と火星圏制圧作戦にシフトします。

とはいっても、この物語に、宇宙戦は出しませんが。出せないこともないですが、確かBETAはどうやって宇宙戦したかという描写はなかったと思いますし。わからないですよ。

火星でなら、ギリギリいけるでしょうけど。

それを出したら、作者が死にそうだ話数とアイディア的に・・・。

最後にガルダ級はそのまま劇中の名前にしながら戦場での運用せず
に運搬用に使われます。 武装も施されていませんし、全部で3

〜4機の予定で運用されると思います、基本重要性も高いですし。
でも、だんだんネタに走りすぎているような気がしますね。

後悔はしていませんが。

感想と批評がありましたら、お願いします。

34部・事業を広げるには、手が足りない。（前書き）

今回の話は、要望と結果でしょうか。

では、本編を・・・。

34部・事業を広げるには、手が足りない。

34部・事業を広げるには、手が足りない。

1997年 オーストラリア 1月中旬 ジェフウティー社 社長室
賢次は、オフィス内に積まれていたタワーになった書類に格闘しながら雑務に励んでいた。

「じぬ。なんでこんなに書類が。」

「それは、社長が去年の暮れから、いらっしやらなかったせいじゃないですか。おかげで、新年は会社で迎えましたよ。」

「・・・すみませんでした。私が、至りませんでした。」

「冗談です。社員全員、新年の会社はしてません。」

「・・・ああ、そうですか。とは、いつでもほとんど日付は去年の分だな。・・・いなかったせいね。」

「大体、社長のサインの必要な物が多いのですから、溜まるのは当たり前ですが。」

「へいへい、えーと兵器生産の報告書、管理関係の許可願い、販売の報告書・・・誰かに頼みたいな、面倒な・・・。」

「社長の指示がないと、話が進まないのですから。」

「へいへい。」

「ふー、なんとか終わったな。」

「社長。首相から、お電話です。」

「繋いでくれ。」

「はい。」

受話器を取り、応答した。

「はい、秋津です。」

「私だが」

「これは、首相ご用件は何でしょう。」

「首相官邸に来てほしいだが。」

「わかりました、では、いつまでに？ 了解です、はいでは。」

「少し出てくる。留守を頼む。」

「は、お気をつけて。」

首相官邸 夜

案内人に案内され前回の執務室に入ると、いつもの首相が執務用の机に座っていた。

「首相、お呼びですか？」

「ああ、君を呼んだのは、他でもない。君に頼みがあってな。」

「頼みというのは？」

「ああ、兵器生産の他に他の分野の技術支援をしてほしいのだよ。」

「技術支援といわれましても、わが社だけでは、少し荷が重いと思います。 (おいおい、これ以上事業を増やすつもりですか。うちの社員が死ぬぞ。) 」

「わかっている。ここは、政府直轄機関を利用してもいい。他企業にも支援要請を行うつもりだ。」

「・・・ (それって、うちに旨みが少ないような・・・まあいいか。) では、具体的な支援の内容は？」

「それに関しては、これにピックアップしている。読んでくれ。」

「では、拝見します。」

賢次は、首相から計画書の確認を行う。

大まかの計画書に関しては、このような感じである。

食料分野

現状における合成食料の生産性の向上、大元は味覚の向上であるが、遺伝子分野を利用して、耕作地に向かない環境に作物などを生産し、全体的な生産性を上げる。

地下や施設などを利用しての機械的な生産を行う。

エネルギー分野

石油資源の生産の激減により、現状では発電方法を石炭方式火力発電と原子力発電所が主ではあるが、現状においては発電量がギリギリのため、増加と新方式の考察を行う。

また、石油の代替となる物の発見、生産を行う。

基本はそんな感じである。 軍事戦略関係は、流石にないみたいである。

「・・・なるほど、計画の概要は把握しました。」

「可能かね？」

「可能ではあります。一つ目に関しては、新しい方式の合成食料生産プラントがあれば可能ですし、遺伝子分野に関しては課題をクリアしてますから、少しお時間をいただければ直ぐにでも。」

次に、エネルギー分野に関してですが、しいて言えば、MSの核融合方式の利用も可能ですし、発電所レベル程度なら、若干大型になります。が効率のいい発電システムありますので、それでいいかと、後はソーラーパネル方式、循環型エネルギー施設メカリスなどがあげられますね。（まあ、他にもあるんだが極端な物はまずいだろ。うな。対消滅とかは流石に・・・。） 石油の代替方面に関しては、科学的に生成も考えましたが、生産性の面を考慮しても藻や遺伝子組み換え等がいいかもしれませんね。 流石にどこまでするかですが。」

「なるほどな。意外と多いな。では、Mr・秋津、予算と規模を考えて一番有効的な方法をまとめて、報告してくれないか。」

「わかりました。では、後日まとめてお送りします。」

「ああ、頼む。」

「首相、他は？」

「今のところは大丈夫だ。また、頼み事をするかもしれない、頼むぞ。」

「わかりました。では、首相、此方の頼みを聞いてくださいますか？」

「・・・場合によるが何かね？」

「一つ、私どもの移動と輸送手段に超大型輸送機の使用許可とわが社の実働部隊の設立を支援してほしいのです。」

「・・・うん、少し難しいが、何とか検討してみよう。まずは、その超大型輸送機と実働部隊の設立計画プランはどうかね？」

「ええ、こちらにご用意してます。」

アタツシケースから、書類を取り出し計画プランを渡した。最初は、熟読していた首相だが、だんだんと頭を抱えていた。

以上の簡単な内容はこうである。

超大型輸送機 ガルダ級 全長317m、全幅524m、主に海上、陸上等の大型空港などがあれば離着陸可能、航続距離のほぼ制限なし、整備のため大型空港の必要性あり。

なお、わが社で運用する機は3〜4機、豪軍に使用する機として2

機を生産予定、他軍に向けての生産はなしの予定。

追記：我が社の港湾施設を利用して荷物の積み下ろしを行うため、一応、整備のため豪州空港の使用許可の依頼を含める。我が社では機銃などの武装は施さずに普通の輸送機として使用。豪軍向けは、機銃とミサイルランチャー等の装備が施される。

企業実働部隊に関して、主に元軍人や社員にMS等の適正があれば軍訓練後、実働部隊に起用しテストパイロットまたは、新人育成に繋げる。次にそれにおける過程を終了すれば、軍の作戦に組み込み実戦データの収集を行う。実験が完了後、実験部隊は解散。PMCとして、作戦に応じて任務を行う。なお、結果が良好であれば、増員も視野に入れる予定。

上記が困難の場合、我が社と軍の共同で実験部隊の設立を行う。この場合、志願者を軍の育成にシフトする。

以上が計画の概要である。

「・・・すごいな、いつの間にこんな大型輸送機の構想を？」

「少し前ですね。それで可能でしょうか？」

「可能といえば可能だな。確かに値段と整備を考えても我が軍では2機が限界だな。だが、それがあれば戦略的に有利になるのは確実だな。しかし、君の所は3〜4機も有って大丈夫かね？」

「なんとか、大丈夫です。元々こちらに必要な機体ですし。（いずれにせよ、強行作戦に必要かもしれないが、状況次第だろうな・・・。）」

「そうか、それに関しては、どうこう言わんが、こちらでも必要に

なるかもしれないから、頼むぞ。次に実働部隊に関してだが、少し難しいかも知れんぞ。当てはあるのかね？」

「現状では、構想のみですから、志願者は今のところ、たいしてですな。」

「わかった。こちらで、何とかしてみよう。テストパイロットと教官に関しては軍の方がいいだろう。それに新人育成は軍と共同で行う形にしておくといい。」

「わかりました。（ギリギリ妥協点か、急がないといけないしな。まあ、いい。）では、それをお願いします。」

「ああ、他には？」

「そういえば、アラビア戦線に関してはどうなったのですか？」

「そういえば、君は知らなかったか。こちらに報告書があるから読んでいいぞ。」

「・・・首相、私のような民間人にお見せして大丈夫なのですか？」

「問題ないといえば、嘘になるが、いずれにせよ君のときの兵器がどうなったか知りたいだろう。構わんよ。」

「では、拝見します。」

賢次は、報告書を受け取り、確認を行った。
ここから、賢次の行動と豪軍の行動を併用して、ダイジェストで行う。

1996年10月中旬 新兵器との合同演習の開始、結果一定の成果を得る。

同年11月 議会により閣議決定に派兵が決定する。

12月 第一次先遣隊スエズに向けて派兵開始

12月中旬 最終の派遣部隊が、スエズに向けて出発。 同時刻、賢次、南極に帰還を開始

12月後半 スエズ防衛と撤退する部隊の合流のため、半径20km圏内に部隊展開を開始。
このとき配置された、部隊はF-18とMS部隊とホバートラックで、今回、メーサーに関しては後方のスエズに配置されていた。

12月30日 前線からの撤退する部隊を確認、部隊には損失機が多数確認された。

・スエズ防衛網の構築が困難を極めたため、時間稼ぎのため多くの部隊には対岸から20km防衛を任される。

31日 BETA 3万スエズに向けて侵攻開始。

・同時刻、ハイブから後続の4万のBETAが移動開始。

1997年1月始め昼 BETA、3万 国連軍と戦闘開始。

・同時刻、賢次の部隊インド近海方面に潜入。

・後続のBETA 4万 都市マーンにて移動停止。

夜、対岸の国連軍は善戦、豪軍被害軽微。 BETA 3万の第二次攻撃隊、移動開始。

次の日の夜明け、国連軍、第二次攻撃等により善戦するも補給が追いつかず、被害多数。

・豪軍いくつか戦術機の損失機を出す。MSは損傷あれど、継戦能力に支障なし。

・賢次、アカパ湾方面で後続部隊の殲滅のためマーンに向けて上陸進軍開始。

朝、国連軍、多くの被害を出しつつも第二次攻撃隊の殲滅に成功。

・前線BETA本隊が進軍開始、昼前に接敵、国連軍と交戦を開始。

昼、国連軍、補給などにより戦闘継続が困難になり、スエズに向けて後退を開始、前線BETA 2万スエズに向けて行軍開始。豪軍、後退開始。

・同時刻、都市マーンで後続BETA 4万、スエズに向けて進軍開始。

・賢次、進軍阻止のため戦闘開始。一時間にわたる激戦の末に切り札の三発のサテライトキャノンを使用、結果後続の8割を殲滅することに成功する。残存のBETA、ハイブに向けて撤退を開始。

・同時刻、前線のBETA ハイブに向けて撤退を開始。国連軍、親の敵のようにBETAを追撃。結果約6割の殲滅に成功する。

なお、この戦闘における国連軍の被害は全体の5割という。豪軍、戦術機4機の損失以外は何とか生き残る。

・スエズ、防衛網の構築を完了する。

なお現在は、スエズ方面の東 半径20km圏内を防衛網としている。

と以上の出来事である。

「・・・なんか大変だったみたいですね・・・」

（結果は全体的

にマシ？なのかな？」

「・・・そうだな。だが、MS等がなければ、我が方は全滅して
いただろう感謝しているよ。」

「ありがとうございます、ですが、もう少し数を揃えないと、これ
からの戦闘には困難ですね。」

「ああ、とりあえず。軍からも結果は良好だから追加の要請が多
い。引き続き量産を頼む。」

「はい。では、時間ですので、そろそろ本社に戻ります。」

「そうか、計画の件、頼むぞ。」

「はい、首相も此方の要望、お願いしますね。」

「ああ、任せておきたまえ。」

社長室

（これで、此方の計画の進む可能性が出てきた。後は誰が来るか
だな。

しかし、国からの要望は色々あるが、当たり障りのないものでいい
だろうな。やりすぎても問題あるし。

さて最後に、アラビアの結果だけだ。確か、スエズ運河まで下が
って戦闘したんだっけ？・・・かなり、歴史が変わったと判断す
べきだろうな。おそらく歴史外のことが起こるのは必至だろうな。

・・・いずれにせよ、何とかしないと。・・・とりあえず仕
事だな。）

歴史が変わったのかもしれない、もしかしたら修正されたのかもしれない。どちらにしても、現状を大きく変えるにはきっかけが必要といえる。

待て、次回・・・。

34部・事業を広げるには、手が足りない。（後書き）

本編でした・・・。

今回の国からの要望書に関しては、特に関係ありません。

ただ全体の事情が良くなる程度でしょうか・・・。

後の話には出てくることはないと思うのですが。

ですが、マブラヴでは、石油資源の宝庫である。アラビア半島が取られているわけですから、一番影響があるのではないのでしょうか？希土類などの宝庫である、中国もそうですし、世界はどうやって資源対処しているか？ですが。

主人公の場合は能力で資源が取り出し放題ですから、問題ないのですが、色々考えてしまいますね。

次に、ガルダに関してですが様々な作戦に使用されると思います。出てくるのは、今年の中盤以降になるかと。度々、話には出てくると思います。

次に、実働部隊に関してですが、いくつかオリキャラが出てきますね。

どこまで活躍するかですが。番外編として出すべきなのかな。話数的に無茶苦茶多くなりそうです。考え中です。

最後にアラビアに関してですが、・・・今までと辻褄があっているか？

少し、自問自答しているところです。

大まかに曖昧にすべきなのでしょうか、ここは細かく書くべきかな？ということになりました。

ここから全体的に少しずつ歴史が変わると思います。

感想や批評がありましたらお願いします。

35部・外も重要だが内も見ないといけない。(前書き)

遅いですが、あけましておめでとうございます。

何とか、執筆を頑張ってみようと思います。

今年もよろしく願います。

今回は、企業方針と内部でしょうか？

では、本編を・・・。

35部・外も重要だが内も見ないといけない。

35部・外も重要だが内も見ないといけない。

1997年2月 ジエフウティー社 本社・会議室

前回、重役、担当者の報告を聞くため会議室に集めていた。

「では、現状報告を頼む。」

「はい、では報告させていただきます。」

様々な報告が上がっていたが、全体の状況はこのような感じである。

兵器開発分野

ゼク・アイン簡易索敵型の試作型が完成。 現在、豪軍に納入し終え、結果報告待ちである。

ゼク・アイン改簡易索敵型 豪軍仕様 性能表

RMS-141 ゼク・アイン改 UC0093仕様機

全高19.2m

本体重量 装甲材チタン合金セラミック複合材等の変更により 2

3.5t

なお、他国向けは、ガンダリウムであるため、本体重量37.6t
基本兵装 ビームライフル ビームガン ビームサーベルをそれぞれ一基ずつ。

この機体の主な、特徴は着脱可能な背中中のレドームである。 また、
強行偵察を主としているため大型ブースターユニットを装備 索敵
と操縦を分けて行つたため複座式タイプである。

なお、この場合、第四種兵装に該当することになる。

メーサータンクの追加ブースターに関しては、予算の関係上の問題・機体や搭乗者の負担を考慮しても、局地的な使用方法に限られたが実験生産が決定した。これに伴い生産数の調整を図る。

戦術機の使用可能な兵装に関しては、射撃兵装にビームマシンガン
ビームショットガン ビームガン 近接戦闘用にEパック使用型
トマホーク ツインブレードを採用した。

販売戦略

現在、各国に向けてMS等を販売しているが、一応、豪政府に許可をもらい国外販売しているが、現在各国地域に企業支部がないため、販売の円滑化と輸送関連の中継基地の必要があった。よって、年内に各国に支部と後の輸送部隊と実働部隊のための基盤を整える。兵器の販売に関しては、国内向けと国外向けで分けられているが、現在と後の販売をそれぞれ明記する。なお、予定は1997年2月、現在において、こちらに存在しないため。

国内向け

ゼク・アイン改 +

92式メーサータンク改

ホバートラック

実働部隊用と軍向け（予定）

ガンダムMk-?（予定）

ZプラスA型（予定）

FAZZ（予定）

93式ツインメーサータンク改（予定）

実験完了後派生型の開発予定

輸送用

ガルダ級大型輸送機（予定）

国外向け

ゼク・アイン

92式メーサータンク

ホバートラック

93式ツインメーサータンク（予定）

上記の実験完了後、国外向けの兵器の開発予定

輸送用

ミデア級輸送機（予定）

兵器生産分野

現在、本社工場のみで国内国外に向けて兵器生産を行っている。

去年の生産量

月産MS 7機、メーサータンク 3車 ホバートラック 15車

現在の生産量

月産MS 8機、メーサータンク 4車 ホバートラック 16車

現在の本社の生産量である。

以上が、現状報告である。

「・・・なるほどね。では、まずは偵察型MSに関してだが、次期生産型が整うまではゼク・アイン型で行う。」

「は。」

「次に販売戦略に関しては、各国の安全地帯に支部を作ること。」

ああ、それと日本は、絶対、北海道か青森方面に支部を作ってくれ。」

「

「・・・社長、何か理由があるのでしょうか？ 場所的に東京か大阪方面が適当かと思うのですが？」

「理由は。（来年、BETAが日本へ攻めてくるといったら、まずいな、どう言おう）えーと、そうだなー。まあ、日本は外資系企業に対して排他的な所があること、後は、日本国内において九州地方の退避勧告が発動中のはずだ。BETAを考慮して北日本に支部を作るのが望ましいと考えているのだよ。」

「・・・わかりました。何とか日本政府に交渉をやってみます。」

「ああ、頼む。各国に対する兵器受注量の報告は？」

「はい、各国に対しての注文量ですが、先の派兵でMS等の性能を見せ付けることが成功したことで、現在、各国注文数が増加しました。オーストラリアとEUとアメリカという順に特に多く、後はソ連と大東亜連合という形です。アフリカ連合軍や中東連合軍に該当する国連軍ですが、いくつかあったようです。最後に日本に関してですが、なぜか注文がありませんでした。」

「うーん、受注数の増加したのがいいと考えるのが、妥当か。・・・

・しかし、日本からの注文がないのはなぜだ？」

「わかりません。ただ、台所事情が悪いのではないのでしょうか？」

「・・・そうではないと思うが・・・。（藤倉さんの言った通り、外部と内部の圧力が強いと言うことか？・・・藤倉さんに接触しないと状況が分からんな？　どうするか？）　まあいい、とりあえず受けた注文数を各国に送ってくれ。」

「はい、了解しました。　続いて生産している種類とは別なのですが、我々の生産しているMSではコスト面で大量に揃えられないため、ゼク・アインとは別にコスト面で安いMSを生産してほしいということでした。」

「・・・コスト面ね。（おいおい、うちの生産方法が明らかに違うから、南極での生産は資源コストや人的コストも関係ないからなあ。　まあ、タダでもいいんだが、この世界の産業を破壊する恐れがあるから、ぎりぎり許容範囲のコスト調整しているが。」

「・・・そのお陰で、利益が右肩上がりになりそうだが・・・しかし、これ以上安くしろだと・・・ふざけているのか。・・・いや、我々の発言力の強化のためにあえて受けてやろうじゃないか。」

「ここにおける、コストだが、フル装備のゼク・アインの値段は大体、戦術機F-15または不知火位に設定されている。」

「どうしますか、社長？」

「ああ、代わりは大体決まっているが、もう少し時間をくれないか、考えておく。」

「分かりました、この件は一時的に保留にしておきます。」

「ああ、決まり次第、指示を行う。」

「かしこまりました。・・・以上で報告終わります。」

「では、以上で会議を終了する。では、以上で事を励んでくれ。
解散。」

「「「は!」「」」

社長室

賢次がオフィス机に座っていると、ノック音が響き渡っていた。

「入れ。」

「失礼します。」

秘書がドアを開けると副社長と警備部長の二人が入ってきた。
賢次は秘書に目配せを行うと、部屋を出て行った。

副社長

「社長お呼びで。」

「ああ、例の件だ。」

「・・・やはり、内部に間者ですか？」
苦虫を噛み潰した顔していた。

「あーそうだ。警備部長、報告を頼む。」

警備部長

「はい、現在において重役に怪しい動きはなかったのですが、下に幾つか確認されました。」

「・・・そういうことね。」

副社長

「社長どうしますか？」

「・・・放置しておいてくれ。今はね。」

「よろしいので？」

「ああ、全容が分からん以上は、こちらからは動けないが。（此方に害する勢力なら、報復するがな。） 警備部長、念のため豪軍に連絡しておいてくれ。」

「はい、社長。そのように。」

「ああ、では頼むよ。」

「はい、では失礼します。」

警備部長が部屋を出て行くと、副社長と二人きりになった。

「しかし、社長、大丈夫なのでしょううか？」

「・・・リスクがあるね。とはいっても間者のどこの紐か分からない以上は、誘つか掃除を行うかになるな。調べる必要があるから泳がすよ。」

「分かりました。では、社長、私はここで失礼します。」

「ああ。」

副社長が部屋を出て行くと、賢次は一人社長室で考えていた。

（まったく、どこの馬鹿が分からんが、やってくれるな。設立パーティーでも遭ったが、勢力はかなりでかいと見るべきだな。うちの重役連中まで疑いたくないのだが・・・さてどうしたものか。）

人生思惑通りにいかないものだが、企業の苦難が続くものであるかもしれない。前門のBETA、後門の人間の感じである。

待て、次回・・・。

35部・外も重要だが内も見ないといけない。（後書き）

本編でした。

今回は、行動方針でしょうか。

内容が進んでいないような気がします。

すこし、おさらいになっています。 申し訳ない。

間者に関してはパーティにおいても出てきましたが、少しずつ企業内部に表面化していきます。

とはいっても、オリジナルの勢力ではないのですが、色々でしょうか？

そんな感じですね。

感想や批評がありましたらお願いします。

36部・修正が難しいときは、作り直せば良い。(前書き)

なんか、お久しぶりです、ね。

今回は、交渉と今後の展開を示唆する話でしょうか？

では、本編を・・・。

36部・修正が難しいときは、作り直せば良い。

36部・修正が難しいときは、作り直せば良い。

1997年4月 社長室

前回の兵器販売の報告から帝国の現状を確認するため、藤蔵外務次官に接触を図ろうとしていた。ただ、此方と向こうのスケジュールが噛み合わず4月現在まで会談の場が開かれなかった。

そのため、今回、時間が取れた賢次も椅子に座って、これから事態がどうなるか頭を悩ませながら、外務次官が訪ねてくるのを待っていた。

「社長、お見えになりました。」

同室に居た秘書が受付からの電話を応対して外務次官が来たことを告げていた。

「わかった。応接室に通して、すぐに行く。」

「はい。」

返事と手のひらで合図すると秘書は、電話口で応接室に案内するよう指示していた。

その後、賢次は各種書類を纏めた封筒を持って同階にある応接室に向かい、扉を開けると前回の二人がソファに座っていた。

二人は、賢次に気づくとゆっくりと席を立ち上がった。

「お久しぶりです。藤蔵外務次官に村本さん、お忙しい中、およびたてして申し訳ありません。」

「いえ、こちらこそ。」

二人に笑顔で握手を交わし二人を席に座らせると、賢次もその対面に座った。

「では、秋津社長、私共にご用件とは？」

「お尋ねしたいことを2、3程とお頼み事がありまして、それでお呼びした次第です。」

「内容によりますが、出来るだけの範囲でお答えします。」
そう答えると対面の二人は、顔を引き締めていた。

「では、一つ目は我が社のMS等の注文がなかったもので、少々気になりましたもので、その理由をお聞きたいのですが？」
賢次が、そう質問すると藤倉外務次官は、少し俯くとすぐに顔上げ口火を切った。

「あの時にもお話したのですが、大まかは内部の件です。後は、財政問題でしょうか。」

そう端を発した外務次官は、内容を要約するところなる。

日本帝国においてBETAに対する対策は、当然早急のものではあった。しかし、内部では外務次官や首相等が属するAL派、AL派に懐疑的な保守派、アメリカに親交が深い派閥、中立派を少数という派閥に分かれていた。

全体的にジェフウティー社のMS等に関しては一定の関心はあったが、帝国企業に繋がり強い議員等にとっては自国の兵器が売れなくなることで、また、日本は比較的アメリカの接点が多いため問題を起こしたくないこと等が挙げられた。本音としては機体をそのまま買わずにライセンス交渉しろということだったが。

次に財政状況に関してだが、BETAに対する本土防衛等の戦力増強に力を入れてはいたため予算会議で購入が検討されたが、財政的な方面で新兵器のMSに関しての購入は保留、メーサータンク等に関しては来年以降に持ち越しという状況だった。

事情を聞いた賢次は、平静を装っていたが手のひらに爪を立て考えていた。

「・・・（厄介なことになっているな・・・。帝国にいくつか送ってもいいんだが、ボランティアではないしなあ。・・・秘密裏に送るか？・・・いや、後の事を考えると下手にアメリカ等に目を付けられたくないな。

重要な時期でもあるんだが。・・・どちらにしても日本支部設立やBETAが日本に侵攻するまでは様子見、か。いずれにせよ世界は歴史に沿って状況が変化している以上、白銀君らの死亡や捕獲は避けられないかも知れないな、だが運命どおりさせんよ、絶対に、な。

なんとか、主人公らが生存し保護さえしていれば、おそらく干渉も関係なく物語最後の舞台カシユガルハイブの直接攻撃が可能になると思うが。・・・無理だろうな。

だが、仮でできたとしても日本での行動は、歴史どおりBETAが日本に侵攻してきても裏で動くのは困難だろうし、侵攻時期には多くの民間人がいるかもしれない、場所が場所だから大量破壊兵器は制限されるだろうし、それ以前に我々に繋がりが無い日本で直接大部隊や大型兵器の介入をしたらまずいだろうな、おそらく日本だろうと国連だろうと我々を敵と見なすことになるな、さすがにこの世界の日本に助ける義理があまりないとはいえ支援をすべきか？・・・頭痛が。

なら、困難極めるなら介入は、光州作戦や日本侵攻等を無視して主人公の保護を最優先にするか？・・・考えておくか。」
「そう悩みながらも、話を入れた。」

「・・・事情は分かりました。そちらの件、流石にわが社が口に出すわけにはいきませんね。」

「申し訳ありません。何とか、お約束の根回しの件を何とかしようとしていたのですが。」
「そう言いながら、顔を曇らせながら頭を下げていた。」

「お気になさらないください。この程度で契約解除というわけではないので安心してください。（いずれにせよ、派閥を跳ね除けるほどの力は現在のAL4派にはないということか。干渉も関わっているかもしれないが、おそらくアメリカの横槍だろうと思うが、さて。）」

「助かります。他は？」

「そうですね。試供品として送った、兵器はどうでしたか？」

「ええ、こちらでも中々の高評価ですよ。そのせいで、AL計画の主任が貴方を連れてこいと、再三要求されていましたよ。窓口は私共ですから余計にですよ、ははは。」

苦笑いしながら言っていたが、賢次自身は笑いながらも内心冷や冷やになっていた。

「それはそれは、大変でしたね。（まずいな、介入の失敗保険にAL4の監視役を送る予定がある以上、接触する可能性が出てくるな。・・・対策を考えておくか。）それで、向こうは、何か要求でも？」

「ええ、実は今年特殊任務部隊設立に伴いMSを幾つか送って欲し

いのです。 当然契約金も払います。」

藤蔵氏は、アタッシューケースから関係書類を取り出し、兵器の要求数と契約金などが書かれていた関係書類を賢次に渡した。 賢次は、関係書類を10分近く熟読していたがMS要求数と契約金に関して無茶な要求ではなくて安心していたが、他の方面で問題が噴出する恐れが出ると考えていた。

「・・・それは構いませんが、それは帝国外務省宛ですか？（国連関係で金が出るとのことか・・・。 それに特殊任務部隊？ A-01方面か？ 送るとはいえこちらはアメリカの目を欺く必要がある上に、日本は日本で表向きは文句言わないだろうがやりすぎたら、いつか不満が噴出するだろうし・・・絶対面倒なことになったような・・・。 計画の一部のためとはいえリスクが高くなりそうだな・・・。）」

表情は笑顔ではあったが内心は負債を抱え込んだのではないかと思っていた。

「ええ、何とかお願いします。」

「わかりました。 さすがにアメリカ等に文句を言われたくないので、契約金は前払い、受け渡しはそちらも極秘でお願いします。」

賢次自身がこのような要求したかというAL4計画に表立って関わりたくないこと、正確には白銀武などの物語の主要メンバーの接触は干渉等の問題が生じる可能性が出るためだが。 そして今年成立するAL5計画の牽制のためもあり、AL4計画に優先的に兵器を送る事は顧客等にクレーム等が来ると判断していた。

「わかりました。 では、契約金と受け渡しは後ほどで。」

「ええ、商談は成立ですね。」

そう言って握手を交わした。

「では、次はわが社のお願いなのですが、日本支部の設立や実働部隊等の話はお耳に入っているとは思いますが？」

「ええ、そちらの社員の方にもそう聞いています。」

「実は、輸送時間の短縮するため超大型輸送機ガルダを建造（取り出し）しているのですが、それがまもなく完成し運用が可能になります。それを利用し全世界に兵器輸送を計画しているのですが、わが社は新興企業なもので輸送促進のため空港や港の検査などの手続きを簡略化して欲しいのです。（まあ、本来の目的は、民間や軍の検査がメンド・・・じゃなかった、ガルダという象徴を全世界に見せ付けることで我が社の権威を絶対的なものにするためであるが、ここまでは、誰でも考える、か。）」

全世界でMS等の兵器は全体的に信頼性の足るものではあるが、設立して間もない企業が多く、信頼を勝ち取るには象徴などを出すのが手っ取り早いと考えたためである。

そう言われた外務次官は、賢次の少々無茶な要求に驚いていたが、それ以前に疑問が出ていた。

「そ、それは、さすがに別の部署になりますのでなんとも言えませんが、何とかやってみましょう。（何か目的が？・・・要求に早急で強引なところがあるな。なぜだ？）しかし、そのような大型輸送機があるのでしたら、我が方にもお売り出来ないでしょうか？」

「それは、さすがに自国内販売にだけになっておりますし、何分建造費（能力負荷）が高みますから、現在は豪軍に2機、我が社に4機、合計で6機の予定になっていますから、それ以降の建造（取り

出し）の予定はありませんね。」

「そこをなんとか、なりませんでしょうか？（何とかこちら側に有利しないとまずいな。向こうも納得する材料が必要だな。）」
そういわれ賢次は腕を組んで熟考して言った。

「では、わが社の今回の要求を受けていただければ、大型輸送機ガルド級ではないのですが、ホバー性能がある輸送機ミデア級を他に先駆けてライセンス許可と実機を幾つかお譲りするのはどうでしょう？ さすがに、そちらの実験結果により、ライセンス選択権はお任せしますが……。」

「……わかりました。本国にもそう伝え、要求に関しては関係書類をまとめて送ってください。また、これに関しての会談日程をお願いします。」

「分かりました。では、後ほどそちらに関係書類と日程を調整してお送りいたします。」

「ええ、よろしく願います。」
そう言いながら握手を交わし、会談を終えた。

サイド 藤蔵外務次官

藤倉泰明は、日本行きの飛行機に乗り込み隣の座席にいる部下の村本洋司に言った。

「なあ、村本。」

「はい、外務次官。」

「もう一度、会談して思ったのだが、秋津社長は何か隠しているとは思わないか？」

「私には何とも・・・ですが、あの企業の事業展開速度は異常と呼べるほど動き回っていますし、MS等の兵器生産も開発速度も他国を圧倒していると思います。」

「・・・そうだな、だがもっと根本のところにあるのではないかと俺は思う。」

「と、いいえますと？」

「国連からの情報を聞いているか？」

「確か、近年、謎の部隊が確認された、でしたか？」

「ああ、君も半信半疑だろうが、おそらくそれらに関わっているのが秋津氏ではないかと思っている。」

「それは、憶測ではないでしょうか？ 確かに秋津氏がジェフウテイー社を立ち上げる前に各国企業の接触、そしてそのジェフウテイー社にも不可解な所が多い上に、設立時期と謎の部隊の出没時期もほぼ合致しますが・・・まだ、判断材料するにはどうかと思います。」

「・・・まあ、そうだが、だが、いずれにせよ何らかの形で関わっているのは確かだろうな。 帝国情報部や各国情報部も動いているが、オーストラリア政府やイギリス王室や他企業等が後ろ盾にいる以上は国連もアメリカもこちら動きようがないだろうがな。」
「そういわれ、部下の村本は驚愕していたがその同時に疑念の念を抱

いていた。

「しかし、外務次官。なぜ、上層部はそのような得体の知れない人物に接触しろと命令したのですか？」

「それは、聞かなくても分かるところだが、A L 予備計画の件もあるだろう、上も日本帝国内部が難しい状況の以上、スポンサーなってもらえば両者ともに利益が大きいからだろう。まあ、兵器購入が多いE U もアメリカも得る利益を考えても、向こうは立場を利用して購入しているに過ぎないということも挙げられるな。」

「確かに、それは言えますね。」

「・・・まあ、お互いを支援しあっている間は、味方といえるだろうな。どこまで、味方についてくれるかだが。」

「そう、ですね・・・。」

飛行機が月明かり輝く空を日本に向かって飛んでいた。

サイド 賢次

月明かりを照らす社長室で机の周りを歩きながら考えていた。

(A - 0 1 が出てくるか・・・M S を送れ、ねえ！ゼク・アインをそのまま送ればいいと思うが、A L 4 側には出来るだけ距離をとっておかないといけないな、それとできるだけ政治的な発言力を高めないといけないな、あちらを支援している以上A L 5 側の妨害の対処を考える必要があるな。後は白銀君らをどう確保するかだな、さっさと保護できればいいが干渉のことを考えるとB E T A にやられる寸前まで手が出せないかもしれないな。・・・その成否で計画を加速させることが出来るかもしれないな。・・・やらないより

マシか。)

歩くのをやめて席に着き椅子を回して身体を窓の外に向け賢次を照らす月を見ていた。

「月か・・・。(そういえばそちらにもハイブがあったな。ハイブ攻略戦を地上、大気圏外からの援護でより戦況が有利になるのはいいが・・・どうするか。宇宙軍や宇宙でのBETA戦等の問題が出るが時期を見て制圧する必要があるかもしれないな着陸ユニットの件もある、アリスに相談したほうがいいのか?)」

月は、煌々と地上を照らしていた。

待て、次回・・・。

36部・修正が難しいときは、作り直せば良い。（後書き）

本編でした。

話・・・進んでいないな。

当分の間、BETAに対する戦闘も無く続くとは思いますが。

月での話は、あったという描写になりそうですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6417o/>

創造と干渉力（マブラヴ編）

2011年2月13日13時51分発行